

日本自動車史と

梁瀬長太郎





梁瀬自動車株式會社  
取締役會々長  
梁瀬長太郎氏の近影

古稀の壽を迎へて  
(昭和23年12月撮影)



梁瀬自動車株式會社  
元相談役  
山本条太郎氏





會長嚴父 梁瀨孫平氏



會長夫妻の結婚式記念  
(明治40年3月撮影)



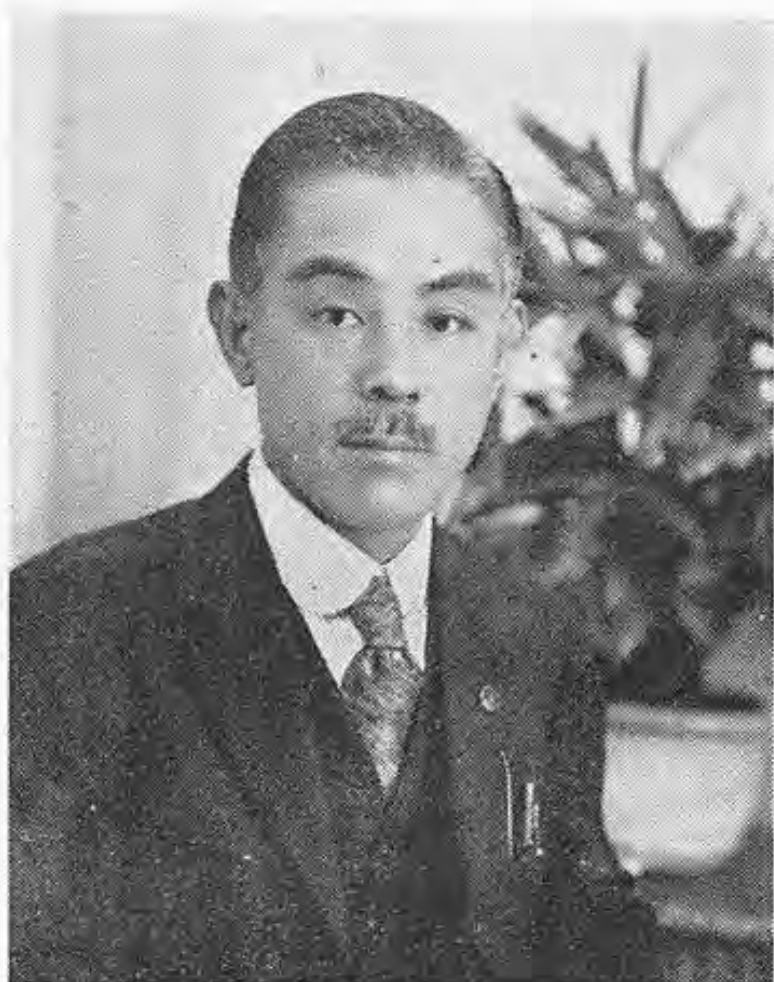
會長夫妻の銀婚式記念  
(昭和7年3月撮影)



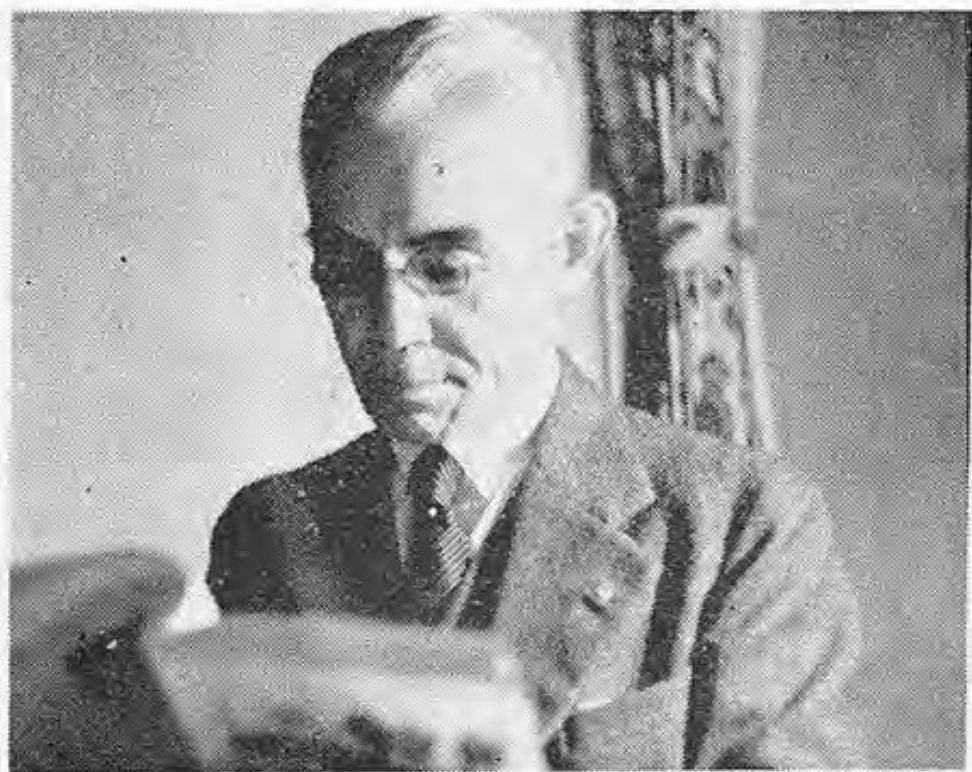
會長の三井物産時代 印度ボンベイにて（明治38年撮影）本文29頁参照



海外旅行 米國ナイヤガラ瀑布前に於ける會長夫妻  
（大正12年6月撮影）



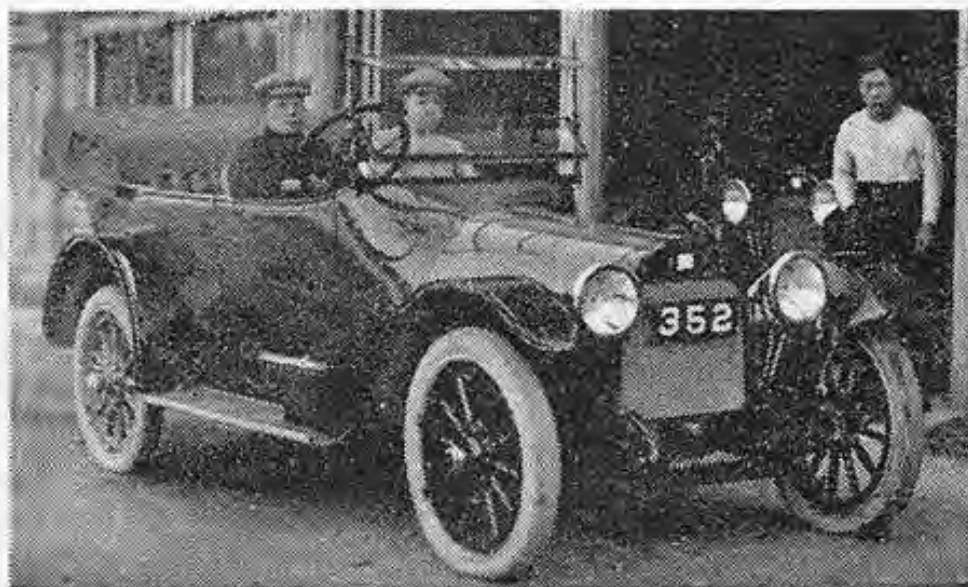
東京商工會議所常議員時代の會長（大正13年撮影）



番町邸に於ける會長（昭和12年社長の撮影になるもの）



日比谷に於ける梁瀬商會前と一九一六年型ビュイック



(大正4年5月撮影) [本文41頁参照]



梁瀬自動車株式会社(吳服橋時代)  
屋上に自動車の広告塔あり

(大正6年1月撮影) [本文77頁参照]

平和記念の花自動車 吳服橋本社前  
 (大正七年十一月十一日撮影)



一九一七年型ビュイック・フェートン  
 (月島にて)

(大正九年撮影)



ヤナセ號と山階宮、同妃兩殿下  
 (大正十二年春撮影)

〔本文一七九頁参照〕





震災後の東京市営バス、シボレー車  
に架装された欄間付のもの

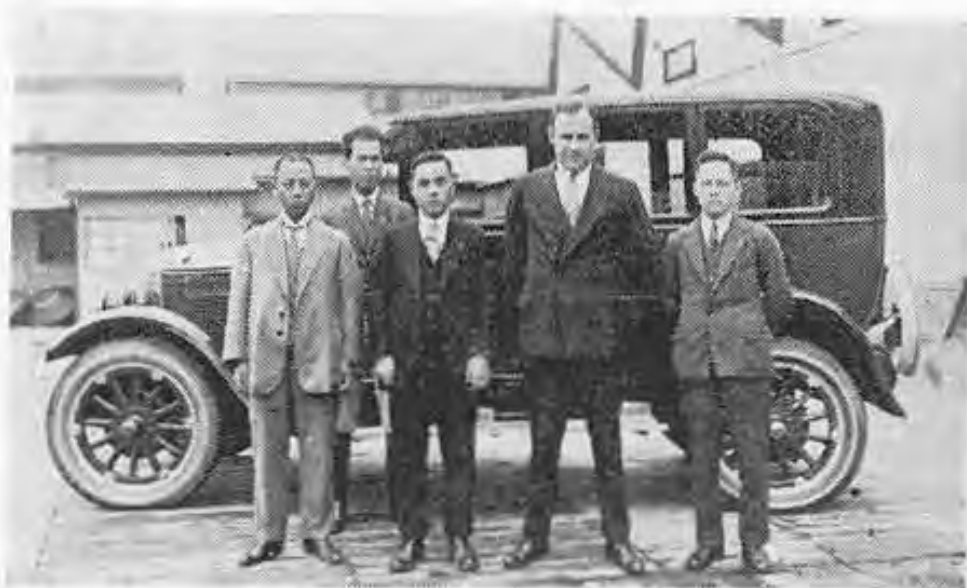
(大正十三年撮影)

〔本文一〇二頁参照〕



オート・シヨウ開かる  
マネキン嬢を使つた當時は豪華な  
催し

(大正十二年撮影)



デユボン會社のボー技師を迎へて  
(大正十四年撮影)

〔本文一〇二頁参照〕

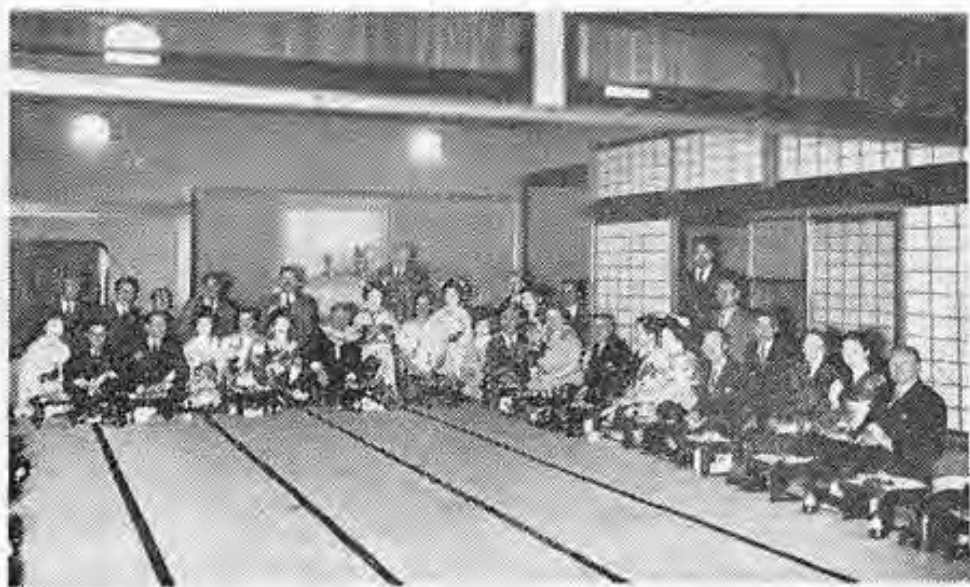




返子養神亭に於けるG・M社との懇談會  
（大正十四年撮影）



クライスデール車に架装されたバス  
（大正七年撮影）  
〔本文一〇六頁参照〕



G・M社ライレー・ウイランド兩夫妻  
歓迎會（新喜樂にて）  
（昭和十四年撮影）



オイル・ヤナセチーム結成芝浦グラ  
ンドにて（昭和十年十月廿日撮影）



社員家族慰安會  
千葉縣野田の苺狩り  
（昭和十年六月撮影）  
〔本文七〇頁參照〕



社員家族慰安會  
鎌倉梁瀬別邸にて  
（昭和十一年夏撮影）  
〔本文七〇頁參照〕



梁瀬ガレージ（日比谷）  
 （右方の建物が梁瀬商會時代のもの）  
 （大正末期に撮影）  
 【本文二四八頁参照】



ビュイック38年式に取付けた代燃車の  
 の運行テスト 【本文二一七頁参照】



代燃車テストと現社長  
 （何れも昭和十三年秋撮影）

高濱工場にて架装せる豪華バスの姿態



其の内部（昭和廿四年撮影）  
〔本文六三頁〕

芝浦に完成した新装のO・A・Sサービス・ステーション（昭和廿四年九月オート・ショウの時撮影）





漫画になった會長



昭和十年頃田村辰三氏の描いたもの

古稀の壽を迎へた昭和廿三年中田寛氏の描けるもの



最近の寫眞より五十嵐平達君が描く





クラブ・エスクアイヤーに於ける  
古稀の壽 祝典に挨拶する會長  
〔昭和廿三年十月六日撮影〕  
〔本文二七七頁参照〕

會長の御一家  
〔クラブ・エスクアイヤーにて〕



會長とO・Bメンバーの記念撮影〔クラブ・エスクアイヤーにて〕



オートショウに於ける三笠宮殿下と社長  
(昭和廿四年九月廿九日撮影)



高松宮、同妃兩殿下を迎へて  
(昭和廿四年九月十二日撮影)

## 序

明治三十三年、ボクサー事變の起きた年、私は神田一ツ橋、東京高等商業學校の豫科に入つたのであるが、多くの同級生中に梁瀬長太郎君がおられて、それ以來四十九年の永い年月の間、私は同君の厚誼を得て今日に及んでゐる。學校にいた時分、やんちゃな同輩の中でも同君はむしろ老成してゐた方で、こつ／＼勉強する型であつた。入つてから二三年の間、私はボートの選手になつたりなぞして學業をそつちのけにしたのに反し、同君は餘リスポーツもやらず、眞面目に振舞つてゐた。年も私よりは二つ三つ多かつたせいでもあつたらう。學窓にいる事四年、明治卅七年、梁瀬君も私も學校を出た。夫以來われ／＼二人は離れ／＼になつてしまつて、君は三井に入るし、私もその翌年外交官試験に合格して、直ぐ日露戰爭直後の露都へ赴任することになつた。それ以來十數年の間、稀に東京に歸つた時に、われ／＼同級の者の集りである三七會で合して、舊交を温める位のもものではあつたが、何時の間にか、同君は梁瀬自動車會社を作り、吳服橋に大きな店を出して、盛んにやることになつた。梁瀬といへば知らぬ人のない、押しも押されもせぬ立派な自動車業者となつたのである。終戦以來、暫く雌伏しておられたのが、最近元通り、ゼネラル・モーターズとの關係が復活して、仕事を始めら



れたと聞き、私は心から君の再起を悦んでいる。

敗戦後、根底から覆えられて仕舞た、わが國の經濟復興には、よく言れる通り、觀光事業が大きな役割を演ずることになるであらうし、また是非をうしななければならぬ。觀光事業が盛大になるためには、自動車の發達は絶対に必要な條件である。この意味において梁瀬君の事業は、正に將來を約束されていると言ふべきで、是非とも、君の奮發を請わなければならぬ。而し、觀光事業の發達には、單に天然の景色がいくというだけで足りないのであつて、近代的な文化施設が伴わなければならぬ。道路をよくし、良いホテルを作ることが絶対に必要である。往年、私がフランスに在動していた時分、夏休みにはよく家族を伴つて、一週間も二週間も、國內を自動車で旅行して廻るのを樂しみにしていた。體裁のいゝジブシー旅行である。アスファルトの道は四通八達で、一日中走つても埃一つかぶらないで済むし、到る處に小綺麗なホテルがあつて、氣の向くまゝに何所でも氣持よく泊ることができる。その上地方々々で變つた美味な料理があり、名物の葡萄酒もびたりとこれに合う。一日の疲れを休めるに十分である。フランスはまた變化に富んだ天然の景色に恵まれた國で、大西洋沿岸と地中海方面とでは、すっかり氣分が違ふ。その上、名山も澤山あつて、國の中部には南北に走る中央山脈がある外に、有名なアルプスも控えている。觀光旅行には實に好適であり、加うるに文化施設が整つてゐる。自動車工業が盛んになるのも當然で、年、何十萬人という觀光客が外國からやつて



來て、金を落して行くことになるのである。

イギリスのロールス・ロイス、スペインのイスパノシイザー、ドイツのメルセデス・ベンツという風に、ヨーロッパの大國は、皆自國製の最高級の車を持つていて、これをその國の誇としてゐる。一國の工業の水準を測る尺度となるからである。米國は大量生産の國で、何といつても自動車工業では世界の王座を占めてゐる。一臺々々を美術品として作り上げて行くヨーロッパ風のは、根底から筋道が違つてゐる。何れにしても、日本は、戦前でも外國産の車を使うのに慣れてしまつて、他國に對し誇るに足る自國産の車を持たなかつたのであるが、これは如何にも肩身の狭い話である。敗戦日本では米國の自動車工業に壓倒されて、内國での積極生産に乗り出す餘地はとて有そうに見えない。それは止むを得ないこととして、當分は輸入自動車に頼る外ないであらう。果して然らば、梁瀬君の仕事の將來は十分確保されて居ると言ねばならない。況んや、同君の經驗と努力をもつてすれば、成功は期して待つべしで、君の生涯を通じての最後の頁を華々しく飾つて貰いたいと思ふ。そして同君に對し今後一段のご考量をお願いしたいのは、わが國の道路網の増強改装と、ホテルの増築である。そしてこれによつて觀光事業の發達を促し、外資の導入を計ることである。

今や實踐力行の人、梁瀬君の自叙傳が上梓されるといふことを聞いて、私は欣快に堪えない、わが國自動車工業發達の生きた歴史である同君の傳記は、正に後進を發奮勇躍せしめるものであるに相違

ない。その貴い自叙傳に、請われて不文を草することになつたのは、私の頗る光榮とするところでありまた大なる悦びである。こゝに感ずるまゝを記述して序に代える次第である。

昭和二十四年十二月五日 東京にて

参議院議長 佐藤 尚武

## 自序

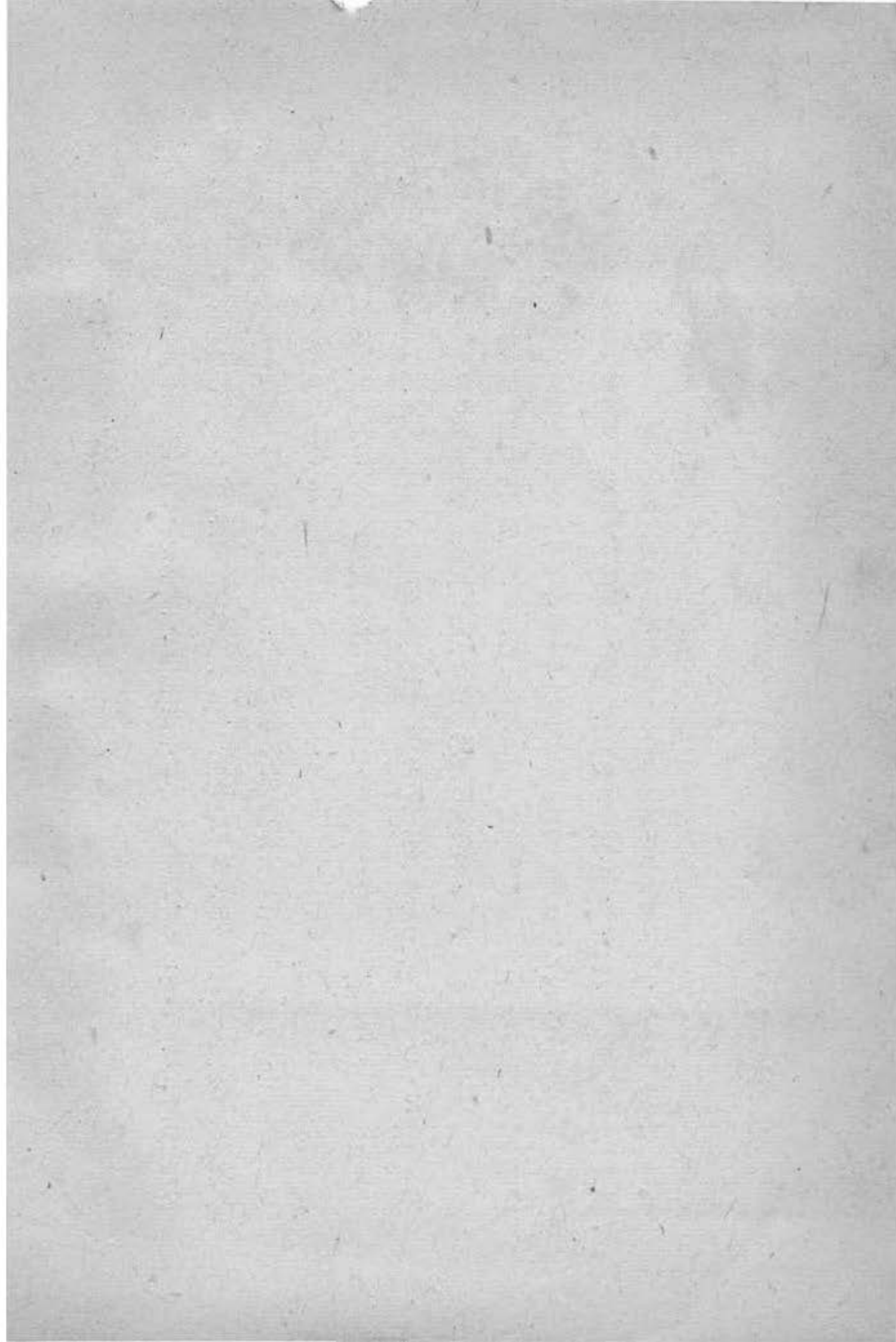
梁瀨自動車株式會社が誕生してから今年が丁度三十五年目であり五月廿五日が創立第三十五回記念日に相當する。そこで此日を卜して社員及び梁瀨學校卒業生中O・Bに屬する諸君が集會を催し其席上で之を進呈して懷古の資に供したいから「日本自動車史と梁瀨長太郎」と題する小冊子を編纂する故、昔話をせよとの申出に接した。

就て思ふに自分の如き一事業に携はり終始其範圍を超えざりし者は是れと云ふて取立てゝ話す程の事もなく他人様の目を汚す程の價値もなき事を自信するが故に、唯單に青少年社員とO・B諸君の御笑ひ草までに記憶に残れる節々を少しくおしやべりして其責を果す事とした。

一通り御話して其事柄を願する時、誠に取り留めもなく従つて何等社會を益した事もなく慚汗背を濕ほす思ひで一ぱいであるが、唯一つ今日日本中で自動車關係諸事業に従事して之れに衣食する人口の意外に多數なるを思ふ時自分も其一部の勤めを分擔出來たのかと云ふ喜びを感じる。田舎出の一寒書生のとほく／＼と歩み來つた徑路の内何處にか諸君の參考たり得るものが有れば望外の仕合せである。

昭和廿五年三月十一日誌

梁瀨長太郎





# 日本自動車史と梁瀬長太郎

## 目次 (本目次中○印は梁瀬長太郎氏の口述速記に依る)

序	参議院議長 佐藤 尙武 (一)
自序	梁瀬長太郎 (一)
はしがき	(一)
明治篇	(九)
日本自動車史 年表「明治篇」	(一一)
I 梁瀬氏の生立	
1 幼、少年時代	(一七)
2 青年時代 (學業の卷) <small>中學校 一ツ橋</small>	(二二)
3 青年時代 (サラリーマンの卷) <small>大阪商船 三井物産</small>	(二七)
明治年間に於ける國産自動車生産概數	(三三)
大正篇	(三五)
日本自動車史 年表「大正篇」	(三七)
II 梁瀬商會の創立	
1 日比谷時代	(三九)

2 大正初期の状態と獨立の氣運……………(四一)

○ イ 開店當初の自動車の賣込み……………(四八)

○ ロ タクシーのはじまり……………(五一)

○ ハ タイヤの販賣は元祖……………(五五)

2 戦争の景氣勃興する……………(五六)

○ い 土堤七の想ひ出……………(六〇)

○ ろ ボデー製造のそも／＼の始め……………(六一)

○ は 『校長』先生とは誰ですか……………(六四)

○ に 「運ちゃん」の配給元……………(六五)

○ ほ 運輸事業へも先鞭をつける……………(六六)

○ へ 社員家族慰安會(子供會)……………(七〇)

○ と 珍しい車を販賣する……………(七一)

III 梁瀬自動車株式會社

○ A 吳服橋時代……………(七五)

B 六百萬圓の會社創立……………(七八)

○ 一 元且の熊騒ぎ……………(八〇)

○ 二 八卦は「火難の相」と出る……………(八八)

○ 三 見込が外れた話……………(九〇)

○ 四 パニツクと或る人……………(九六)

五	ジャンコ屋の起源とは	(九八)
六	海外留學生十二名	(九九)
七	デニコ塗料とセルバ塗料	(一〇一)
八	ボデー・パイツの想ひ出	(一〇二)
九	用品とラツバの始り	(一〇四)
十	レギュレターのバテント騒ぎ	(一〇五)
十一	青バスのボデー製作	(一〇六)
十二	數見周穂拳銃を發砲する	(一〇八)
十三	鎧持參の老校長	(一〇九)
十四	海外旅行と關東大震災	
	A・海外旅行	(一一一)
	B・大西洋を渡る	(一一五)
	C・關東大震災の飛電	(一二七)
	D・八面六臂の大活躍	(一二〇)
	E・歸朝して寸暇なし	(一三三)
	F・山条さんも見込み違ひをする	(一三八)
	G・お札の始末に困惑する	(一三八)
	H・甘粕憲兵大尉の登場	(一四〇)

- I・救助品とアメリカのヒューマニテイ……………(一三)
- J・山条さんの面子をたてる……………(一三二)
- K・餘話 二篇
  - 〃どんな時でも人から動く〃……………(一三三)
  - 〃雷のように叱る山条さん〃……………(一三四)
- 十五 どの外國車が儲かる……………(一三五)
- C 震災後の吾が國經濟界……………(一三七)
- D 背水の陣を布く……………(一三九)
- 握飯を車の中に置く……………(一四一)
- 吾が國に於ける自動車使用狀況……………(一四三)
  - 國產會社の製造指數と外國二社の組立數……………(一四三)
  - 國產自動車工業確立前後に於ける資料……………(一四四)
- 昭和篇……………(一四五)
- 日本自動車史 年表「昭和上半期」……………(一四七)
- IV 梁瀨自動車株式會社
  - 日本橋の本社時代……………(一五七)
  - 一、昭和初期の業界を觀る……………(一六一)
  - A・G・M社の契約キャンセルと其復活……………(一六一)



B・三昭自動車の顛末記……………	(一七一)
C・G・M社とトヨタの提携案……………	(一七二)
D・家宅侵入罪で訴へらる……………	(一七四)
○E・何故、カー・メーカーとならざりしか……………	(一七五)
○F・苦い <sup>にが</sup> 思ひの「ヤナセ號自動車」……………	(一七九)
○G・鮎川義介氏かち勸奨を受けた……………	(一八二)
○H・トラック一本建に國産車の擦頭……………	(一八三)
○I・小型車とディーゼル車なれば……………	(一八五)
○J・姫宮山莊の建立……………	(一八八)
○K・小型車オオタ號に協力……………	(一八九)
○L・修理業者の身分……………	(一九一)
//自動車火曜會に於ける講演//	
日本自動車修理加工組合連合會長として……………(速記全文)	(一九三)
M・月賦販賣……………	(一九九)
N・ビニイック自動車の定價發表……………	(二〇〇)
二、雌伏した戦時十年間……………	(二〇五)
三、「山本条太郎翁追憶録」寄稿よりの抜文	
一種の神様格(寄稿)……………	(二〇九)

陶陶亭に於ける故人追憶座談會に會長の語る (速記全文) ..... (二〇九)

四、會社の重点を代燃に轉換する ..... (二一四)

(一) 輸入閉鎖でG・M社との脈絡は中絶する ..... (二一四)

(二) 梁瀨第二世の登場と高濱工場新設 ..... (二一五)

(三) 代燃を天然ガスに囑目する ..... (二一七)

(四) 梁瀨自動車工業株式會社となる ..... (二二二)

(五) 苦心三炭(三嘆)時代 ..... (二二四)

(六) 疎開をしなかつた會長の先見 ..... (二二七)

(七) 忘れ得ぬ空襲下の第五十一期の會社總會 ..... (二二八)

五、大空襲下五月廿四・五日の會長 ..... (二二九)

V 梁瀨自動車 本社事務所

芝浦時代 ..... (二三五)

日本自動車史 年表「昭和甲半期」 ..... (二三七)

A、終戦後の自動車工業界を見る ..... (二四〇)

1・ 厩氣樓のやうな代理權獲得運動 ..... (二四一)

2・ 鑛工品貿易公團の發足 ..... (二四三)

東海道の旅より(月刊雜誌「自動車」より轉載) ..... (二四五)

3・ 蝗しなしいの様に焼けた車の慘狀 ..... (二四七)

4・米國製新車の輸入業務開始さる	(二四九)
5・遂にG・M社の販賣權還元する	(二五〇)
6・(O・A・S)ビジネス	(二五一)
外車輸入業務の眞意義(自動車交通新聞より)	(二五四)
再びアメリカン・ニュー・カーを迎えて(自動車産業より)	(二五七)
梁瀨自動車ではシボレー其他を輸入(同)	(二六五)
○7・懐かし <small>なつ</small> のヤナセ自動車廣告塔	(二六八)
○8・ヘラクレスの神様も顔負け(ブールデル塑彫譚)	(二六九)
B・G・M社との再契約なるまで	(二七二)
C・古稀を壽ぐ梁瀨會長	(二七七)
D・會社輸入部の活動	(二八二)
E・ヤナセ・ストアの開業	(二八九)
むすびの言葉	(二九〇)

## 寄稿篇

### 〃梁瀨長太郎氏を語る〃

寄稿者索引	一一四
寄稿者(五十八名)	一一五

人名索引

英文索引

編集を了へて

(卷末)

(終末)

編者 山崎 晁 延 (奥附前)

附 録 「表」

第一表 O・A・S 實務受託者名簿

第二表 最近に於ける實働車 (東日本) の集計表

實働自動車一般綜合集計

G・M社製各車綜合集計

登録に據るG・M社製各種別集計

第三表 自動車登録 (東日本) 車種別概數表

第四表 G・M社製各種自動車概算表

第五表 我國に於ける自動車生産、登録、保有臺數指表

第六表 自動車輸送道路 (東日本) 舗裝別延哩概算表

第七表 ヤナセ機構及職制表

第八表 梁瀬自動車株式會社披輸入自動車販賣實績表



## は し が き

日本も最早「自動車五十年史」を編む時機となつて來た。即ち此の自動車の歴史を回顧する時に斯うした事物の變遷を究めて、その過去の記録を辿ることは極めて興味あるものである。

明治年間もその下期、同三十年横濱の外人居留地にエペリー・ハイム氏がオリエンツ號蒸氣自動車を輸入したことより始まる吾が國の自動車の一頁は、東京銀座明治屋洋酒店のNO1、(警視廳の自動車登録番號)即ち英國製アーガイル號貨物自動車の登場となり、越えては明治四十一年一月に井上公爵が三越呉服店のフランス製クレメント號單氣筒八馬力(バッテリー・イグニツシヨンの装置)を驅つて大内山に參内、明治天皇御前に於て中島春之操縦の同車を天覽に供し、又初代の自動車技術者山羽虎夫、内山駒之助、吉田眞太郎(註、此の人は後年梁瀨自動車に入社をしている)橋本増次郎などの諸氏は斯界の先驅となりて何れも國產自動車製造に心血をそゝいでいる。一方、自動車の輸入商の高田商會を始め、山口勝藏商店、三井物産株式會社などに在つてはこの新時代の商品を提して販路開拓に乗出している、斯くして歐洲に於ける第一次世界大戰に依る好景氣に伴い國內需要の自動車使用數は漸次、その數を増して大正十二年六月末の調査に依れば全國で約一六、〇〇〇臺と數へられるに到つたが、未だ世間は此の文明の利器を贅澤物視していた。

然るに同年九月一日突如として關東地方に襲來せる大震災を一轉期として此の自動車は急激なる發達を招來して、吾が國に於ける陸上輸送界に一大エポックを畫するに到つたのである。即ちこの自動車は吾が國に於ける交通動脈に大變革を齎らし、先づ都會地を中心として乗車料金の低廉なるタクシー業が起り、これと併行して乗合自動車の區間輸送は四通八達し、貨物自動車の運用は著しく増加して其の輛數は毎年二・三割の増加率を示す状態となり、また、此の自動車の普及に刺戟されて各デパートは競つて外國著名なバス・シャシーを購入して豪華な送迎バスを運行し、都會地は夙に早くより此の恩恵に浴し又十四年には東京乗合自動車株式會社は遊覽課を設けて大型展望車を連日に涉つて東京名所案内として運轉せしため自動車は汎く一般民衆に愛顧さるゝ様になつたのである。

此頃アメリカに於ける自動車工業は世界征覇をめざして此の東洋市場開拓のため、著名なフォード自動車會社とゼネラル・モーターズ會社が吾が國にアツセンブリ工場を設置して其のデイトラーは全國に配置されて愈々、自動車は大衆に普遍化されるやうになつて來た、それにこれと前後してエンバイヤ自動車商會（註、現在のエンバイヤ自動車株式會社の前身）日本自動車株式會社、安全自動車株式會社、八洲自動車株式會社、梁瀬自動車株式會社などへは陸續として歐米に於ける高級自動車が輸入され、夫々會社のショウ・ルームには、これらの各種自動車が陳列されて恰も百花爛漫たる觀を呈する状態とはなつた。

斯うして吾が國に輸入された自動車は一般大衆にも親しい交通機關となり、やがては黄金時代も築かれやうとする時、變轉たる世相は、かの大震災による損害の經濟疲勞が年とともに漸次表面化して國內の財界不況は、また自動車の販賣高は増加するが其の収益は低下すると云う珍現象を生む様になつて來た。即ち昭和七、八年に於ける自動車界は此の不況に遭い一時その自動車の登録臺數は増加率の減少を見たが、再び其登録臺數は増加を示して昭和十一年十月には約一五〇、〇〇〇臺となり其の進歩の跡は極めて目覺しいものを覗ふやうになつて來たのである。

處が政府は年々歳々、これらの自動車等の輸入超過率の漸増するを憂慮して茲に爲替管理を行うと共に、これと併行して國産品獎勵運動を起し、また自動車も國産車に移行する運動が擡頭し、殊に支那事變を楔機とする戰時的な要求に急迫されて商工省は、標準自動車の生産に全面的援助指導を以つて望み、それが遂に自動車製造事業法の公布となり、同許可會社の操業開始、そしてアメリカのグラハム工場買収によるニッサン車キャブオーバーの軍部大量買上げ、及び米國シボレー車をスケッチせるトヨタ自動車の市場進出、かくして極めてそれは短期間の内に、國産自動車時代を現出して、今日の如き急速な進歩を遂げて來たのである。

然し、これは當時の狀況から判斷して急速の進歩とは謂ひ得るが、それは正直、一定の標準に達した譯ではなく、こうした急速な進歩と云ふ内容は「拙速主義的に」又は「間に合せ乍ら」と云う進歩

に對する制限的な意味をたぶんに含むものであつた。

慥かに國產自動車工業は日本軍部の温床に依つてコントロールされて來たものである。そして其の具現が此の拙速主義であり、その事實が燃料消費規正の鐵則であり、又法的には自動車統制會であり戰時規格であり、またその配給制であつた。斯く政府は輸入超過と云う戒律を楯に餘りに獨善的な施策の裡に國產車の増強を圖り、事實國內に於ける、その需要家の外車に對する要望を充分、かこち乍らも茲に其の外車をしてロックアウトするを餘儀なくせしめたのであつた。

即ち此の外車との絶縁が、世界との交友を絶つ同義語となり、遂にそれが、今次の不幸極る大戦争に突入と云ふ暴舉を敢てする始末とはなつたのである。

斯うして吾が國の自動車工業は世界の時流より隔絶されたる裡に、戰時體制下も嚴しくかの跛行的な過程を辿るを餘儀なくされるに到つたのである。此の間、戦局の不利と本土空襲によりて斯工業の生産は低下し、かつ又登録車輛は戦禍を受けて一舉に激減して、其の残存せる實働車輛の悉くは、その酷使に耐え兼ねて忽ちのうちに老朽車と化し、逐日落伍するもの多く、あまつさへタイヤは摩耗して運輸面は全くの混乱時代を現出する事とはなつたのである。

然し幸い終戦の大詔を拜してより、進駐軍に依る厚意ある指導は茲に半身不隨の自動車輸送も漸く立體的な活動となりて、遂にこれは拂下自動車の交附となり、又各般の狀勢は自動車復興對策の線に



添つて漸く、生産に、配給に、輸送にと、その好轉を示して、それが大型ディーゼル・バスとなり、遂には今日の百五十人も一時に收容し得る超大型バスの出現とはなつて來たのである。

斯く「日本自動車史」の素描を記述するに吾が國の自動車草創期より一つの所信を以つて致々と倦まず撓まず斯業に努力を獻げられた、梁瀬自動車株式會社取締役會々長梁瀬長太郎氏は自然、茲に吾が自動車界に脚光を浴びて浮び上つてくるのである。そして同氏の歴史を書くことは氏個人の記録たるばかりでなく實に吾が國、自動車界に於ける側面史を編むことにもなり、これ程意義あるものはなきことになる。以下本書に蒐集する各篇の大部分は昨年十一月一日より旬日に涉つて梁瀬長太郎氏自身が口述せられた。その速記に基くもの多く、尙此の口述記録は務めて編者に於て時代考證に意を用い寫眞と挿畫は當時の関係者は勿論、會長よりも指示を受けたものである又参考諸表は編者が充分検討して掲出したもの、それに編入した「日本自動車史」年表（明治篇）（大正篇）（昭和篇上半期）（同上半期）は何れも編者の未發刊「日本自動車文化抄史」の原稿に據つたもので、これに依つて梁瀬長太郎氏の年譜と對照せらるれば、おのずと時代の様相が察知出來得ることゝ爲したものである。

今や吾が國の自動車界は進駐軍使用の最新式の各種各型の自動車で驚異すべきショックを受けてい

る、即ち此のシヨツクは吾々がかつて未だ経験したことのなき憧憬でもある。

既に多年業界にあつて幾度か自動車界の變轉と流轉を身につけて來たものも、これから新規に自動車にと志す者にも、吾が國の實情と餘りにも飛躍した海外の自動車に對する眞剣な態度は、何かこれによつて具現しようとする意欲となつて燃えている。即ち吾々自動車人は知ろうとする、また知らなければならぬ事實を餘りにもよく見せつけられている。

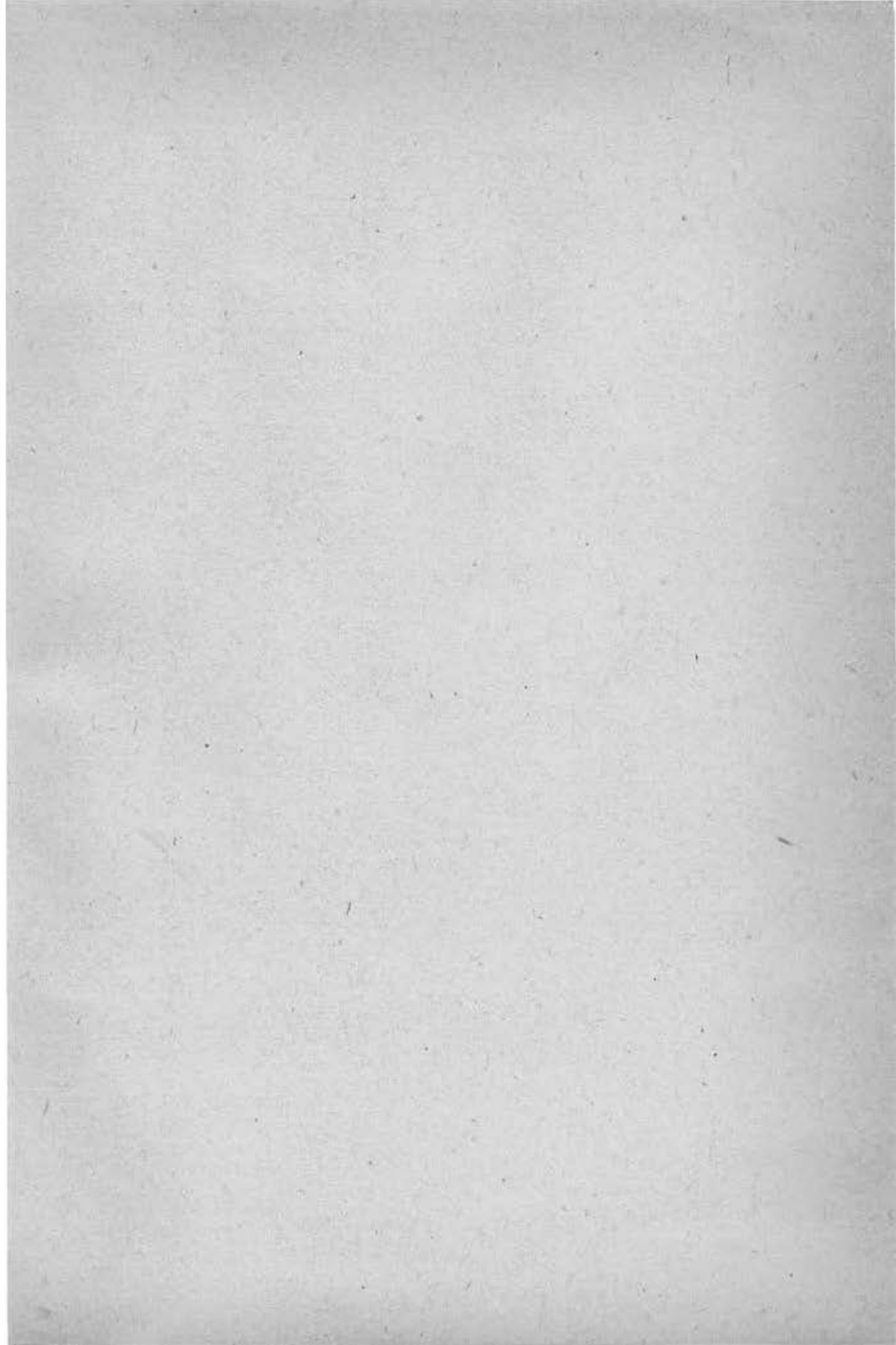
本書「日本自動車史と梁瀨長太郎」は過去に於ける吾が國自動車の在り方を識り、斯業をこれによつて確認して、爾今進む正しい照準を得んために編集されるものである。そして斯く先輩の歩んで來た途が、本書に依つて當時の性格を識り、以つて一層「無心の器物」たる自動車に對して魅惑を感じかつ愛撫されることを希望してやまぬものである。そして「文化日本」にふさはしく自動車を對象として互に與へられた業務に理想を以つて、いや夢見る人として、その夢を描き、以つて其の夢を何れかに具現するための一日も悔ひなきベストを盡したき念願に外ならぬものである。

然らば普通人の如く床の間を背負い脇息にもたれることを識らぬ、たゞ自動車を愛撫しこれに終生を打込み、早や古稀の壽を重ねられつゝも今も尙、努力の連鎖である梁瀨長太郎氏の歩んで來た途はまた我々も歩み得る途と思ふのである。

尙、本書には附録として多年吾が國の業界にあつて梁瀨長太郎氏と親交のあつた方々やかつては梁

瀬自動車に在つた所謂、梁瀬學校出身のO・Bメンバー各位の御寄稿を得ている、即ちこれらは編者のタツチすることの出来なかつた部分を充分に補つて餘りあるもので、これに依つても、今日まで秘められて居た吾が國の自動車史の一齣々々が覗へることゝ思ふ。尙以つて別の意味からも梁瀬長太郎氏の風格にも接する機會とも思ふ。

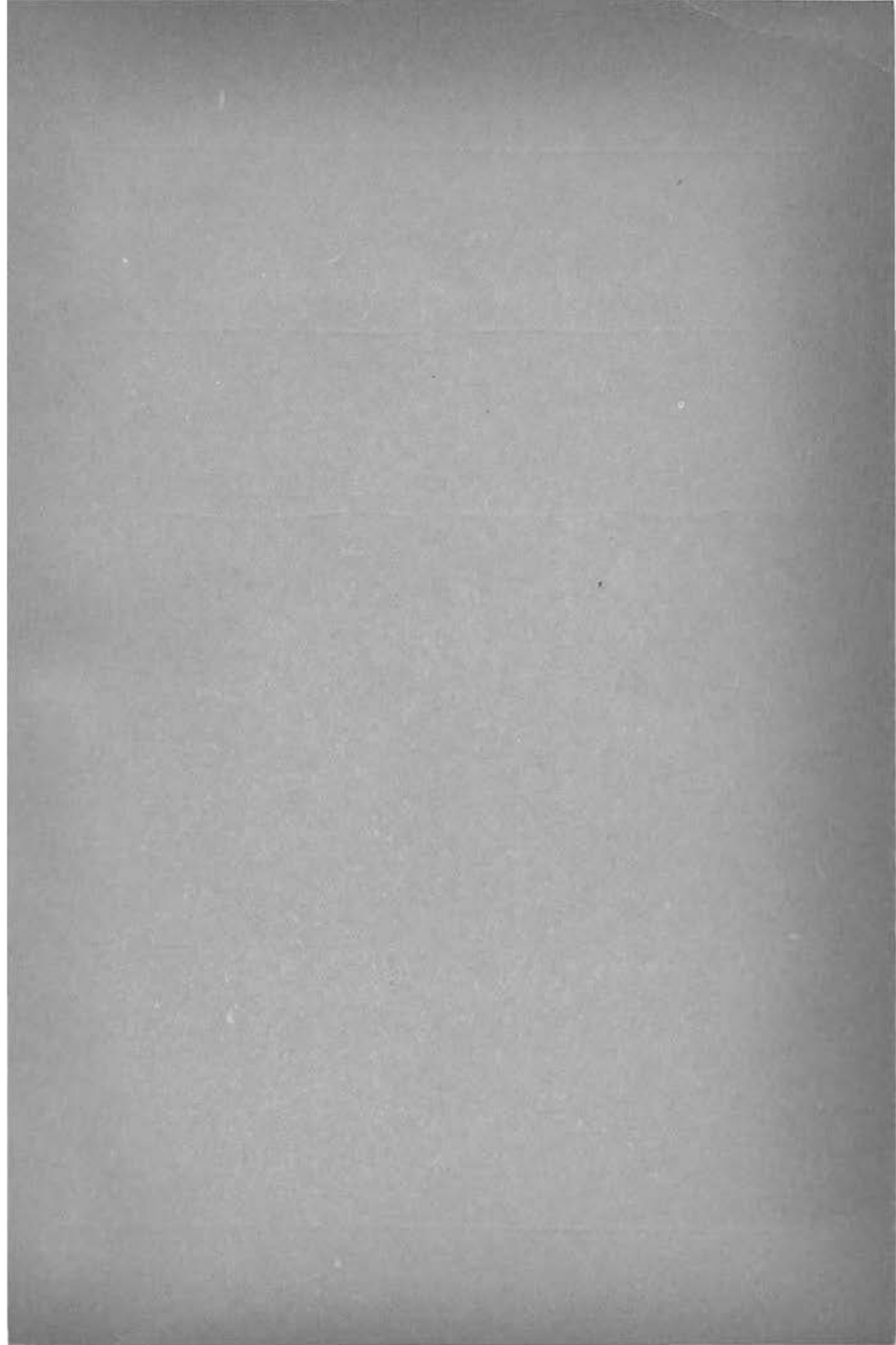
本書中の年表「大正篇」は最善をつくして資料蒐集した積りではあるが、初版の不備は再版の際に改訂したいと願つている、又「昭和篇」は其の間の事情を充分に熟知諸彦も居られることなので或る程度は割愛して未掲載の個所もあるが、何れかの機會にこれは加入するつもりであることを御斷りして置く。





明治篇





日本自動車史 年表「明治篇」

明治三十年 横濱在住外人蒸氣自動車オリエント號をアメリカより購入使用す。

同 三十二年 陸軍幼年學校西村教官フランスよりガソリン自動車一臺を購入歸朝す。

同三十三年五月十日 皇太子春宮嘉仁親王（後の大正天皇）の御成婚の慶事に奉祝記念として桑港在留日本人會より領事館陸奥慶吉伯を通じて電氣自動車を献上す。

同三十四年十一月 東京銀座二丁目松井民次郎經營モーター商會は自動車オリエント號を販賣す。

同 三十五年 自轉車仕入のため渡米したる吉田真太郎に依つて自動車エンジン始めて日本に輸入さる。

同 年 東京、明治屋は英國製アーガイル號貨物自動車を輸入して商品運搬の先驅となる。

同年一月二十三日 モーター商會は自動車俱樂部を設立し娛樂としてドライブ會員を募る。

同 年 銀座龜屋食料品店はモーター商會より蒸氣自動車ロコモビール號を購入自家用自動車となす。

同年 七月 モーター商會の委囑を受け内山駒之助はホリゾンタル二氣筒ガソリン・エンジン十馬力の車體架裝第一號車を完成。

同年 九月

三越呉服店はモーター商會に佛國製クレメント號を發註、同車は單氣笛八馬力（パツテリー、イグニション）にして同車の到着せしは三十六年三月、四月より市内配達車として登場なす。

明治三十六年

廣島縣横川、可部間の出雲街道に乘合自動車出現なす、これは東京モーター商會より購入した米國製二氣笛ホリゾンタル・エンジンを乘合馬車の車體に取付けたもので十二人乗（時價八千五百圓）此の設計架裝指導は内山駒之助。

同年 四月

大阪市に開催された第五回内國勸業博覽會々期中、梅田——天王寺間にロコモビール號乘合自動車運轉さる、又同博覽會參考館に横濱ヴェーエル兄弟商會よりトレード二人乗蒸氣自動車と同じくアンドリユース・ジョージ商會よりハンバー號自動車各一臺が陳列されアンドリユース商會のボン技師が實地運轉なし大衆に觀覽す。

同 年

大阪岡田商會はフォード自動車を購入す。

同年八月二十日附

愛知縣は「乘合自動車營業取締規則」を公布、これが吾が國に於ける最初の自動車取締規則となる。

同年九月二十日

京都乘合自動車三井商會開業、同年十月二十八日京都府令第三十九號を以つて「自動車營業取締規則」發令となり、翌二十九日同商會は正式出願、同年十一月二



十一日正式認可となり直ちに開業す。

同三十七年五月

岡山の山羽虎夫に依りて蒸氣式二氣筒の山羽式國産第一號自動車完成試連轉なす然しエンジンの快適に比しタイヤが國産ソリツドタイヤのためスピードが出ず剩へ私財を此のため蕩盡したため繼續出來ず、あたら此の新案も放棄するに至る。

同 年

三井高保ホワイト號蒸氣自動車の中古車を購入なし愛用す。

同 三十八年

有栖川宮威仁親王殿下歐米外遊より佛國製ダラツク號三十五馬力五人乗の自動車を御料車として購入歸朝、尙、殿下御料車附運轉手として英人アンドリー隨行せり。

同 年

東京、吉田眞太郎は東京自動車製作所を始め國産自動車の製作に乗出す。

同 年

警視廳「自動車取締規則」制定に着手、神奈川縣自動車取締規則を公布。

同年 六月

有馬自動車株式會社は神戸の外國商館よりノツクス號二氣筒車十八馬力の乗合自動車二輛を購入なし、兵庫縣三田——有馬間の營業開始。

明治三十九年

英國に留學中なりし大倉喜七（後の男爵喜七郎）歸朝に際し伊太利製ファイアツト號百馬力競走用自動車とチーデル號二氣筒自動車二臺を購入歸朝す。

同 年

東京、銀座龜屋洋酒店はウワツトソンウキスキー會社よりウーズレー型Wエンジン  
の自動車を貰ひキリンビール瓶型のボディを作り條件付で警視廳より運行許可され

廣告効果を得。

同四十年一月十八日 澁澤榮一氏等に依つて日本自動車運送株式會社、同月二十日 福澤桃介氏等によつて自動車運送株式會社、同月二十五日には長森藤太郎氏によつて帝國運輸自動車株式會社の三社の創立を見たが時の警視續監安樂兼道氏は右三社が鼎立して市内を其自動車が駈け廻るは危険極るものとして三月十日三社を合同せしめ帝國運輸株式會社を設立せしめ超えて四十一年十二月より遞信局より郵便物運搬を請負したところ良結果なるに鑑み局は馬車を廢して自動車を專用することになる。

同年 六月 米國デトロイト市カデラック自動車會社より車を購入した、報知新聞社は報道機關の敏速と配達の迅速に實績を擧ぐ、時の運轉手は小林房次郎。

同 年 警視廳令を以て府下に自動車取締規則を公布。

同 年 タカジアスターゼの高峰讓吉博士米國フォード自動車の日本販賣權を獲得し、これを三共商會（後の三共株式會社）製藥業）に此の權利讓渡。

明治四十一年 井上馨公爵は三越呉服店のクレメント號に乗つて參内、東御車寄にて明治天皇御前に中島春之操縦の自動車を始めて天覽に供す、これが大内山に自動車の轍をしるした最初となる。

同年 芝、白金三光町の米山利之助は單氣笛八馬力、ガソリン自動車を試作。

同年 東京電燈株式會社は電氣自動車をアメリカより購入、これをスケッチして日本自動車に製作せしめ、四十四年にこれを完成これが吾が國に於ける電氣自動車製作の始めとなる。

明治四十二年七月 大日本自動車製造合資會社（後の日本自動車株式會社）は資本金二萬五千圓で

設立さる、これは東京自動車製作所の更生したもの、支配人は石澤愛三氏。

同 四十三年 大阪市中山太陽堂は外人よりダラツク號を購入、廣告宣傳のため名古屋に開催された共進會より引續き京阪地方まで遠乗を試む。

同 年 京橋出雲町（新橋際）吉澤商會は東京風景を自動車上から撮影なし、これを早速市内の常設映畫館に上映。けだし映畫が自動車とタイアップした始め。

同年十二月十七日 日野、徳川兩大尉が代々木原頭でモリス・フアルマン式飛行機を滑走、離陸を行つた際、山口勝藏は自ら車のハンドルを持つて飛行機のとを追ひ廻しつゝ警戒の任に當つた。

同 四十四年 快進社（橋本増次郎）が東京、麻布の廣尾に工場を設け、小型自動車の製作を始むエンジン十馬力のもの。

同 年 大倉喜七（後男爵）は神奈川縣川崎競馬場で米人マリスの操縦する飛行機と伊太利

製ファイアット・レーサーカーを以つてスピードを挑み、見事此の競技に勝つ。

同 年 警視廳自動車の百馬力算定法を制定。

同 年 宮内省より命を受け皇室御料車購入のため、大倉男爵渡歐。

同 四十五年 日本自動車合資會社（後の日本自動車株式會社）伊太利製ファット號、獨逸製N・

A・G、英國製デムラー、佛國製ローリング等の各種自動車を取扱ふ。

但し、當時に於ける同社の販賣實數は一年二十二臺。



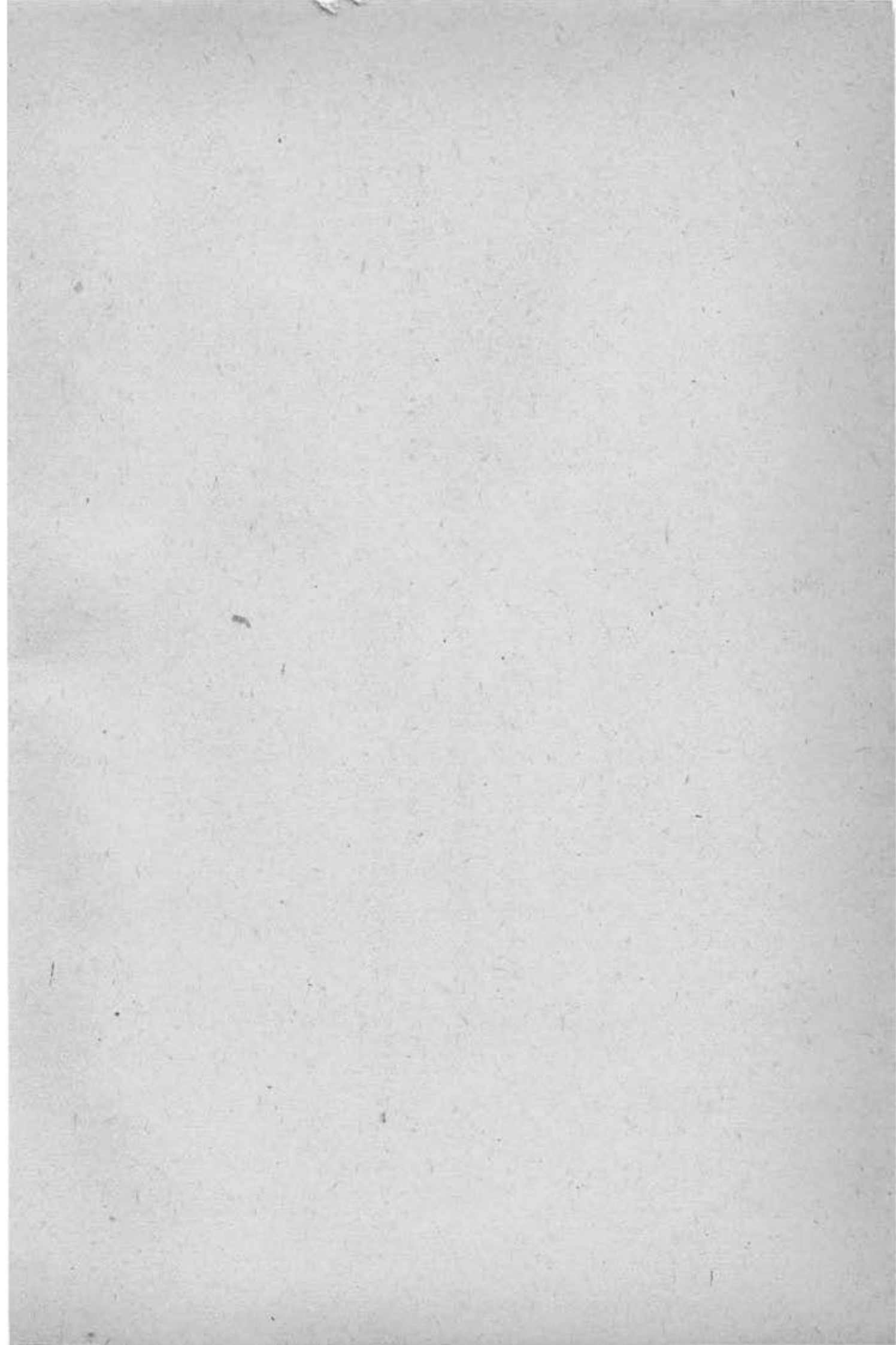
# I 梁瀬氏の生立

## 1 幼、少年時代

明治十二年十二月十五日 群馬縣碓氷郡豐岡村梁瀬孫平長男として生る。

同廿三年三月 豐岡尋常小學校を卒業。

同廿七年三月 八幡高等小學校を卒業。



梁瀬長太郎氏の郷里は群馬縣である、大根と張子達磨で有名な碓氷郡豊岡村の舊家、梁瀬家の長男として明治十二年十二月十五日呱呱の聲をあげている。梁瀬家は村の舊家で二十數代この方、農業、精米（水車を利用してこれをなす）養鯉（豊岡鯉と稱して信州の養鯉等の如く著名である）などを家業として、仲仙道と神山街道（室田を経て榛名山に向ふ）の分岐點である、その角に青物市場を經營し信州輕井澤行の早場物の青物などの糶賣り集荷扱ひをなし、又一方横濱へ蠶紙（養蠶種紙と稱し蠶の蛹から蛾と變つたものが産卵したものを板目紙の如きものに産み着けたもの）などを輸出用として賣捌くなど、田舎としては相當手擴く之等の業務をやつていた。

代々梁瀬家は孫兵衛と稱している、それ故、梁瀬長太郎氏は、若し父祖傳來の習慣に依れば、これらの家業を繼いで第二十五代目の梁瀬孫兵衛と云ふ譯で、或はあの田舎に埋れていたかも知れないのである。

そこで梁瀬氏には斯んな幼時の逸話が残つている、當時氏のお婆さんが「なぜ此の橋を渡らないのかね、此の橋は石橋だから大丈夫だよ」と云つたら「お婆さん、石橋だつて折れることがあるでせう」と云つた。また或る日のこと梁瀬氏に向つて、お婆さんが、裏の小川の梁（小川を堰止めやうにして、上る魚と下る魚を取るスタレのやうなもの）に行つて猫に遣る魚がなくなつたから、鮎でも鱈でもよいから二、三匹、捕つてくるやうに言つたら「お婆さん、人の梁から、たとへ一匹でも捕ること

とは間違つて居ます」と、お婆さんを、やり込めたと云ふ話もある。

斯く幼時より並の子供と變つた風格を持つて居た、それに學業もズバ抜けて殊に習字と文章が得意で小學校時代に書いた習字や其他の成績物は今も尙、八幡村の高等小學校に保存されてある。

豊岡村の尋常小學校を卒へると隣村である八幡村の高等小學校に入つたが、この學校は土地の素封家沼賀茂助氏が寄贈したもので當時の校長は昔も安中藩では劍道も練達者の小林家の喜三郎先生と云つて古武士氣質の飄逸たる人物であつた。即ち此の士族出身の小林校長の所懐する一念は、教育の根本は人物を作るにある、と固く信じていた、従つて高等小學校とは云へ其の雰圍氣は何處となく寺小屋風の趣きがあつた。

そして此の小林校長は一年生の入學式の訓示の中で何時も必ずきまつて次の訓話を試みた。「わしの家には先祖傳來の鎧と槍がある、これはわしが何よりも大切に保存している家寶ではあるが、お前方の中で將來大人物になる者があつたら、わしは第一番の人物には鎧を、次の人物には槍を贖として差上げやうお前方がこれから一心不亂に勉強して天晴れわしが先祖傳來の家寶を受取るやうな人物になつてくれれば、わしの本望だ」と、此の約束は毎年の新入生に向つて繰返し語られていた。

さもなくても感動し易い少年期ではある少年梁瀬として此の小林校長の言葉を深く頭の中に收めた梁瀬氏の心中には秘かに期するところがあつた。



## 2・青年時代

(學業の卷)

### 中學校

明治廿七年四月

前橋中學校に入學

同廿八年

東京府立第一中學校に轉校。

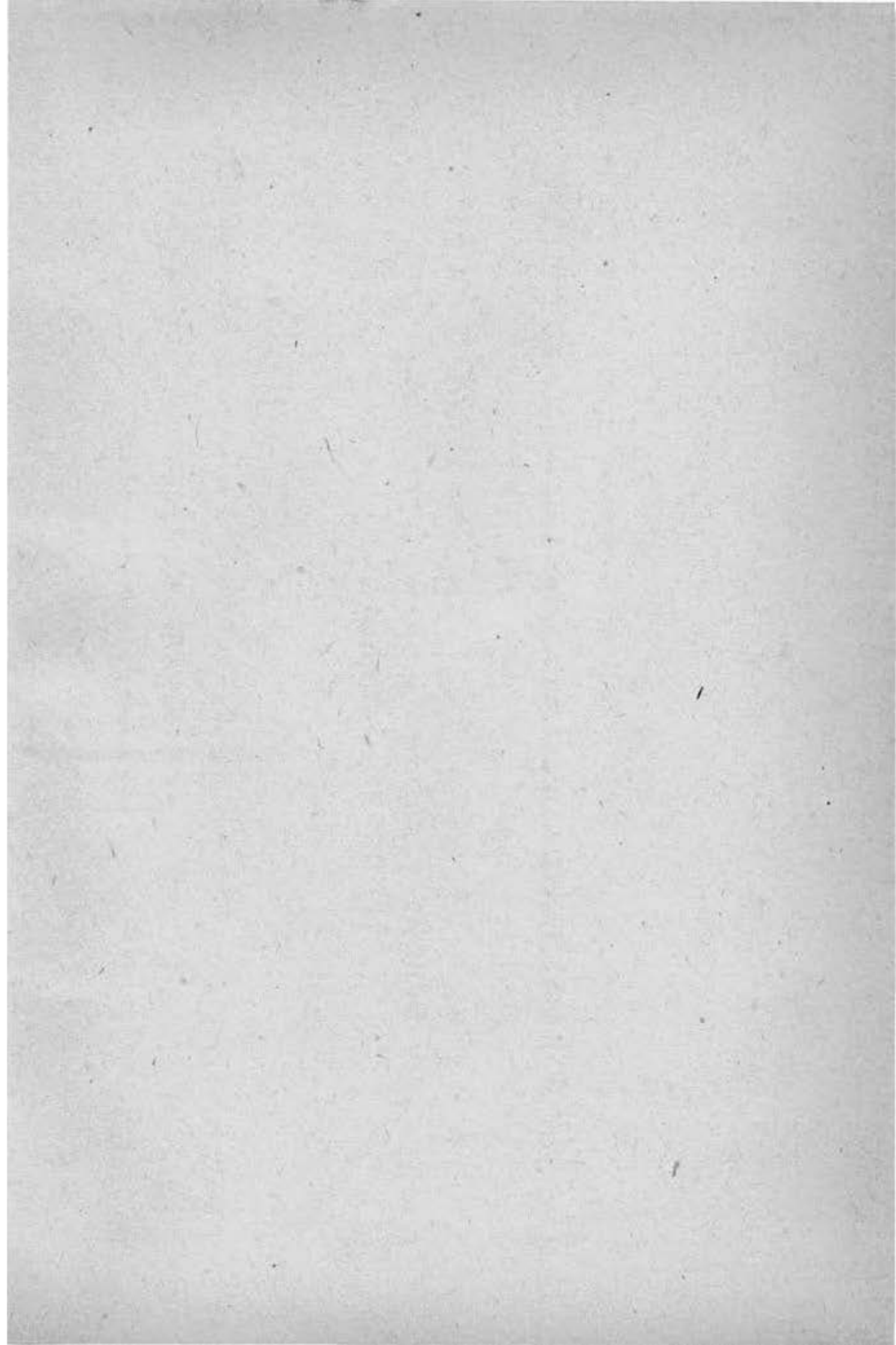
同卅二年三月

同校卒業。

### 一ツ橋

同卅七年

神田一ツ橋高等商業學校(現一ツ橋大學)卒業



小學校を卒へるや直ちに前橋中學校に入學したが勉學の意慾に燃えた向學心は到底、土地に留ることを許さなかつた、それで當時尋常中學と云はれた東京の府立一中へ轉校した。

この頃、既に梁瀬氏は自己の將來に對する構想は實業家たるべく描かれていた、そしてそれが都會に動く事物を對象として何時も、それが腦裡を離れず、例へ巷の小さなことにも、または大きく經濟の動きにも其の注視を怠らなかつた。

此の府立一中は當時築地にあつて、梁瀬氏は京橋八丁堀の古道具屋の二階を間借りして夜などは本を讀み乍ら、此の古道具屋の夜店の手傳ひなどをしていた。

ところが或る年の秋の頃、家庭にとつて一番大切な野菜が急に、どうしたとか、大變な値上りをして、大根が一本十五錢もするやうになつた。そこで此の事を聞いた梁瀬氏は早速三河島に飛んで行き大根一本三錢で求め洗賃と持込み二錢拂ひ元値は五錢となつた、それで醫學博士瀬川病院前の塀際に大根山を築いてこれを二日間、しかも市價より安く一本十三錢で賣つた、そして其の大根山に登つて、大聲で賣聲をたてゝゐると、毎夜の如く學校の體操の先生が見に来て、聲もかけずに歸へつて行くのが氣がゝりであつたので、あとで先生に逢つたとき「先生どうして私が大根を賣つている時あんなに顔に穴があく程、見て行つたのですか」と聴くと「やつぱり君だつたか、どうも學校の生徒に、よく似て居ると思へるし又、商賣振りを見ると、それでもないやうに思へたので不思議に思つていた

のだ」と言はれたことがある。

勿論、大根はみんな賣れて仕舞つた、そして毎夜その病院前を箒で綺麗に掃除が終ると、其病院の御隠居さんが、梅干に美味しいお茶を御馳走してくれた。(此の人は同病院長の御先代であつた) お蔭で、其時の儲けは梁瀬氏をして學費と室代と其他の雜費を賄ふて一年分充分であつたとのことである。梁瀬氏の下宿していた八丁堀附近は所謂下町で其頃の此處彼處で不便なことが多かつた。商賣家としても、まばらで一つの營業品目を扱ふ店でも、そうまめに御得意廻りも出來ず冬など木炭を切らして困る家が相當あつたので、梁瀬氏は學校から歸ると勉強の餘暇を見ては、あそこへ一俵、こゝに二俵と簡単に木炭配達をして遣つていた。ところが或日、或る家で書生さん手紙一本を書いて下さいとたのまれたので、これを、はたしてやると近所中に、その妻君が飛んで行つて『うちへ手紙の書ける書生さんが來て居るから、あなたもたのみなさい』と、大變な宣傳をするものだから、思はぬ代書で面喰ふこともあり、又、或る家では此の御禮として甘い大福餅を御馳走してくれる家などがあつた。

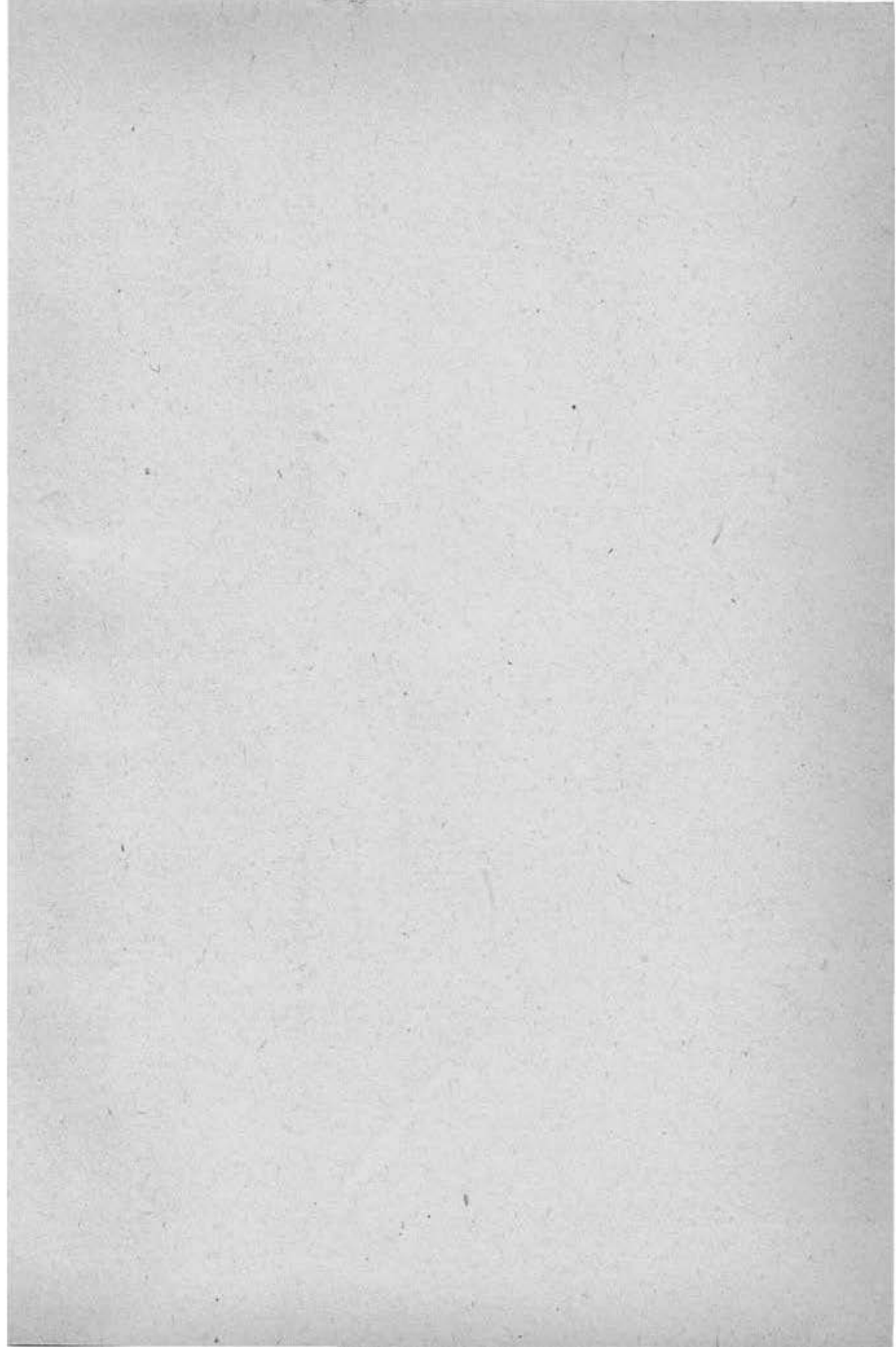
これは梁瀬氏が十六、七歳頃のことである。

斯くて中學校を卒業すると神田一ツ橋の高等商業(現在の一ツ橋大學)に入つた。此頃より梁瀬氏は語學が達者で、當時の商科は英語が旺んで偶々學校に於ける學藝會の如き英語劇などには出演して



いた、また夏季休暇になると直ぐ歸郷して家業を手傳ひ、帳場や接客には父親に代つて、これを行ひ學校で習ふ商業學を實際に身につけていた。既述した如く梁瀨家は先祖代々農業を以つて家業としてはいるが、一方では種々商賣をしていたゝめに、これが如何に梁瀨氏の青年期に興味と刺戟を與へたものか判らなかつた。

明治三十七年、高等商業（現在の二ツ橋大學）を卒業すると大阪商船に入社した。



### 3・青年時代

(サラリーマンの巻)

#### 大阪商船

明治三十七年四月 大阪商船株式會社に入社。

#### 三井物産

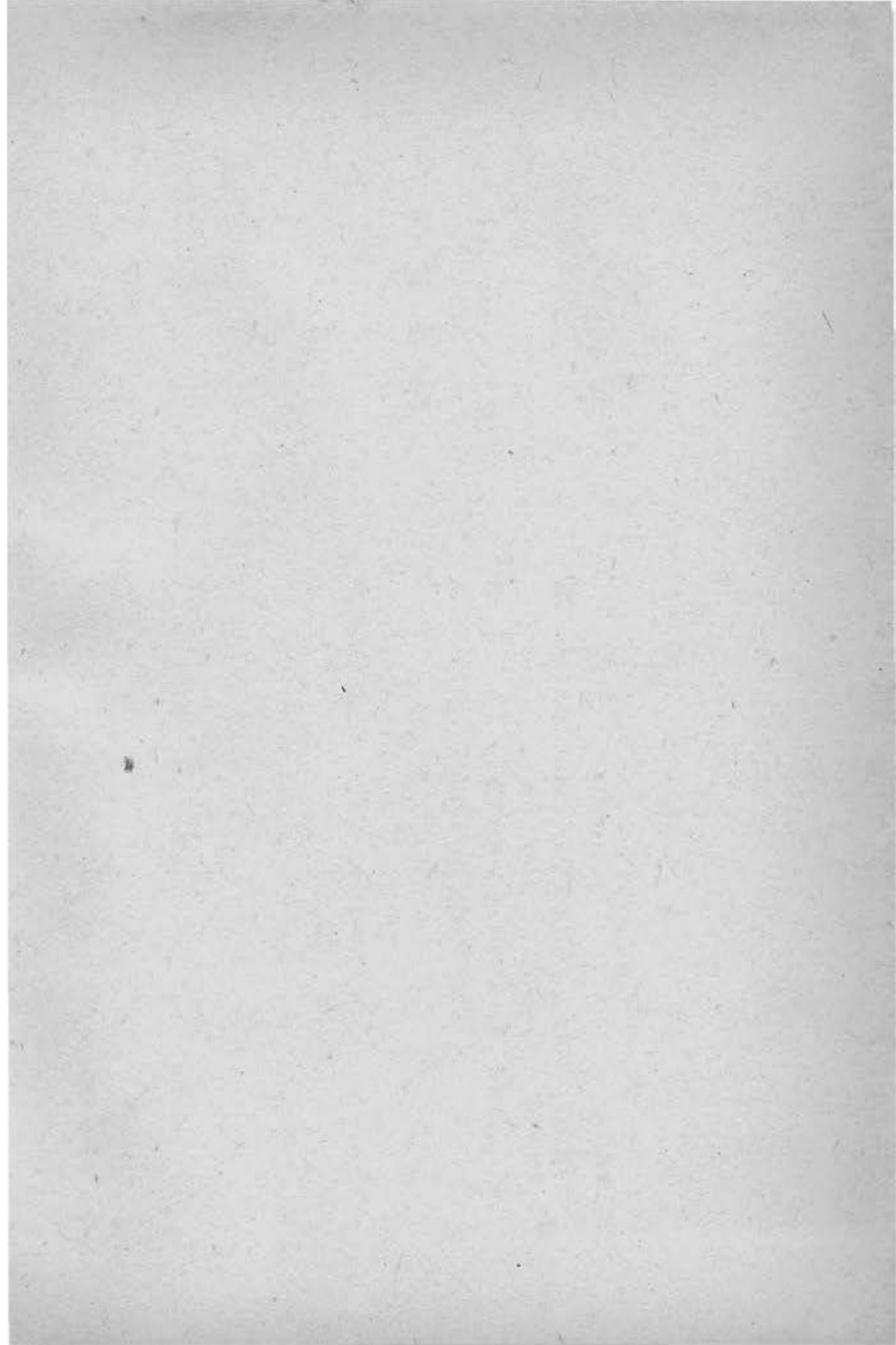
同 三十八年 三井物産株式會社に入社、

同 年 物産より支那、印度(ボンベイ)に派遣され同

地に一ケ年餘駐在員となる。

同 四十年 歸朝後物産機械部礦油係となる。 同部礦油係

主任となる。





大阪商船株式會社に購買掛として入社して愕いた。大阪商人は普段でもそうであるが會社の職務が職務だけに誘惑も多かつたが、それは其都度撃退はするとしても何んとしても盆暮に、お使ものを下宿屋に持込れるのは閉口した、大阪梅田驛に近い福島の宿屋に一人住ひ、私の室の床の間は、これらの到來物で山積され、これを眺めて、私はつくづく考へるところがあつた。

つまり人間として、こんなに人に煽てられて他人様から物品を意味なく貰つて居ては所詮ゆく／＼先は馬鹿とならざるを得ない。

家内も居ないのに、そんなことは、よしてくれと言つたところで、先方は目的のためには手段を選ばぬて、あいである、何んとしても敵は世辭よく算盤にかけては海千山千の猛者達で、學校を出たての書生上りの私が勝てやう道理はない。

それでこの逆を行く商人になつて、先づ自分が骨を折つて他人様に御使物をしてよいから、こんな品物を貰はない方にならうと思ひ、またこれが私の將來にキツト間違ひはない。と決心をして遂に大阪商船を辭めて三井物産に宿替をしたのである。

これは、これから商人になつて、こちらから物を頼んで腰をかゞめて御願する役廻りになりたいと思つて三井物産に宿替へをしたのである。此頃は書生上りで何も世間のことを知らなかつたから、大阪の商人は色々な品物を持つて來てくれて、夫々の言葉でおだてられては所詮馬鹿になつて仕舞ふの

で行末は爲にならないと思つて三井物産へ逃げ込んだのであつた。この時は、しみじみ思つた、餘り物を貰ふので嫌になつて仕舞ひ、毎日毎晩床の間を眺めて溜息をつく始末であつた。(以上口述速記に依る)

三井物産に移つて勤めて見ると、船を扱ふ(當時の大阪商船は内海航路及海外航路を扱ふた、その船舶事務のこと)業者(大阪商船)よりも客を扱ふ業者の方が(三井物産)自分の性格に全つたく合つた様に感じた。

其頃の三井物産に入社する各大學の卒業生の初任給は帝大と一ツ橋(月給三十圓)慶應(二十五圓)早稻田(二十圓)であつた、然し大阪商船は帝大出身や一ツ橋は月給三十五圓で三井物産より五圓多かつたが梁瀬氏はわざわざ五圓安い三井物産に轉職したのは前述のやうな理由からであつた。物産入りをすると直ちに支那に、そして印度ボンベイに派遣された、此のボンベイでは主として綿花の取引に従事していた。ボンベイには約一年駐在員として居り、四十年歸朝するや物産機械部の礦油係となり、貿易事業のレツスンは識らず識らずの裡にマスターするやうになつて來た。そして此頃三井物産は自動車を取扱つていたので遂に此のメンバーに加はるやうになつた。

三井物産に十年、奉公して辭める時のことを考へた、こうしてサラリーマン生活のピリオッドを何

時かは打つべき時が来る、ところで果して、何を收穫するのかと考へついた時、又も私に轉機が訪れて居た。

満足にサラリーマン生活を務めて居る内に時には會社の都合で轉任もさせられるし、罷免されることもある、またよしや上手に務め上げて停年六十何年に達すれば、如何に好きな道だと言つてもその仕事をやめねばならず、こんなことを考へると、こゝらあたりで、すまじきものは、所謂、あの宮仕へと云ふ言葉になる。

それであるから六十年、いやその半分の三十年を勤めたとしても、これは誠に不愉快なことであるから、六十以上になつて辭める代りに、今の三十代の若さを以つて辭めて自分の自主的の考へを持つて、一つの業を自身で選擇して、これに邁進した方が面白いと氣付いた時、私を一番よく理解して居つて下さる山本条太郎氏を御訪ねして早速私の考を打開けたところ、『それは面白い考へである、辭職するならば、今の方がよからう、働き盛りの今の時代にやつて見給へ、僕が必らず尻押しをして遣う』と、激勵して下さつたので、茲に獨立して梁瀬商會を設立し手慣れた商賣の礦油類を扱ひ乍ら傍ら自動車營業を始めたのである。

其時、山本条太郎氏と三井物産の武村常務と中丸一平部長等の皆さんが私を面倒をみて下されたので、日比谷の店舗も電話も安く譲渡してくれ、自動車も四十臺程、此の當時としては（此の車輛數は

日本中のストック自動車の大部分を占めたものであつた。賣上げて拂へばよいと云ふ條件で、これを貸與してくれたのであつた。

今、思へば豫想外とも分不相應とも云ふ可き幸福で三井の恩義は、終生、私には忘れることの出来ないことである。それに、あとで聞けば商品まで貸して貰つて、新商賣を始めたと云ふのは三井にもかつて、斯かる事がなかつたとのことである。

これに就ては先輩諸氏の恩を謝すると共に強く三井の恩義を感じる次第である、たしかに私に對しては三井の社員としてのこれは異色の事であつた。

山本条太郎氏の様な勢力のあつた人が、三井が金なんか取つても仕様がなないぞ、安く賣つてやれ、と云ふ指圖に依つて私は非常な幸を得た譯である。私が今日、斯うして居られるのも、あの頃のあゝ云ふ人達（山本条太郎氏や武村常務や中丸部長等）と、三井自身の恩義に依るものであると深く感謝してゐるものである。（以上口述速記に依る）

即ち此の梁瀬商會のあつたところは當時三井集會所のあつたところで（その建物は御殿風であり）その隣りにガレーヂ風の建物があつて、その建物が、そもそも今日ある梁瀬自動車株式會社（梁瀬商會）の發祥の地となつたのである。（後これは、吳服橋際に本社が移轉後、は日比谷分工場となり主としてボデー製作を扱ひ一部に自動車の保管事務「ガレーヂ」を營業し、尙この建物の一部は元議事堂前の梁瀬車庫に移

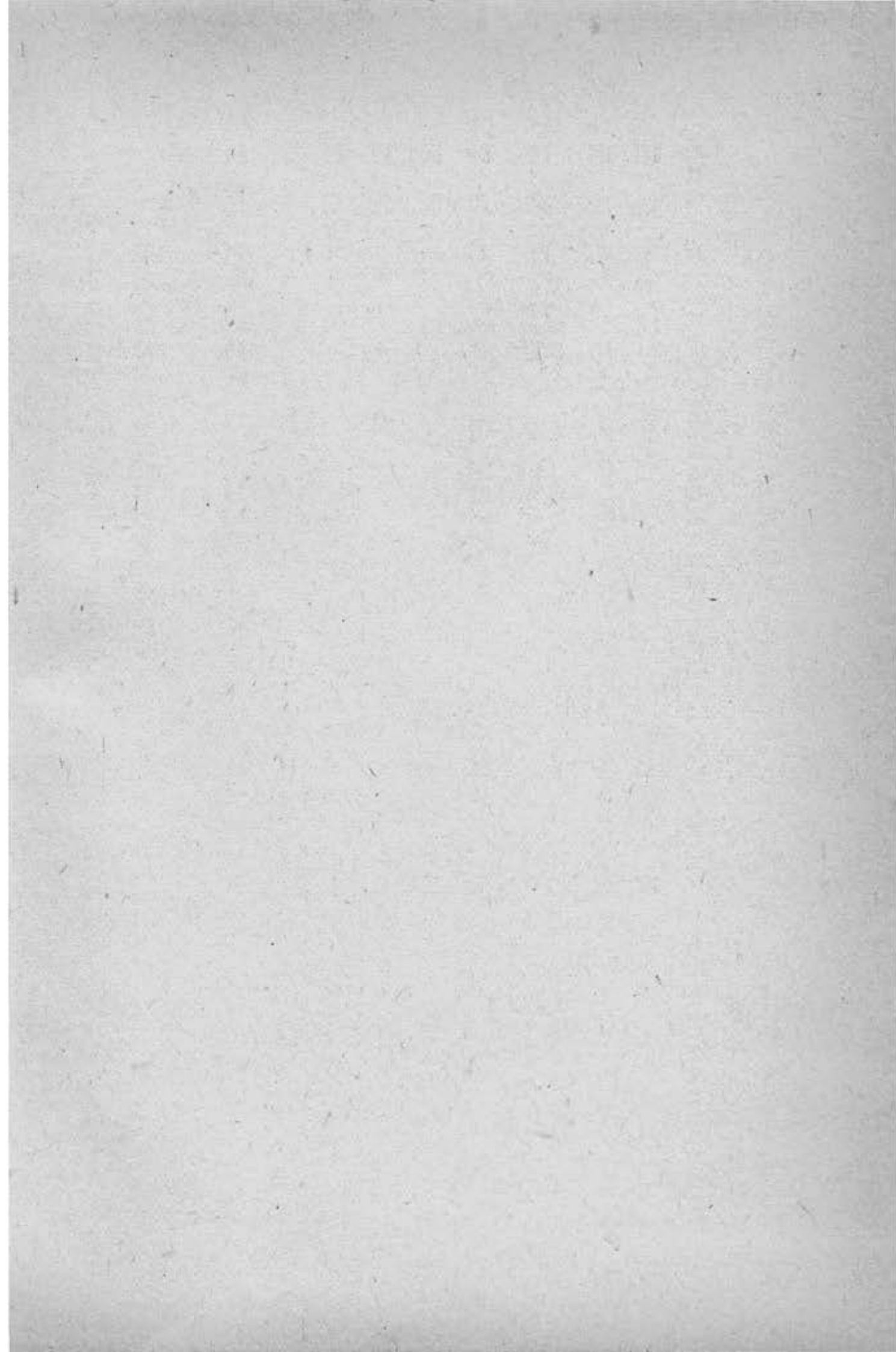


されその一部となつて今次の戦災前まで現存していた)

### 明治年間における國産自動車生産概數

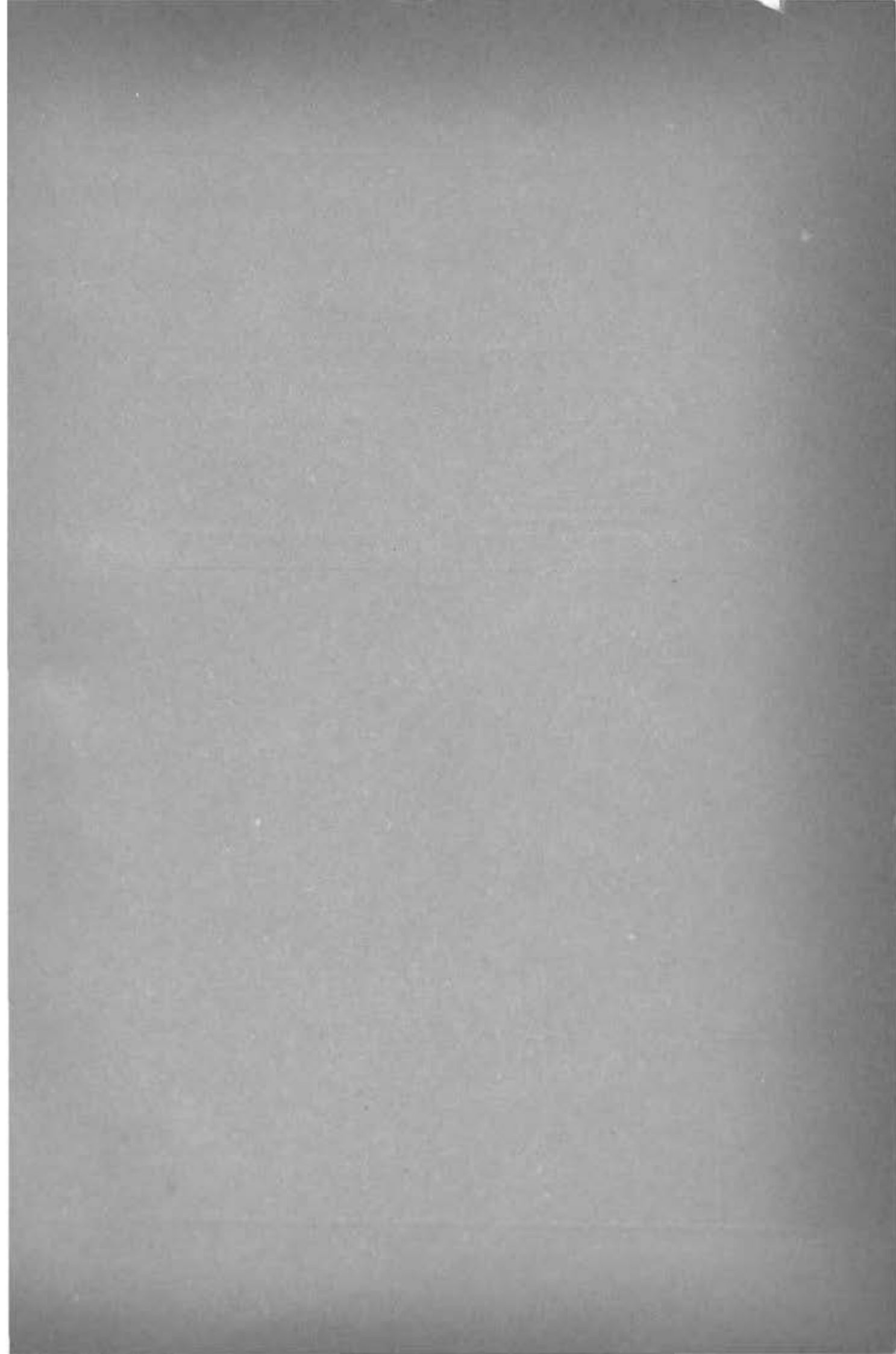
年次	臺數
明治三十七年(山羽式)	一
同 三十八年	一
同 三十九年	一
同 四十年(タクリー號)	一七
同 四十一年(同)	三
同 四十二年(タクリー號、宮田)	五
同 四十三年(後藤、東京自動車 米山、タクリー號)	六
同 四十四年(前同)(外輕便車四)	五
同 四十五年(同)(快進社)	六

○備考 明治年間に於ける國産自動車生産數は右の如くであるが、但しエンジンを購入して組立てたる車輛は加算せず、又陸軍に於て製作したるものは此れより除外して明治四十五年と大正元年は便宜上明治四十五年に一括してある。依つて明治年間に國産自動車として生産されたるものは合計四十三臺と云ふことになる。





大正篇





日本自動車史 年表「大正篇」

大正二年

東京瓦斯電気工業株式會社設立（同社は明治四十三年八月十七日東京本所區業平町に創立され、當時は東京瓦斯工業株式會社と稱す）

同年三月二十日

快進社（橋本増次郎）二氣筒V型十五馬力エンジン前進一段、後退一段、前照燈アセチレン燈小型車を製作なし大正博覽會に出陳す。

同 三年

宮田製作所、小型自動車の試作。

同 六年

東京瓦斯電気工業株式會社々長に松方五郎就任し同社自動車部にてT・G・Eを試作翌七年には一噸半の貨物自動車十臺を完成（後、この車は純國産を表現するためちよだと改稱さる）

同 七年

軍用保護自動車助成法實施となる瓦斯電のT・G・E車は保護自動車に合格。

同 年

株式會社石川島造船所では英國ベームingham市（ピツカース會社の姉妹會社）ウィズレー自動車會社へ技師職工數名を派遣し自動車の製造技術を習得せしむ——後ウィズレーの東洋一手販賣權を買収す。

同八年一月十一日

内務省は省令として「自動車取締令」を公布、取締令を全國的に統一す。

同 年 實用自動車製造株式會社（大阪）創立、ゴーハム式小型三輪乗用車並に貨物車製造

其後ゴーハム式小型四輪、リラー號を製作。

同 年 淺野物産ヴィナス中型自動車を製作二十臺程市販す。

同年 三月 東京市街自動車株式會社は上野——新橋間五、六軒の營業開始に當り、ウィズレー百數十臺を購入なす。

同 九年 石川島造船所自動車部（澁澤正雄）に於て英國製ウィズレー乗用車の試作。

同 十年 名古屋の三菱は伊太利製ファイアツト號をモデルにして三菱ファイアツト號製作。

同 十一年 豊川順彌は日本橋通二丁目に株式會社白揚社を起して八五〇cc小型自動車「オートモ」號製作販賣す。

同十二年九月一日 關東大震災

同十三年二月二十一日 東京市營自動車正式に認可さる。（今日の東京都交通局前身）

同十三年三月 石川島造船所の軍用保護自動車ウィズレー第一號車を完成。

同年十一月二十三日 東京自動車商業組合設立さる。

同十四年六月 横濱に日本フォード自動車株式會社設立さる。

同十五年九月 大阪の實用自動車製造株式會社と快進社（東京）合併ダツト自動車株式會社を成立す

## Ⅱ 梁瀬商會の創立

日比谷時代

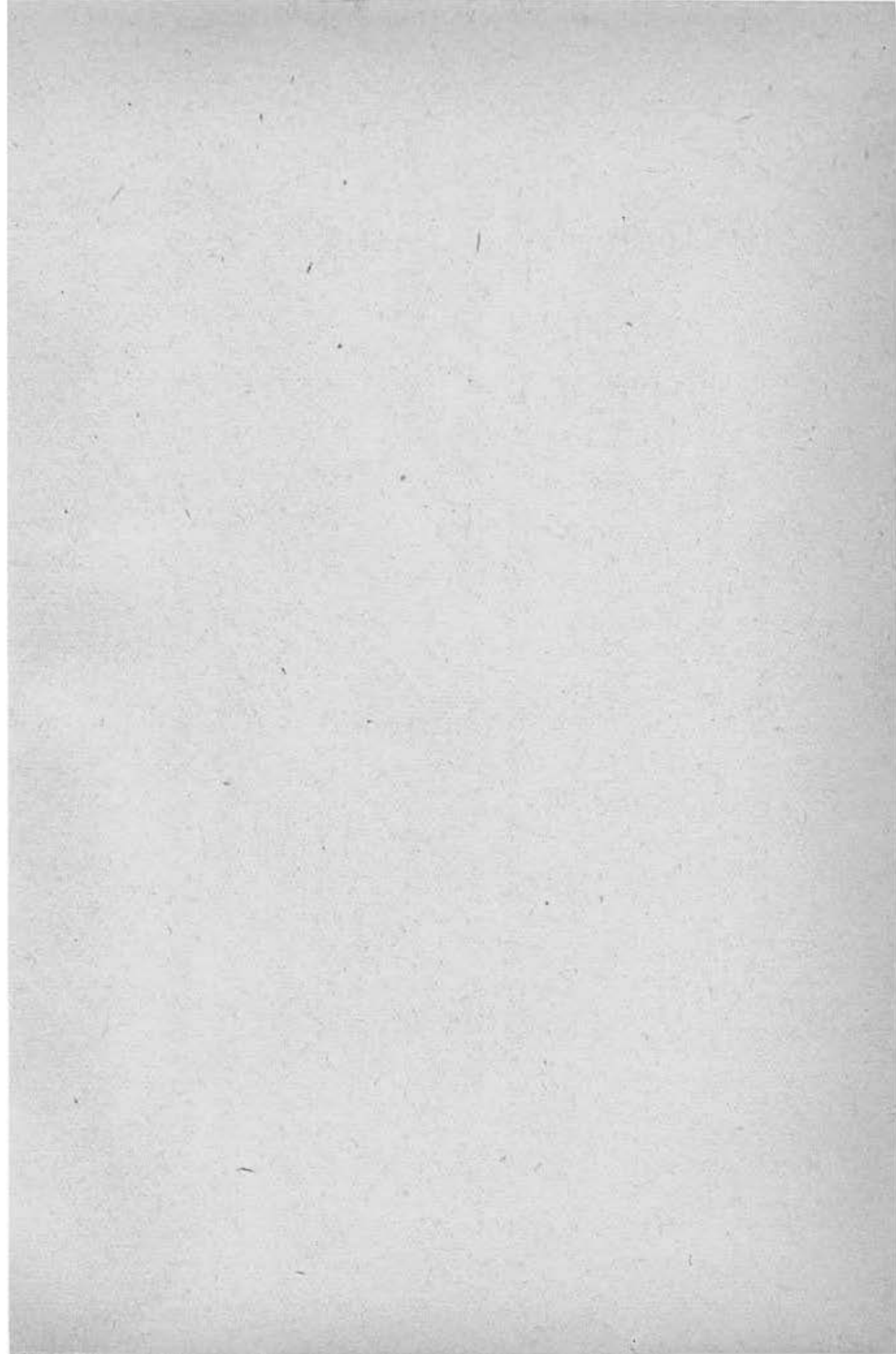
大正四年五月

三井物産機械部の組織變更により個人名義の梁瀬商會を日比谷に創立す。

同 年  
同 五年

日比谷に自動車保管業(貸ガレージ)開業。  
ボデーの架装業を始める。

此頃ビユイツク・モーター・コンパニー、カデラツク・モーター・コンパニーとの日本販賣に關する代理店契約あり(三井より繼承)後、ゼネラル・モーターズスコイポリシヨン設立せられるやその販賣と、英國ウーズレー自動車會社との販賣契約あり。





## 1. 大正初期の狀態と獨立の氣運

大正四年五月二十五日のことであつた。三井物産の機械部の組織が變更され、自動車部が廢止されることに決定すると、梁瀨氏は一大決心を以て同自動車部を個人名義にし、こゝに獨立して自動車業を經營することになつた。

今日の梁瀨自動車株式會社の起源は實にこの時の梁瀨商會に發するのである。

そこで商會が出来た、それでマークを茲に決める必要があつた、それは三井物産の菱井桁を採りアルファベットのYの字が梁瀨のキャピタルになるので此の文字を配したものとした。

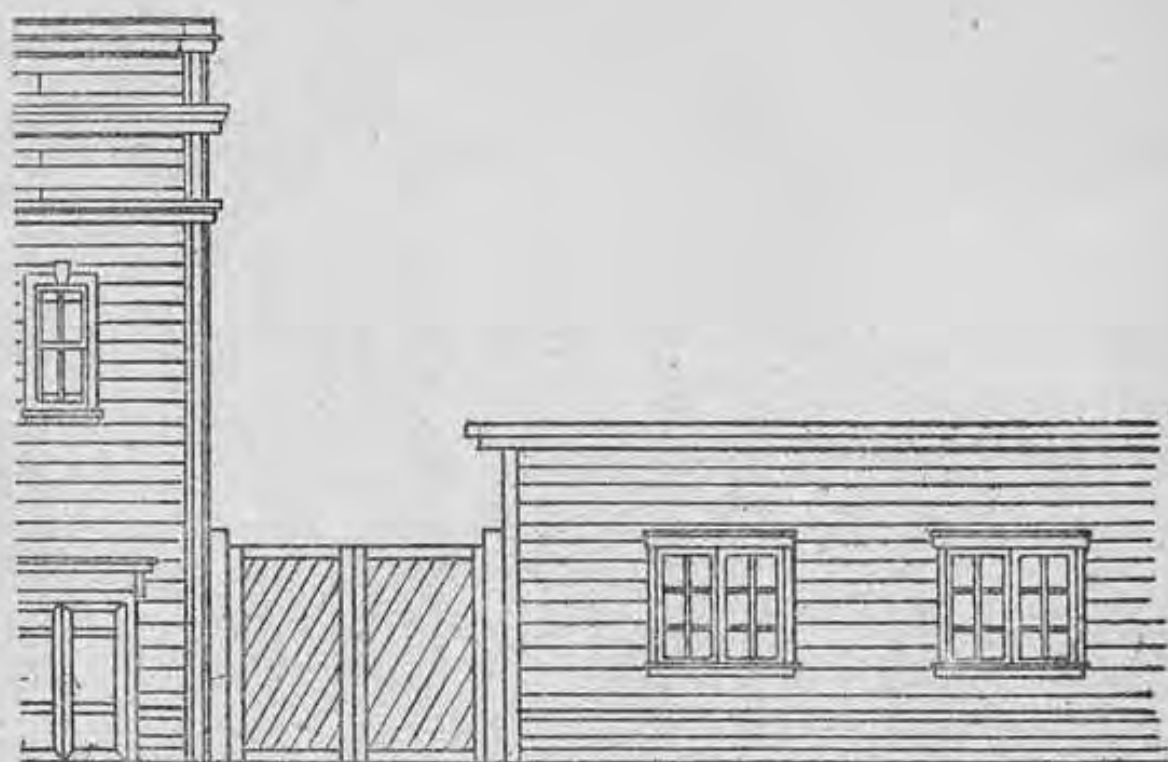
今日ある梁瀨自動車株式會社の社標は即ちそれである。

大正四、五年頃はまだまだ、日本自動車界は黎明期であつた今日の如く、一自動車會社にして一月に何十臺の自動車を賣るなどいふ事情は、夢にも考へられなかつた頃である。而も一般經濟界は不況の底にあえいでゐたのである。

「時期がよくなかつた」

梁瀨氏の苦境を察した積りで友人達は斯う云つて慰めるのであつた。しかし梁瀨氏はそのような慰めの言葉を受入れる餘地はなかつた。





「時期だつて？ 時期とはチャンスの意味かね？ チヤンスなら、チャンスといふものは待つてゐたつて來るものぢやないこつちから作つてゆかない限りは、一生待つたところでチャンスなんでもものは來やしないよ」

と、自問自答はして見るものゝ、どうしたら此の新規事業の打開が出来るかと、此の考へで一杯であつた。然し梁瀬氏が日頃終始一貫信奉してゐる考へは、所詮人は努力なしには成功は得られるものではない、といふことであつた。

然も此の梁瀬氏が自動車界に其身を投じたのは、これより先大正二年三井物産株式会社機械部礦油係主任として同系の經營を託せられたるの時に初まる。大正二年は其の元號に示す如く明治大帝崩御、今上天皇（大正天皇）の御代の初めに當り、吾が國の社會には夫々の變革のあつた時期である。また其頃は日露戦後未だ十年にもなら



す、しかも戦後景氣に一大頓挫を來して經濟界沈靜を極めていゝ時でもあつた。

そして自動車は當時漸く吾が國に姿を現はしたるに過ぎず、全國を通じて、未だ一千臺にも達しない頃であつた。然れば當時に於て自動車を事業として經營するには餘りにも投機的な危險極る狀況であつたことは、明白である。

その頃の梁瀬商會の帳簿を繰つてみると、一年に五臺の自動車が賣れたことになつてゐる。一年に僅か五臺の自動車！ 勿論時代はそれ程に幼稚であつたのだ、といつてしまへばそれまでであるが二ヶ月に一臺の自動車が賣れる程度では、何としても苦しいに相違ない。しかし梁瀬氏自身は大いに元氣だつた。一臺の自動車が賣れると、店員を引つぱつて行つては「幸樂」あたりで大いに英氣を養ひ店員の勞を犒つた。

たしかに梁瀨氏は機會を克く擲んだ、訪れたチャンスを見事にキヤツチし得たのである。機會は常にあると人は謂ふ、然し乍ら自身に訪れたチャンスにキヤツチしたものゝみ、これが利用され活用される。吾が國、創生期の自動車界に於ても、これは同義語であつた。然らば此處に於て梁瀨氏こそ明らかに之れを證明することが出来るのではあるまいか。

其處で當時の自動車界の幼稚と一般經濟不況の程度はどうであつたか、説明を加ふるに先だち、當時の經濟集計表を示すと。

年	國庫財政歳入歳出決算表		國債年度末現在表		日本銀行兌換券發行高	
	歳入	歳出	兌換券發行高	正貨準備高	兌換券發行高	正貨準備高
明治三五	三六	五三〇・四四八	一・一四六・二九二	三二二・七九一	一・一五・五九五	
三六	三七	四六四・二七六	九六九・二八九	三六九・九八四	一四七・二〇三	
三七	三八	六〇二・四〇一	一・八五〇・三八一	三五二・七三四	一六一・七四二	
三九	四〇	七九四・九三七	二・二五四・三四六	三四一・七六六	一六九・五〇五	
四〇	四一	六三六・三六一	二・二三八・三〇七	三五二・七六三	二二七・八四三	
四一	四二	五三二・八九四	二・五二六・九七八	三五二・七六三	二二七・八四三	
四二	四三	五三二・八九四	二・五〇〇・九七七	四〇一・六二五	二二七・八四三	
四三	四四	五三二・八九四	二・四三七・三七八	四三三・三九九	二二七・八四三	
四四	四五	五三二・八九四	二・四三七・三七八	四四八・九三三	二二七・八四三	
大正元	二	五三二・八九四	二・五七三・二〇〇	四四八・九三三	二二七・八四三	
		七二一・九七五	二・五七三・二〇〇	四二六・三八九	二二七・八四三	

△單位は何れも千圓



即ち斯くの如く吾が國の財政は、日露戦役後の明治四十、四十一年の兩年には戦勝日本の經營をなすべき意氣はすさまじく、其の歳入歳出に大膨脹を示しているが、四十二年になるや早くも緊縮せられるに及んでゐる。

而して爾後年々歳々緊縮は續けられ、其の大正二年に到るも尙、明治四十、二年に及ばざることには前表で明らかである様に、以て吾が國財政が如何に幼稚なものであつたかと視はれるのである。

又吾が國の國債は日清、日露の兩戦役を経て大いに増加したが、特に日露戦役に於ける増加は甚だしきものがあつた。即ち日露戦役前の明治三十五年末は僅かに五億三千万圓の現在高に過ぎなかつたものが、それが明治三十九年即ち日露戦役後となると二十四億二千万圓に激増し更に大正二年度末には實に二十五億八千四百萬圓と云へる巨額に達したのである。されば此れに對する利子は年々巨額に達し、年一億數千萬圓を算し、政府の財政を壓迫すること極めて大いなるのみならず、一般金融界にも大なる不利益を與ふるのであつた。

日露戦役後、戦勝した吾が國の經營に大抱負を以つて組織された西園寺内閣であつたが財政收支の行語りから桂冠し、代つて桂内閣は其内閣政綱の第一のスローガンを掲げ、所謂國債の整理に乗出したのであつた。減債基金制なるものは此時に設けられたのであつた。

尙、此の頃の金融狀勢を見るとすれば銀行預金、貸出金、手形交換高、其他を茲に記述する必要が

あるが、便宜上金融の基礎を形成する、日本銀行兌換券發行高を茲に記述して當時のバロメーターをうかがふことにした。(前表下段参照)

其處で一般民間の起業趨勢は日露戰役後、南滿洲鐵道の創立を始め、諸起債は一時熱狂的現象を示して間もなく朝露の如く消え失せた新事業も尠くなかつたが、併し堅實な起業の中には相當に存在したのであつた。従つて經濟活動の基礎たるべき兌換券は、此際大いに増加せねばならないのであるが前表で見る如く大正二年末に於て僅かに四億二千六百萬圓、四十年より六ヶ年にして僅かに一億七千四百萬圓を増したのみである。これを年平均にすると二千九百萬圓に過ぎない、其の發達の遅々たるは驚くべきものがある、かくの如くこれは戰勝を名とし計畫された泡沫景氣の後始末は大正に入るも未だ癒せざると共に、急激に増加した國債の利拂に壓迫せらるゝ點等から來ているもので、吾が國財界の不況を如實に知り得られるのである。

○自動車登録臺數表 (單位臺數)

年	年末現在	前年比較(増減)
明治四一	九	……
四二	一九	一〇
四三	一一一	一〇二
四四	二三五	一一四

大正元	五一二	二七七
二	八九二	三八〇

自動車は、斯くの如く極めて幼稚であつた明治四十一年末には僅かに九臺、大正元年末に於て漸く五百十三臺、同二年末に到つて八百九十二臺に達したに過ぎない、されば自動車關係事業の振はないのは當然である。製造に販賣に、運輸に、修理に、殆んで見るべきものはなかつたのである。

然らば當年自動車營業者はなかつたかと云ふと決して然うではなかつた。大倉系の日本自動車、高田商會、山口勝藏氏其他少からざる輸入販賣業者があつた、また三井物産株式會社も又その一つで同社機械部内に自動車係なるものを設け麴町區日比谷公園前に營業所を置き自動車販賣及修理を業として居たのである。然しこれが前述の如き梁瀬商會に繼承され、今日の梁瀬自動車にと、發展的に移行し行つたのである。

## イ、開店當初の自動車の賣込み

大正元年、ビウイク車の代理權をとつて、大正二年に日比谷に三井物産の機械部代理店として自動車の經營を初めたのであるが、店を開いた所が、いかにも自動車というものが賣れない。

大正三年になつて尙、自動車が動かなくなつてしまつた。餘りつらかつたので自動車を買ひそうな所を一わたり見渡して見たものであつた。所が、今日の日本で自動車を買ひそうな人は後藤新平さん大隈重信さん、それに山本条太郎さん、それから富士紡社長で、初代の工業倶楽部の理事長をされた和田豊治さんといつた人達位しか見込がなかつた。

山本条太郎さんにはいち早く自動車一臺を押しつけてしまつたし、後藤新平さんは満鐵からの贈物としてその時には早くも自動車を持つてゐたし、残つてゐるのは和田豊治さん位であつた、當時和田さんは東京の向島の土堤の向うの方に住んでおられた。そこで私は和田さんを訪問して

「和田さん、日本で乗用自動車を買つてもらふ方は貴方だけだ、今は自動車は餘り人が乗つて居らないし、珍らしいものであるから是非貴方に買つて頂き度い」と申込んだ、所が

「僕は何事をするにも全部お、ふ、く、ろ、に相談して、するので早速聞いて見よう」



こういう返事であつた、その頃そのお母さんは極めて元氣で、私も幾回となく和田さんを訪ねて行くものであるから、顔みしりであつた。

和田さんは母親に向つて「梁瀬君が自動車を買つて呉れといつてくるんだが、どうしたものでしょうか」と尋ねた。ところがお母さんの答へられるには

「この方の前でいうのは悪いけれども、自動車で乗つていては人様の子供を傷けたり、ひき殺してしまつたという話でもあるし、そんな大それた乗物は結局は人をひくちやありませんか、そんな人にならざわいを引きおこすようなものは、使はん方がいゝぢやありませんか」といつて、お母さんは、斷然自動車で乗ることを許さなかつた。

そこで私は和田さんに向つて

「お母さんは、その日は許さなかつたでしょうが、然しお母さんは昔の人である。お母さんと貴方とは同じ考えではないでしょうね、文化ということを考へて、貴方にはお母さんと別な考え方があつて、貴方では許さなかつた」

と追ひかぶせた。すると和田さんは

「自動車で乗つても、その自動車を、おふくろに見せないようにする方法があるかね」と尋ねてきたので

「それはありますとも、向島の三圍稻荷神社があるでしょう、その脇にガレーヂになるような所があるから、其處に自動車を置いて、朝に家を出掛けるときには、すました顔をして、散歩するように見せかけ、ガレーヂまで歩いて来て、其處から自動車に乗るといふ方法を、とられたら、いゝぢやありませんか、そしてその自動車に乗つて工業倶楽部や、富士紡へ通つたらいゝぢやありませんか、そうなさつてはどうですか」

と答へると

「それはいゝ考へだ、そうしてみようか、所で値段はいくらするものか」

というのであつた。その時の乗用自動車というのはビュイックの四氣筒もので、一九一二年モデルであつたが、これは側面にドアが開いていて、馬車のように飛び上つて乗る車であつた。ヘッドライトはアセチレンガスを灯しておつたので大變に臭かつた。アセチレンのくさみが餘りひどかつたので、電氣の球ととりかえてやつたことを覺へている。それでこの車の原價が二千五百圓に附いた。當時の二千五百圓といえばかなりの大金で、これを小遣のように出すには餘りにも大金であつた。そこで私は「自動車というものは、今は買手がないが後には相當の使い手が出て来て値段もあがるべきものです。然しあなたは今自動車が欲しくもないのに無理におすゝめするのであるから、一千圓を出して頂くだけで、この車を上げますから當分乗つていて下さい。私の方で入り用がありましたら返して頂け

は宜しいのです」

こういふ話にして金一千圓也を頂いて、和田さんに當分乗つて頂くことにきめたのであつた。

大正四年になつて、大正天皇の御即位式が京都で取り行はれることになつた、ために京都はにぎやかになり行幸もあるので名古屋がその中間驛ということになつた。つまり名古屋城の下に陛下の御泊りの行在所が作られて眞赤なジュウタンを敷きつめ、それに錦欄の椅子が備えられてあつた。この光景は私はよく拜見した。陛下はこの名古屋の行在所に一泊なされるわけである。

したがつて名古屋では陛下の護衛ということが大きな問題となつてきたわけである。その頃名古屋には丸茂藤平さん、という警察部長がおつた。この男が、陛下の護衛のために是非乗用自動車が一臺必要なのだからどうかしてくれといつて、東京の私の所迄わざわざ出かけて來た。

その頃は私の方でも京都に於ける陛下の護衛のために入用だからといわれて、その時二臺しかなくつた乗用車を京都へ賣つてしまつた後であつたので、名古屋のこの申出に應ずることが出來ない始末であつた。それでも丸茂藤平警察部長は、とに角頼むから何とかしてくれといつてきかなかつた。そこで私は考へて、先の話しの和田豊治さんの所へ出かけていつて

「名古屋の警察部が、陛下の護衛のために乗用自動車一臺をどうしても欲しいといつて、そのため警察部長の丸茂さんがわざわざ東京へ見えた。いま此處に一千圓也を持つて來たから先日の御約束に

よつてあのビュイック乗用車を返して頂き度い」と申込んだ所が、宜しいといつて氣持よく即刻私に返してくれたのであつた。それでその車を愛知縣へ二千五百圓にまた一千圓の手數料を加へて三千五百圓に賣つたわけである。

こんなことで私の所の手持ちの車を全部賣りつくしてしまつたのであるが、然し店に品物がなくなつてしまつたからといつて、にわかになんか新しく自動車の仕入に取りかゝつた始末であつた。これは大正天皇御即位式典が京都で行はれた大正四年のことであつた。そこでこの大正四年には全部で二十數臺の乗用自動車の商ひが出来たことになつた。(以上は口述速記に依る)

### □、タクシーのはじまり

大正四年頃は、今の日比谷公園の前の三井の三信ビルと愛國生命との間に、三井の建物があつて、これが相當に大きな建物であつたので、此處を私の販賣店及工場として自動車の商ひをやつておつたが、後日この建物を解体して元の國會議事堂の前に五百坪ばかりの梁瀬ガレージを作つた。このガレージは關東大震災にはあやうく助かつたが、日米戦争の戦災によつて焼けてしまつた。

日比谷の三井の建物の中にあつた私の元の店は、間口二十間許りあつて、中央部に自動車を飾りた



てゝ入れてあつた。

その頃は機械油の商賣もやつていたので、その方の利益をほとんど自動車の方にみつぎ乍ら細々と自動車の商いを續けておつたものである。斯うして自動車商會を初めた頃は餘りに貧弱なものであつた。話しがとび／＼になるが、大正五、六年頃の日本の自動車臺數は千五百臺位だつたと思ふ。

その頃私はビュイック、カデラック。三和自動車の藤原俊雄氏はバツカード、日本自動車の石澤愛三氏がイタリーのファイアット車などを、それ／＼取扱つて日本一の一手販賣者であつた。

又セールフレーザー会社のフレーザー氏がフォードを日本一手販賣の經營していたが、フレーザー会社は後に別れてエンバイヤ自動車商會など多數の販賣店が出来上つた。大倉喜七郎さんは日本自動車の世話をやいておられた。

大隈さんが名譽會長で、フレーザー氏が會長、大倉喜七郎さんと私が理事で、日本自動車協會を創立し帝國ホテルの中に事務所を置いていたのもこの頃のことである。

その頃、柳田諒三氏は電氣商で自動車とは何等關係がなかつたが、私が柳田氏に向つてハイヤーという仕事をしてみたらどうだと云つて勧めてやり、私の手許に在つたビュイック四氣筒乗用車を提供してやつたのである。其處で早速、柳田氏は此の新しい仕事を、吳服橋の通りの現今の柳田ビルの其處を根城にして、私のビュイック四臺を使用してハイヤーの仕事を初めたのである。これは全くおか

しなもので、こうしてハイヤーに先鞭をつけてやつてみる内に、壓倒的であつた日本の人力車が段々減つて来て、いよいよ東京驛の前にはハイヤーとかタクシーといふものゝ自動車がすらりと並んで、人力車の方がその端つこに小さく並ぶような時期が来るようになってしまつた。

大衆が自動車に乗るようになるのは何時頃かと云ふ、かけつこを同業者間でしたことがあつたが、その時當分見込がなからうと云ふ者、五年後だらうと云ふ者、三年後と云ふ者等があつた。私は今から二年半したらそうした時代になるだらう、といつて一番近い時を豫想したのであつたが、實は二年半よりも半年早く人力車が無くなつて大衆がタクシーやハイヤーに乗れる時期が来てしまつたのであつた。

世の中の移り變り、この變化というものは案外早く、變り初めるとまゝたく間に變化してしまふものである。どうしてこんなに早く變つてしまうのかと全く不思議に思う程、日本の自動車事情も急速に變化してしまつた、全く脱兎の如く早く轉換するものだと言つて驚き合つたこともあり、この話によつて奢つて貰つたり、奢らせられたりしたこともあつた。

(以上は口述速記に依る)

## ハ・タイヤ販賣は元祖

梁瀬自動車としてタイヤを取扱つた歴史はまことに古い、U・Sタイヤは古くから代理権を持ち、ミチエリンも取扱ひ、これはトレッド面が極めて繊細に仕上げてあり主として高級な乗用車向でペーロンタイヤであつた。また國産タイヤの勃興につれて横濱護謨が古河系で操業中ハマタウンと云ふ名稱で賣出されたものも取扱つた。それからダンロップ・タイヤである。

即ち此のダンロップ・タイヤの總代理店としての販賣區域は梁瀬自動車（關西地方、名古屋以西）と日本自動車（名古屋以東、關東東北地方）であり（大正三、四年の頃）サブはエンバイヤ自動車商會（當時は會社と云はなかつた）と金子商店及馬場商店の三社であつて折柄BSタイヤの擡頭を機會としてタイヤ販賣史上稀る見る猛烈な販賣競争を演じ、遂に協定和解が成立するなどして月曜會と稱するものが生れるに至り、此の例會が毎月一、二回月曜日をトして催されることなどがあつた。

又此の頃トラック・タイヤはソリッド時代で此の入替には東京護謨（下落合にあつた）を利用したものである。

## 2. 戦争の景氣勃興する

大正三年に突發した、第一次世界大戦は年を経るも終熄しなかつた。歐洲の殆んど全部が、これに捲き込まれた許りでない、吾が國の如きも大正三年に早くもこれに参加して日に月に其の戦線は擴大していつた。然して歐洲各國の工場は全く軍需工場と化し、普通一般商品の製造は中止され、その需要起ると共に軍需品又は歐洲の工場のみを以つてしてはこれを充すことが出來ない、自然、其の註文は吾が國にも飛ぶことになつた。次に運送船の戦時徴發、軍需品運搬の激増に伴ひ海運界の景氣は勃興して吾が商工業、殊に外國貿易と海運事業に空前の熱狂的景氣を現出するに到つたのである。

第一次世界大戦中の貿易表（單位千圓）

年	輸出	輸入	入超出超△
大正一	五三六・九八一	六二八・九九三	九二・〇一〇
二	六三二・四六〇	七三九・四三一	九六・九七一
三	五九一・一〇一	五九五・七三五	四・六三四
四	七〇八・三〇六	五三三・四四九	一七五・八五七△
五	一・二二七・四六八	七五六・四二七	三七一・四〇△
六	一・六〇・〇〇五	一・〇三三・八一	五六七・一九三△



七	一・九六三・一〇〇	一・六八八・二四三	二九三・九六△
八	二・〇九八・八七三	二・一七三・四九九	七四・五八七
九	一・九四八・三五四	二・四六二・二七四	二八七・七八〇

我が國に於ける外國貿易は日清戰役以後殆んど輸入超過を呈してゐたが、大正四、五、六、七の四ヶ年間出超を呈している、然も其の出超たるや殆んど申譯的のものではない、大正四年の出超は一億七千五百萬圓を算し、過去未だかつて見なかつた大なる差額を示したのに驚かされて居るのに、翌五年は其の倍額以上三億七千一百萬圓に跳躍し更に六年は五億六千七百萬圓と云へる巨額の出超をさへ呈するに至つたのであつた。尙、此の頃に於ける船會社の商況とも云ふべきは、勢ひ當るべからざるものがあり、後年、人の云ふチャーター豪華時代を現出したのであつた。試みに六年の出超額をとり大正元年の輸出總額の五億二千六百萬圓に比較してみれば、大正六年の出超額のみで四千一百萬圓の超過を示して居るではないか、従つて我が國の財界は異常の活況を呈するに到り、自然、自動車の需要は勃然として起つて來たのである。

梁瀬氏は云ふまでもなく此の波に乗り躍進して着々と利益を擧げて行つた、そこで當時の自動車需要は、どの程度であつたか。

自動車及同部分品の年次輸入表

年	總計	自動車		部分品	車輛一〇〇に對する 部分品率(△印マイナス)
		數量	價格		
大正					
三	四九七	九四	二四〇	二五七	一〇七%
四	一六四	三〇	七〇	九四	
五	七一二	二一八	三八六	三二六	△〇・一五
六	二・六六六	八六〇	一・五六九	一・〇九七	
七	七・六六〇	一・六五三	四・五二四	三・一三六	
八	一一・二八一	一・五七九	五・五三一	五・七五〇	一〇三
九	一〇・四七八	一・七四五	四・八六五	五・六一三	
十	八・〇六六	一・〇七四	三・二六一	四・八〇五	一四七
十一	七・三〇九	七五二	二・二一六	五・〇九三	
十二	一三・四八二	一・九三八	四・九五五	八・五二七	一七二
十三	二一・一八五	四・〇六三	八・七七二	一二・四一三	一四一
十四	一一・六六一	一・七六五	四・六〇〇	七・〇六一	一五三

自動車の使用數を見る前に、其自動車及同部分品の輸入の狀況を見ることとした。理由は當時、吾が國の自動車製造は全く振はず、其の殆んど全部を輸入に俟つの狀況であつた。それで自動車の一般

國內需要數を識る前に前掲の輸入表を見る必要がある。

梁瀨氏が獨立して大正四年梁瀨商會を設立した當時の自動車輸入額は、僅かに十六萬五千圓に過ぎない。然るに歐洲に於ける世界大戰の進展するにつれて自動車の需要は急激に増加して翌五年には七十一萬二千圓となり、六年には二百六十六萬圓となり、七年には七百六十六萬となり、八年には一千万圓を突破し一千一百二十萬圓と云ふ巨額の輸入額となつてゐる。そこで大正四年を基準として増加の割合を見ると、五年は四倍、六年は十六倍、七年は四十六倍、八年は六十七倍と云を急激な脹膨的數字を示している。

自動車の輸入の激増は叙上の如くで、これと比例して自動車の使用數も又急激に増加を示しているのである。

### 自動車登録臺數年末現在表

年	年末現在	前年比較
	輛	増加 輛
大正二	八九二	三七〇
三	一・〇六六	一七四
四	一・二四四	一七八
五	一・六四八	四〇四
六	三・六七二	一・〇二四

七	四・五三三	一・八六一
八	七・〇五一	二・五一八
九	九・九九八	二・九四七
十	一二・一一七	二・一一九
十一	一四・八八六	二・七六九
十二	一六・四七六	一・五九〇
十三	二七・二三三	一〇・七五七
十四	三一・八八一	四・六四八

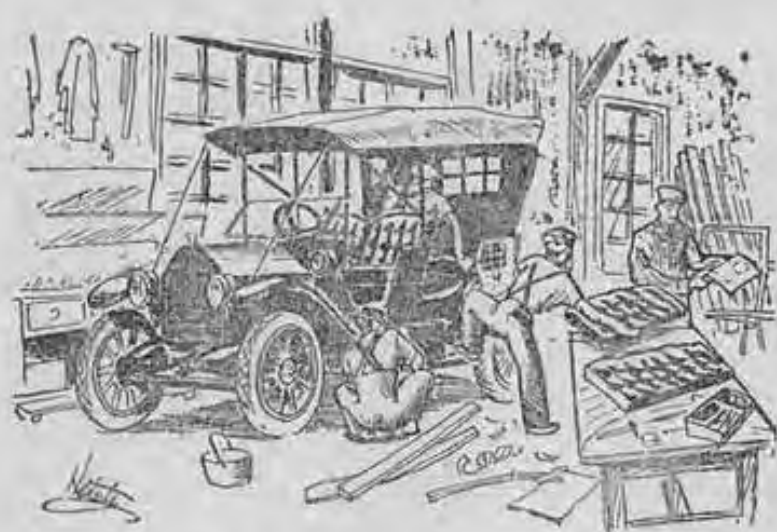
い・土堤七の想ひ出

大正五年の頃、私は赤坂檜町の明石さんの屋敷を借りて住すまつていた。明石さんと言えば、その頃の陸軍中將で、ヒゲの立派な方であつた。後に大將で男爵になつた人である。

明石さんがシベリヤ出兵當時ロシアの重大要務を帯びて出かけられてその留守中に借りたのであるが、借りたいというよりは寧ろ頼まれて使つていたわけである。

大正五年の頃は、私の会社でどんどんと自動車のボディを造つて居た頃で、しかも私の所のボディは上手に出来るというので、あちらこちらから注文が殺到していたのである。





こうした急しいボデー製造をやつていた、年の瀬も迫つた頃宮内省から數臺になる自動車の修理注文を受けテンヤ、ワンヤに騒いで働いている時西園寺さんの弟にあたる住友吉左衛門さんがやつて来て、カデラック自動車のボデーを新調してくれという注文であつたそれは丁度、注文に追はれて居る。大正五年の暮れであつた。住友吉左衛門さんの云はれるには「大正六年のお正月にはこの車に乗つて兄貴の所えも年賀に行きたいから、是非元日までに間に合はしてくれ」という頼みであつた。こう云ふ次第でカデラックのボデーを暮まぢかに引受けてしまつた。

それで、この住友さんカデラックのボデーを造る擔當者は堤七郎ときまつた。堤七郎というのは、一名「土堤七」どてひちり」と云ひ皆んなで愛稱して居た本人である。

期日のせまつているカデラックのボデーを造るのに土堤七は一週間も全く寝ずに仕事を續けたものであつた。年末になつて三日位は全く床に就かなかつた。この努力を拂つたおかげで住友さんのカデラックは元日に遂に出來上つたわけである。

土堤七は大正六年の元旦に昨晚の、寝ずの重たい頭をかゝえ乍ら、私の屋敷に年始に来て、

「只今カデラックをおさめて來ました」

とあいさつをしたが、まつたく疲れ切つて居た土堤七は、そのまゝ階段からごろごろとこぼれ落ちる騒ぎを演じて大笑いをしたことがあつた。これは丁度私の所の次郎が生れた年の元旦のことである。

この大正五年末にはボデーの注文が相當數あり、工場の人達もきわめて熱心に仕事を仕上げてくれたもので、今日のように時間がおそくなると夜業料をよこせというようなものではなく、皆が意氣に感じて自分の仕事にせいを出してやつたものである。三日間もねむらずに仕事を仕上げたなどという事は全く今日では見られないことだと考えるのである。(以上は口述速記に依る)

尙、此頃この荒仕事に従事したのは、泉藤吉(現在の泉自動車工業社長)高橋一郎(元高橋内燃機をした人、今は物故している)山縣政夫、田中常三郎(現在日産自動車株式會社取締役吉原工場長)氏等であつた。

ろ・ボデー製造をもそももの始め

梁瀬氏が自動車のボデー事業に關心を持ち始めて其の創業をしたのは大正五年頃の乗用自動車を積

極的に販賣することになつた時である。

其頃日比谷の店では月に二十臺を作り後には五十臺を作つたが、多くは乗用車であつたため、當時の美術家六角紫水氏を迎へて、静岡の漆工を借りて多量生産に乗出すべく、これに着手した、然し漆は室内の調度品等には極めて優美なものであるが、室外にあつて、強い太陽の直射と、風雨に曝らされては、兎角、小ひびが這入り、その持続性に乏しく遂に此の計畫は見事失敗に終つた。

斯くして七、八年凡ゆる點から研究をしている内に米國では薄鐵板の打抜が發明され、プレスを以つてトツプとかカウルを打抜き所謂流線型のボデーラインが流行し初めた、同時にデュコ塗料が發明されたので早速これを輸入して吹きかけ式を始めたところ、太陽の直射、風雨に遭ふても絶対に大丈夫と云ふ確信が與へられ、充分にボデー事業は見込ある商賣と確信が得られたのである。

終戦後に到つて極く最近。箱根直行の三十八人乗ロマンス・シートのボデーを數臺、ボデー部がデリパリーしたが想えば隔世の觀があり、これを以つて朝鮮、或は泰國邊にも、我國のボデーの輸出は可能となり、南米其他にも輸出量の増加を見つゝある現在はまだ欣ぶべきことである。

は。「校長」先生とは誰ですか

創業當初は、工夫することが何より肝心で、初めての仕事に取掛るのであるから、それやこれやに氣を使つて、ことに當るので、並大抵の苦勞ではない。

今日では簡単にボデー業として、チャントした分類的な職業にまでなつてゐるが、この發明には幾多の古來來歴を重ねたので想えば、あんなことが、と、思ふ節もないではない。

塗裝と云へば手塗の熊刷毛や筋かひを使つて居たペイント職が、今日は文化も進んだものエヤーコンプレツサーで噴霧器を使つて吹着け仕上げをするやうな、あの綺麗なバス・ボデーが生れるやうになつてゐるが、この塗裝の昔に遡れば、その起源はぬしやと稱する漆器職工を静岡 焼津附近から大量にかりたてゝつれて來てこれを如何にも自動車の塗裝工らしい立派な職工に仕立てる苦心があり。またボデーの骨組を木骨とすれば車大工を呼んで、これを兎も角、自動車の型は馬車の型より進んだものを習得させ、又馬具師と稱する荷鞍を造るものから内張職工を仕立てる。

かくの如く自動車業に依つて、ひとかどの専門職を修行して行くことの出来るものが、旺んな頃は梁瀬自動車を出身したもので全國に凡そ一千人もあつた程である。

それ故、日本中の自動車の關係者はトラック運送事業にバス事業に、ボデー製造業者の中に、官廳



や所謂、お邸運轉手の中に、又個人營業者の中に、何處へ行つても梁瀬自動車で仕事をした人間の顔を見ないところが全國に何處もない様な状態にまでなつて來た。

嘗て私が東海道を自動車で下つた時、沿線各要所に梁瀬色がたゞよつたことは、決して誇張でもなければ、虚偽ウソでもなかつた程である。それ故か、誰、云ふとなく、梁瀬は自動車營業者と云ふよりは自動車學校と云つた方が、寔にふさはしいと云ふ評判となり、それらの人々の間で梁瀬學校卒業生であると稱して名簿などを作つて既に卒業生の會合などをして居たものもあり互に其の卒業生同志で親睦を重ねている裡に、その名簿は五百名位に達しておつたこともあつた様である。それ故に各處の自動車關係の寄合に私が現はれると、校長が來たと云つてよく冗談を云はれたものである。だから校長と云つても最初は、誰の事かと思つて不思議にして居た私も、その校長とは即ち自身のことであつたと云ふ様な、美しい挿話も生れたこともあり、互に愉快に笑つたものである。(以上は口述速記に依る)

### に・「運ちゃん」の配給元

大正三、四年の頃、新規に自動車をセールスするため是非共これにつけてやるところの多數の運轉手が必要であつた爲に方々の若い者を家に集めて、運轉手として將來性のある者を選び、その志望者

を、或時は五人、或時は十人と、教育を授けて運轉免許をとらせ、官廳や其他へ、車と共に付けてやつたことがある。そして其頃のバス會社、トラック事業者には此の運轉手を配給してやつた、そして其頃のこれらの會社では大抵初任給は二十五圓位であつたよめ、當時としては相當優遇された方で皆んなが、喜んで行つたものである。

其後會社に車輛係を作つて多量に運轉手を養成したよめ此の中から、色々變り種が出て凡そ二千人は位は梁瀬自動車から、全國に散つている。

それで此の運チャン華やかなりし頃、面白いと云つては變だが、正に變り種運轉手が一人いた、それは大正七、八年頃、芳川顯正伯令嬢で芳川鎌子夫人と鐵路の情死を遂げた倉持陸助と云ふ運轉手があつた、たしかに當時は社會に投げた一大事件であるが、會社出身の運轉手物語りとすれば、運轉手流行時代のハデなエピソードでもあらう。今は昔の語り草である。(以上は口述速記に依る)

### ほ・運輸事業へも先鞭をつける

#### 「トラック」

我が國に於ける運輸事業と云ふものを、あの馬力からトラック輸送に轉換するために大正六年頃を

中心としてシボレー・トラックを以つて諸所の運送會社を遊説し澤山な運送業者の實態たる馬力を主とする荷扱業者を集めて資本金を持寄り、トラック輸送業に轉換して利益をあげるやう、色々な面から機動性と云ふものを説明し、又時には技術者を派遣して懇切に自動車を教へたため、其後段々と發達を見たので、後年は、あの戦争中の小運送を、あれ程までに飛躍させた階梯となつてゐることは衆知の事實である。

## 「バス」

又、バスと云ふものが、どうしても一般大衆のために必要なることを信じて、恰もあの豆腐屋が吹く喇叭の乗合馬車をして、此の文明の利器のバス業に、これらの業者を轉換せしめ、その組合をしてバス會社に變貌させるため進歩の手引をしたことには、相當長期間これに努力が拂はれたものである。伊豆の伊東を中心とした東海自動車の設立を計つたときの如きは伊東の熱心な指導者中村長五郎氏と共に修善寺の新井屋旅館から出發して伊東まで乗合自動車を通す間に、その當時、道路が如何にも狭かつたため、例の豆腐屋の喇叭を吹く乗合馬車の、既營業者達に前進の道を塞がれて邪魔をされこれを、恰も、だゝつ子をなだめ、すかす様にして、氣を揉むこと並大抵の仕事ではなく、斯うして漸く

伊東に着いたのは六時間を要した程のことであつた。後年此の東海自動車は伊豆半島一圓を掌握する程の乗合自動車會社として發展を遂げたが、此時の路線は大仁修善寺伊東間（十五哩半）が最初で使用する軸はシボレーを使ひタイヤもニューマチツクのもを装着して、たしか六百十耗の低床式バスを此頃から運行したやうに記憶している。（以上は口述記に依る）

夫れで當時、此のバス事業なるものが我が國に、これと云つて企業化してゐない、大正三年ビュイツクの2A型と云ふシャシーで半分トラック半分乗用車になる車を使つて武州川越（埼玉縣川越市）と生越（オコゼ）十一哩間のバス事業を開業した梁瀬氏は、續いて常陸の土浦（茨城縣土浦町）と筑波山下の筑波の間に土浦乗合自動車を、それから九州福岡縣博多（福岡市）から別府まで焼山通りに乗合自動車を、關西では京都——大津間の大津自動車を、又、京都から若狹間の京若自動車を始め、岐阜——高山間の濃飛自動車、四國は松山から高知までの愛媛自動車、東京近郊では横濱起點、鎌倉——藤澤——戸塚——横濱と廻路をとつた相武自動車（これは隅田乗合を東武乗合に讓渡後、高橋諒一氏がこれを擔當し、輔佐として橋戸義雄が居た、後此の路線は横須賀乗合に讓渡した）東京市内では向島寄りの吾妻橋から玉ノ井間の隅田乗合自動車、これはシボレー十數臺を此處の路線に使用し高橋諒一、須崎健の二氏が會社より行つて實務擔當をした。後此の會社は東武乗合に權利を讓渡してゐる。それに觀光客をねらつた三浦半島一周の臨海自動車と伊勢參宮の參宮自動車等其他多數のバス事



業を創業經營したのであつた。

即ちこれは其土地の人々の利便を圖つて交通が如何に近代化すべきかを認識せしめたことであり自身の利得のために、もとより計畫したのではなく、其の投資の株は概ね四分の一拂込の十二圓五十錢位のを十五圓程度で譲渡する始末で、極めて簡単にこれを處分し盡して今日では、これら乗合關係の株は一株も持つてはいないが、梁瀬氏は如何にも業界のパイオニアとして事業を成したものと、淡々たる態度で語つてゐる。故に識者の間には若し梁瀬氏の爲した此のバス事業の全路線が其頃一千哩以上も延哩があつたから、時の相場にしても一千四百萬からの價值があつたのに、あたら惜しきことをしたものだと言ふ者もある。

當時、梁瀬自動車は直營して乗合自動車を經營したのは、前述の相武自動車と隅田乗合で、其他には和歌山の白濱温泉自動車と九州の小濱自動車（小濱とは雲仙嶽山麓にある温泉である）も經營したことがある。

尙、茲に特筆することは、大正八年頃、日比谷のヤナセ車庫（元議事堂前）を營業所にして平出圓一氏を擔當者とし、東京——大垂み——富士五湖——箱根——東京の循環路を運行する帝都遊覽バスを經營し、今日の遊覽バスの先驅を努めたことがある。

又タクシーとしては、京都タクシーを經營し又、神戸市街自動車株式會社（梅村四郎・當時大阪支

店長)にシボレー自動車凡そ五十臺を使つて經營に従事させたこともある。

七〇

### へ・社員家族慰安會(子供會)

それは大正六年頃、梁瀬邸が赤坂檜町の元陸軍中將明石元次郎氏(前臺灣總督後大將男爵となる)の邸にあつた頃、毎年一月五日を年中行事として社員家族慰安のため子供會を催しこれを毎年續けることにした。即ち此の催しの最初のメンバーは須藤龍己、久保田清、花崎謙、田尻春男(後の田尻ボデーの主人)田中常三郎(當時十七、八歳であつた)梁瀬喜作氏等であつた。

何しろ當時は會社には若いものが澤山居て斯うした催しには自然身も這入り、當日の來るのを楽しみにして、様々な餘興をして隠し藝も旺んに飛出して、或る者は講談をやり、或る者は手品をやる(此頃から現在日産自動車吉原工場長をしている田中常三郎氏は手品が擔當であつた)そして一日を楽しんだのである。

後、梁瀬邸が麴町五番町に移るや、愈々この子供會は本格的となり、桃太郎を描いた緞帳などを造り、來會する社員家族は此時既に百有餘人を數へるに到り、その盛會さを見るべきものがあつた、尙此の日は會長夫人の御手料理も盛澤山に用意され、心盡しの御辨當や、または御汁粉などの、もてな



しがあり、この會は大正十二年の關東の大震災の年まで五番町の梁瀬邸で催すことが續いたのであつた。

越えて十三、十四年と十五年は麻布富士見町二十八番地の時の勸銀總裁邸（當時の仙石邸隣）の高輪臺で品川沖などを一望に眺め得る見晴しのよきところを借用して樂しき行事の子供會を催し、大正十五年、麴町一番町に敷地六百坪を得て建坪二百坪の梁瀬邸が新築せられるや、その二階は十五疊と十疊が通しになり廻り廊下附に造作され、こゝが主として會社従業員の打合會場となつたり懇親會々場となつたり、また此の子供會も茲で屢々催されたのであつた。

斯くして毎年續けられて來たが、其内段々従業員も増加し、従つて其の家族を茲に充分收容出來ない状態となつて來たので此度は企畫を變へて家族會として當時流行の東京遊覽バス（今日の團體貸切バス）を利用し、或時は會社經營の乗合バスを連らねて、千葉縣に在る野田醬油を見學したり、三浦半島の油壺

などに赴いたり、夏ともなれば千葉縣内房の幕張海岸で海水浴をしたり、春の時季には埼玉縣川口在浮間ヶ原の櫻草で著名なところに行樂の終日を送るなど、或は昭和二年頃には梁瀬別邸が鎌倉にあるのを好機會として、由比ヶ濱の地曳網に興ずるなどして、社員家族の慰安に務めて來た。(梁瀬喜作氏談に依る)「前頁の桃太郎は田中常三郎氏が畫かれた緞帳下繪である。」

### と・珍らしい車を販賣する

大正六、七、八年に涉つて、日比谷時代に自動車と同じ商賣のオートバイ、エキセルシヤーを取扱つたことがある、又此頃オーバン乗用車、コーラ號、トラツク、マーサー乗用車(電氣装置のチェンヂが装着されボタンを押して變速をした車)などを取扱つていた。

又震災後の十三年頃に電氣自動車のミルペーン號を取扱ひ芝浦工場前の雅叙園主細川力藏氏に此の車を求めて貰つたことがある。

即ち此の電氣自動車は必らず繁昌するかと思つてアメリカのミルペーン電氣自動車の代理權をとつて、兎も角、暫くの間これを幾臺か取扱つて見たが、ガソリン車と大分趣きが違つて、これには東京とか國府津或は小田原、箱根など、云ふ様に東海道筋にチャージング、ステーションを設けて、此の



範圍を走つて居るものとしたならば、バスとか乗用車の定期路線には實用向と思はれるが普通ではこれは六ヶ敷しいことが判り、殊に、それまでに設備することは仲々困難であるから、一般普及には程遠い感がした。一般乗用車のやうに何處まで走つて行くのやら判らない車では到底實用になる見込みはたゞない譯である。つまり主要地點に充電所の設備のない限り電気自動車は、まことに不便なものである。それに蓄電池の壽命が案外短かく値段が、かへつて高いものにつくのである、その上に重量が極めて大で、空車の場合でも全く重そうに見えて仕方がない、エンジンの凡ての部分よりも蓄電池の方が重たいなど、云ふ不便もあつたので、私の会社でも可成り研究と苦心を重ねたが、時期も悪かつたのであらう、到頭、電気自動車は積極的に賣捌くことが出来ずに仕舞つたのであつた。

(以上は口述速記に依る)

また大正十五年、ファイアツト自動車株式會社を日本橋西河岸に(現在の國分ビルのあるところに)設立して村谷九一、早川吉次、小島財治氏などがこれに参加している。



## Ⅱ 梁瀨自動車株式會社

吳服橋時代

大正六年一月 社屋を日比谷より吳服橋際に移轉する。

大正九年一月 芝浦に工場を設置す

同年二月廿七日 梁瀨商會を改組、資本金五百萬圓の梁瀨自動車

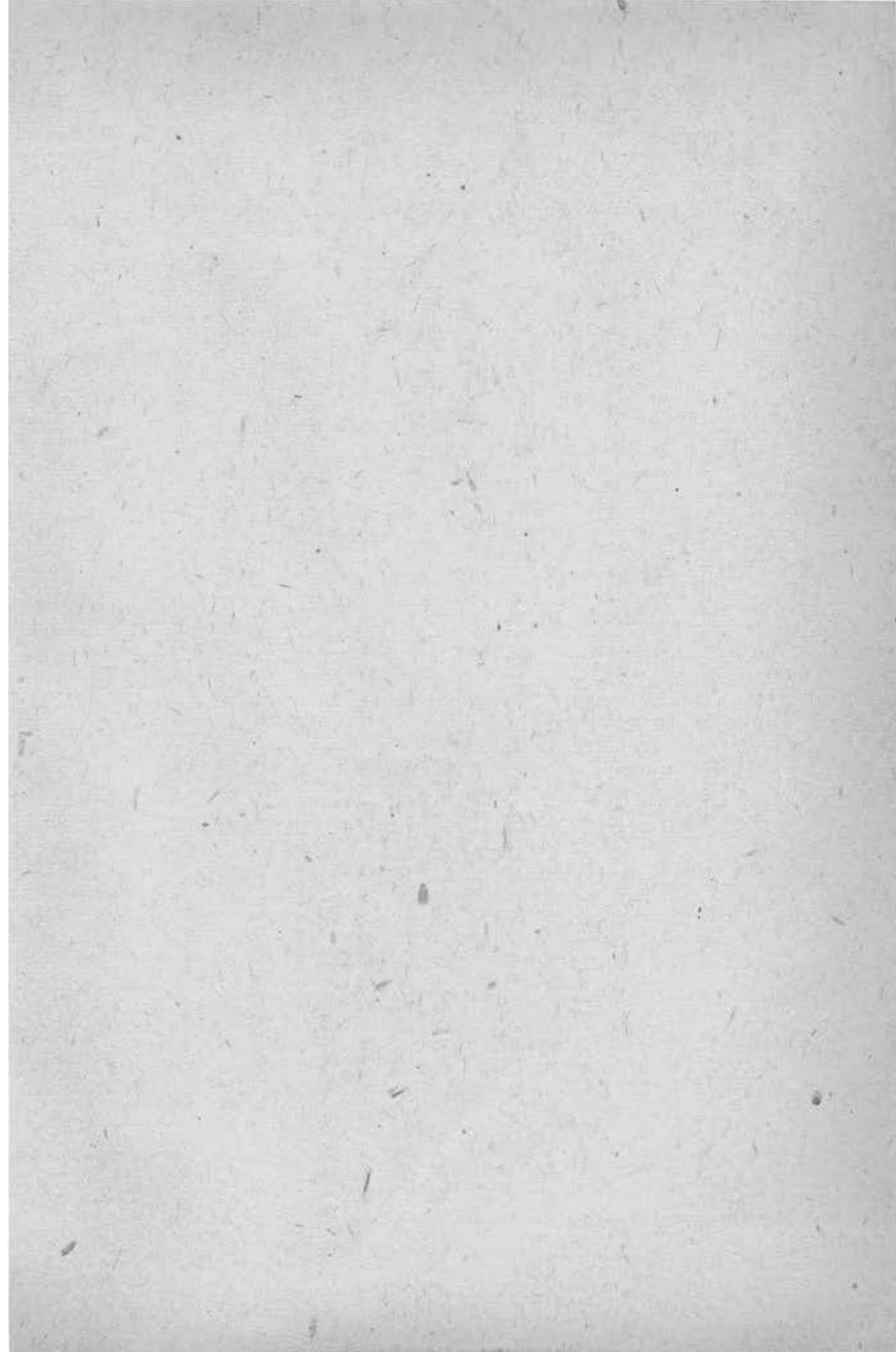
株式會社と資本金壹百萬圓の梁瀨商事株式會社を  
創立、自動車會社はG・Mラインの各種自動車を  
直販、商事は米國ベルボリン礦油及雜貨を扱ひ、  
兩社長となる。

大正十二年五月 夫人同伴歐米諸國の外遊に出發する。

同 年九月 大西洋航海中關東大震災の飛電をキャッチする

同 年十月四日 ビュイック、シボレー二千臺の註文をなし、第

一便五百臺と共に天津丸で歸朝する。





## A・吳服橋時代

大正六年正月は、事務所は日比谷の店から新築成つた吳服橋の鐵道院前の店に引きうつて居た吳服橋の店は清水組に造つてもらつた建物で、この店の屋上にはグルグル廻りの「自動車とヤナセ」文字を現はした廣告塔をしつらえて居た。

日比谷の店では餘り狭くなつてはち切れそりになつたので、一〇〇〇坪の吳服橋の建物の中に店と工場を一緒につくり上げて此處へ引きうつた次第である。

その頃は仕事が餘りに忙しかつたのでどうしようもなく、私は店に泊りつづけて、主な取締役になつた者は常に交替で宿直して居たのである。つまり重役は必ず泊つて居るのであつた。朝飯は大概六時に食べたが、全く暗い内であつた。そして夜の十二時頃まで皆が働いて、私は家えは歸らなかつた店には食堂をしつらえてあつたので、そこで職工その他に食事をとらせるようにしていた。

毎日の過勞で、會社の者はねむ氣がひどかつたために、最後に思はざる事故を起してしまつたのである。つまり一人の大工を工場の中で自動車で押しつぶしてしまつたことがある。それというのは、この大工が、睡眠不足のためよろ／＼しながら、鍍金をしたボデーを自動車に取付けるため、自動車の後部に廻つて作業をしていたのである。このことを知らずに自動車をバックさせたので、大工は後

部のバンパーと後の壁の間にはさまれて遂に肝臓を破裂させてしまったのであつた。

肝臓を破裂した大工は、たちまちの間に全身が眞黄色になつて可哀そうにも遂に死なしてしまつたのである。作業が餘り忙しかつたもので、無我夢中で働きつゞけた結果でもある。

全く忙しかつた大正六年も、こんなことですぎ去り、大正七年の年を迎へることになつた。

(以上は口述速記に依る)

## B・六百萬圓の會社創立

第一次歐洲大戰による財界の好轉に乗りて梁瀨商會のあげた利益は、けだし莫大なものであつた。この利益をあげた梁瀨氏は、大正八年に入つて、梁瀨商會を株式組織に改組する肚をきめた。そして着々と準備を進めて行つた結果、大正九年一月にいよいよ従來の梁瀨商會は資本金五百萬圓の梁瀨自動車株式會社として發足した。

これと同時に、梁瀨氏が三井物産時代に學んだ鑛油、雜貨等の知識を更に生かしてこれ等の商品を特別に扱うために資本金百萬圓をもつて梁瀨商事株式會社を創立した。

これ等の新しい二會社の創立に際しては、舊梁瀨商會の幹部社員をあげて取締役、監査役として起

用し、社外からは特殊關係者以外は一人も入れなかつた。そして自分は社長として采配を振り、一方恩人山本条太郎氏に對しては相談役として依然忠告を乞ふの禮を盡した。尙、監査役としては原安三郎、岡野悌二の兩氏を迎えた。

兩社の創立はかくして完了した。梁瀨氏の事業の輪廓は、これによつてほゞ明らかとなり、表面的には愈々大發展の準備が全く整えられたかに思はれた。しかしながらこれを後日にかえつて願れば、梁瀨氏の決行した株式組織化は、上述のような趣意によつたものではなかつたようである。

即ち、歐洲大戰は大正七年をもつて終了した。これは戦時景氣の最後を意味するわけである。のみならず、戦争によつて受けた損害による不況の來るのもそう遠くはあるまい。それにわが自動車界は年を経るに従つてその形態は整備され、新規開業者も數を増して來た。それ故に自動車輸入販賣業において、戦時中のように獨占的に活動することは不可能になつて來た。梁瀨氏は以上のような世の推移を洞察したのだと考える方が適切のようである。従つて梁瀨氏としては寧ろ保守の策を考えたものと見るべきであらう。なんとすれば、保守には規律が最も便利であるからである。それ故、自然會社組織が良策であり、二つの株式會社を創設したのだと云つて誤りない。

右の推測をなさしめる證據には、此處に重大な事例がある。それは株式會社の設立を見てから、社規一應安定すると見た大正十二年五月。梁瀨氏は夫人を同伴して海外に於ける自動車視察の途につい

た。

梁瀬氏は一刻も事業を怠ることの出来ない人である。ビジネス・オンリーの人だ。このような外遊の途についたと云うことも、株式會社設立に大きな意義をもつものと考えて差支なからう。これは會社組織三ヶ年の後のことである。

彼は悠々急がず迫らず、夫人同伴でまず歐洲へ旅立つた。この報を手にして一驚した人々は、夫人同伴と聞いて更に驚いた又春日遅々たる視察旅行振りを見ては益々驚きの聲をあげた。極端にこの旅行を批評するならば、全く事業界の視察とは見えない。功成り名を遂げた老夫妻の觀光旅行の觀を呈し、世の人々は、この落付き振りに唯々目を見張るのみであつた。

## 一、元旦の熊騒ぎ

大正七年新春の話である。

私の會社は營業も皆の努力の結果うまく行くので、皆で大正七年元旦をよろしく祝おうぢやないかというので、この年の元旦に、呉服橋の店の二階で、振舞をし、御雑煮や澁などを用意して朝早く祝ひ合ひました。



その時である。二階に通ずる梯子段の下から、ドン、ドン、ガラツガラツという不思議な音がするので、ある者が梯子段の方へ首を出してのぞいて見た所、さあ大變だ、大熊があばれ出したという聲に、皆の者が驚いて大騒ぎになつてしまつた。

ある者はいち早くも大手町の憲兵隊へかけつけたり、それ／＼思い／＼の手配をしたのであるが、この元旦に、おどり出た大熊というのはそも／＼いわく付きのものである。

三井物産の機械部々長である中丸一平という人が、丁度今から一年ほど前にその、友人から頼まれたもので、シベリアから連れて來たヒグマをしばらくの間、置く場所がなくて困るから檻をこさえてあづかつて居てくれないか……という頼みだつたので

「そんなものをあづかるのはこまる。第一猛獸を取扱う規則にも反することであるから警視廳へ届け出た方がよからう」

といつてことわつたが

「そんなことを云はずに、長い間は置かないからとに角檻を造つてあづかつて置いてくれ」

と無理な頼みであつた。こう強いて頼まれてどうすることも出来なくて、わざ／＼檻を造り、私の長い工場の奥のどんづまりの所へあづかつて置いた。

その頃の熊は、背丈が三尺と少し位丸く太つた子熊であつた。あづかつて居る間に段々と肥つ

て来て、氣持ちの悪いほど大きな熊になつてしまつた。食事も大喰いで、一度に一升の飯と、水瓜を二個、味噌汁を大鍋一杯も平らげるようになった。従つてその力も強くなり恐しくなつて来た。餘りきび悪くなつたので、中丸さんにも話し、なんとかして、この熊を連れて行つてくれと幾度も催足したが、その後は何にやかやと言いわけをして、もう三ヶ月も四ヶ月も経つてしまつていた。そして熊は益々成長し、大きくなつて行くだけであつた。そして大正六年の春にはかれこれ背丈が六尺にも近いというほど肥大なものになり手におえない大熊になり了せた。

大正六年の年末は、工場の仕事もひどく忙しかつたため、この熊のかよりの者が、熊に食事を與えることを忘れるようになり、何しろ三日間も食事をやらなかつたわけである。

この熊は比較のおとなしい性質であつたが、なにしろ腹が減つてしまつて、たえられなくなつたものと見える。この大力無双のヒグマも腹が減つてはたまらず、遂にその檻を目茶苦茶にひきさいて、工場へ現れ出たということになる。まさか人間を食うような悪氣はなかつたらうが、工場のどんづまりの所にある檻を出て来たのである。

熊という奴は、四つ這にはつたり、後足で立ち上つたりして、愛嬌をふりまきながら歩くものであるが、このようにして、この熊も這つたり立つたりして工場の奥の方からのそりのそりとやつて来たものに相違ない。熊はづしんづしんと段々表の方へ出て来る。そして今元旦のお祝いを雑煮や酒でや

つて居る二階の下までやつて來たわけである。こゝまで來る間に、何處かに食物がありはしまいかと途中の戸棚などを両手で左右にひき破つては中にあつたものを食い散らして來たわけである。そうして色々なものを食べては見たが、まだ食い足らぬらしく、その邊をうかよつて居ると、はるか二階の方においしいにほいがブンブンとするので、あすこに行けば御馳走にありつけると思つたのであらう。いよゝゝ梯子段を二、三段あがりかけたという始末である。

熊は店に出て、そのショウウインドのガラス張りを、大力な両手によつて兩方へひろげて、ガラスを割るバリバリという音を聞きつけて二階の連中が外に首を出して騒ぎ初めたといふ次第である。最初の者が熊を發見したときには熊公の奴のつそりのつそりと梯子段をあがりかけて居た。

こうして現れ出た熊を發見してから、みなが騒ぎ出し、憲兵隊へ届けた、出來るだけの處置をしたが、この時十名ばかりの憲兵がかけつけてくれた。何分にも大きな熊であつたために、憲兵も驚いてしまつた事務所のわきには垣根を組んでいたが、熊が近づくと憲兵も驚いて、或一人の憲兵などは近づくと熊に驚いて、はてはこの垣根を乗りこそうと思つて。あわてゝ飛び越したとたん、腰の劍がひつかよつて取れず、ついに劍が垣にぶら下つたまゝ、さかさまだ、つるされてしまつたという騒ぎも演じてしまつた。

この日、私は何かの所要のために、日比谷の店の見廻はりに行っていた。朝、屠蘇を祝つた後に行つて居たので少しく酒が身にまわつて居つた。而もこの元旦の朝は、小雪がちらちらと降つていた。

日比谷の店に居た私の所へ自動車で急使が飛んで來た。

「大變です、熊があばれ出して居ます、憲兵達が垣根の所に劍でさかしまに吊されて居ります」という知らせである。

私もこれを聞いて、しまつたと思つた。仕方がない、かけつけて見なければならぬと、いふので何處から借りたのか忘れたが、長い槍を一本借りて、とに角自動車に飛乗り、呉服橋の店までかけつけたわけである。その時、私が乗つていた自動車は眞白に塗つたビエイツクであつた。

やがて現場に立つてみると熊がガラスを破り乍ら更にのそり／＼と歩いて居る。憲兵は二階の部屋から出たり入つたりして騒いでいる。そこでぼつぼつ人が集つて來る。最後に熊は日本橋の方へ向つて歩いて行くだらうが、今日は元旦でもあるから幾人かの人がこの熊のためにひつかゝれてしもうに相違がないと考えたのである。私は槍を片手に持つて自動車の外に出て熊に向つて突立つた。

「仕方がない、熊と一騎打ちして此處で負けても仕方がない。この槍一本で熊ののどもとをねらつて突き通すより外に方法はあるまい、それ以外今の所、私の力でどうすることも出來ない」と自動車から降り立つた私はとつさにこんなことを考えた。



私は熊とにらめこをして立つて考えて居るそばえ、今では八洲自動車に居る黒澤茂雄君（私の所に働いて居たことがある）が日本橋の方からかけつけて来て、どうしましたかと聞いたので

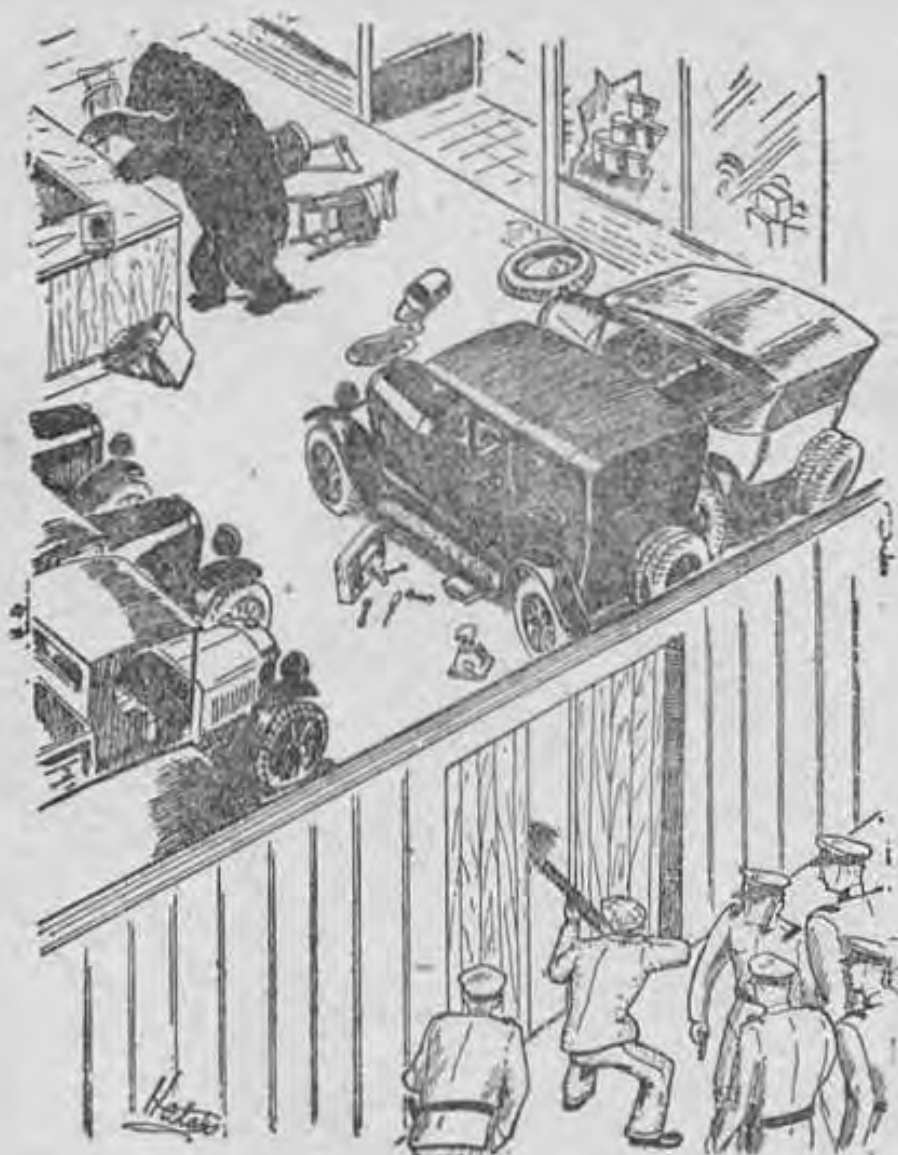
「今自動車から降りて槍について立つて居るのだが、この有様では私がこの熊に勝てそうにもない何かこの際よい方法がないか」と尋ねてみた。所が黒澤君の云うことには

「それでは日本銃砲店（日本橋通り二丁目）の息子が道楽息子で、この頃二連發の銃を買つたので今日の元日に猛獸狩りに出かけようとした所が、父親に叱られてつい出られなくなり今日は家の中でくすぶつて、やんちゃんを云つて居りますから、この男を頼んで來ましよう。一發でこの熊をしとめる以外方法はありませんまい」

かういうことであつた。「それがよからう早速頼む」というと、黒澤君がたちまちかけ出して行きその銃砲店の息子に連れて來た。銃砲店の息子は面白がつて、元旦の朝に一杯ひっかけたのと、お雑煮をたらふく食つた勢いで、新調の二連發銃を右腕にかゝえてかけつけて來たのであつた。勢よくかけつけてくれたこの銃砲店の息子を見て、私は急に元氣づけられて

「あの熊を打つてくれ」と槍先でその熊の方を指し、くだんの息子の顔を見上げた。息子は「承知しました」

といつて、實に張切つて武者振いをして居た。



やがて段々人出が多くなり、熊の氣も荒くなつて來た。こちらの人出が段々多くなつて來ると、くだんの熊は事務所のカウンターの裏の方へ入つて、こちらにひかえて居る大勢の人を見てびつくりしたのであらう、このカウンターの後ろに突立ちながら、これから何かしようと考えていたらしくちつ

としてこちらをにらめるやら口を開いたり閉ぢたりして愛嬌をふりまく様子であつた。

これを見た日本銃砲店の息子が熊から七、八間離れた所にある反對側のカウンターに近づき、カウンターの上に銃を乗せ、息子は腰をかきめて熊に對して銃のねらいをつけた。熊はこの息子の間近くに立ち上つて、にやにやしながら愛嬌のよい、人のよい顔をして立つて居つたが、その時である一發

（シュツ）と底力のある重たい音が響いた。（この二連發銃はドンといつた音を出さないで、シュツと低い音で爆發した。これは綿火薬がその時輸入されて來たので、銃砲店の息子がこの綿火薬をためてみたくて猛獸狩りに出たがつたわけである）。

一發「シュツ」と打つた二連發の彈丸が、この熊の首の月の輪にあたる所にあたつたのである。これと同時に熊はグツつとよろけたが、熊の片方の腕はカウンターの上に乗せたまゝ離れなかつた。一發打ち込んだけれども、これだけではまだあぶなくて熊に近づくことは出來ない。それで續げざまに二發目を打ち放つた。熊はこの二發目を受けてようやく倒れてしまつた。この有様を見た私、やれやれこの熊とけんかをせずに終つたわいと安堵した。

あとで、この事態を警視廳に届出た所、ひどくしかられたが、人に頼まれたのであるから罰せられずに済ましてもらいたい、とくに憲兵の諸君も間違ひなく済んだのだからといつて大體ことなく済んでしまつた。

その後この熊をあづけた人がやつて來て、誠になさけないことをやつてくれた……といつてぐちを云はれた。「ぐち所ではない、大變なことをしてかしたものだ」といつて熊騒ぎの一齣を説明した所その人は納得したらしく、最後に、せめてその熊の皮でもいたゞきたい……といつて居たので、よからう持つて行きたまえといつて渡してやつたのである。更に皮よりも熊の胃の方が高く賣れるからと

らうので、これも持つて行つたように記憶している。

熊は熊祭りをするものだといふので、熊の頭だけをしつかりドロクロにしてしまい、然も新春であつたものであるから、関係者を集めて熊祭りをやつたものである。こんな騒ぎを元旦早々からまき起し思はざる冷汗をかいてしまつた一席の失敗話である。(以上、口述速記に依る)

## 二、八卦は火難の相と出る

大正六年日比谷から呉服橋に社屋を移轉するに際し、澤山従業員も使つてゐる關係上、中には縁起を擔ぐものもあらうかと考へ、一ツ八卦見をしようと思へ、麴町紀尾井町の易占師と云はれた高島嘉衛門の甥に當る高島徳右衛門先生を訪ねて、新營業所ともなる此度の替地の方位を伺つた。

「私は日比谷の營業地から呉服橋の新營業所へ移りたいのだが、日比谷から呉服橋は鬼門に當ると聞いている。私は大勢の人をかゝっているのであるから、自分のことは、かまはないとしても、この大勢の人達にとつてどんなものであらうか」と尋ねた。すると高島徳右衛門さんは

「呉服橋の方は眞鬼門にあたるから、その人の運勢によつて良いときと悪いときがある。今回のあな



たの場合は、引越して差支ありません鬼門に勝ち抜くだけの氣がそなわつてゐるから一向に差支ありません、建築が済んだら御越しなさい。但し此の新築は火難の相があります。それでもあなたの方に災難はついて來ません。然し乍ら火難という點にはよく記憶して居て下さらなければなりません」と云はれた。私はこの建物が出來上つてから引越したが、果せる哉、その後大正十二年の大震災火災の時に全くその通りに焼けてしまった。かつて高島徳右衛門さんに云ひ當てられたように、確かに火難の相が現實となつたわけである。(以上口述速記による)

そこで此時、此の營業所にこんな挿話が残つてゐる。大地震のため社屋過半が傾き、中にあつた自動車は何處かへ移動する必要に迫つた、時の責任者は自動車部長相良亮吉氏で、次席に富安良三氏が居り車輛部主任は内海徳太郎氏が居て社員の中で運轉の出來るものには一臺に付五圓だか十圓だかの賞金を附けて時間的に一刻も早く、其頃あつた元議事堂前のガレーヂと、芝浦工場に移動することに考へたが、到底それは六ヶ敷しいので宮城外苑、現在テイトホテルの前に其の倒壊しかけた家屋の中から十數臺の自動車を無事に運び出して仕舞つた。

然し隣合せた、高田商會は車庫などは少しも地震の餘波を受けていなかつたので、たゞ連絡用に幾臺かの中古自動車を持去つただけであつたので、翌朝行つて見たら新車ばかり三十六臺たか八臺たか綺麗に焼けて、大變な損をしたことがあるが、梁瀬ではその十數臺を無事に賣ることが出來て、當時

若干左前であつた店も漸く回復したと、當時の人が語つていた。(當時高田商會に居た梅田氏談)

### 三、見込みが外れた話

大正三年の三月に第一次世界大戰が始つて、日本もなにかにつけて景氣がよくなつて來た。輸出も殖へる一方で、正貨準備も二十一億、二十二億という、日本ではかつてない所の好景氣に惠まれて來た。

やがて大正九年の正月を迎へた、この正月は日本人として非常に元氣で、たらふく喰ひ、御屠蘇もふんだんに祝つて腹づゝみを打ちおつた所が、この大戰景氣も頂上迄登りつめたものが、大正九年の三月になつて來ると、どうも株式の調子が一寸おかしくなつて來たわけである。その頃東株五百圓、鐘紡が六百圓近くになつて凄い勢が出て來たのであつたが、その底になんとなく一寸した變調子が伺はれて、三月十五日になると大變なことに大ガラが見舞つて來たのだ。

私自身も相當の株を扱つて居たが、この三月十五日の朝起きると、いきなり株式仲買人から電話がかゝつて來た。

「今日は調子がいかにも變ですよ」

という通知、

この日の東株は朝から晝前の午前中にたちまち六十圓下げという大きな下げ方をやつたと思ふと、晝食後に二十圓をもどし、更に夕方迄四十圓を下げてしまつたのであつた。つまりこの三月十五日一日で八十圓という大きな下げ方をやつてしまつた。これをきつかけとして株式界には色々と大變な大混亂が起つて來たのである。

第一次大戦と共に日本の景氣もよくなつて來たのであるが、アメリカも曾てない好景氣に恵まれ、大正九年の年にはまた老大な自動車界の好景氣に應じて、ゼネラル・モーターズから非常に澤山の自動車の荷物が私の方にも送られて來ておつたが、その金額は三井が立替居て、私の面倒を見て呉れていた。こんな時に三月十五日の株式界の大ガラが捲き起つたものであるが、色々と大變なことになり、全く日本がひつくり返るような騒ぎを演じたわけである。

その時、私は東京驛の右手ガードの脇に九百坪の土地を三菱から借り受け地下室を込め總計五千四百坪七階建の建築を設計し、三菱地所部にこれが工事を請負ってもらい此の工事に着手中であつた。鐵材も數千トンを買付け、三菱側でも設計が終つて建築に取りかゝつていたのである。こうした金の要る時に大ガラに見舞われたのであるから私も驚いた。

所が他方には又アメリカに注文した大量の自動車が、こちらに向つて船積みされようとしているの

である。アメリカへは自動車の大量注文、東京では大建築の着工でいよいよ私も頭が痛くなつて來たのであつた。

その頃、三井に武村貞一郎と云う常務が居て、この方は安川雄之助さんと並んで三井のフィナンサーの方を擔任して居つた人であるが、此人の住居も私と同じで、五番町で私の家と隣り合つていた。武村貞一郎氏が私にコーヒーを飲みに来て呉れと再三、迎に來てくれたものであるから一日出掛けて御馳走になつてみると、

「君の今度の大量注文の自動車には全く困つたものだ、この株式界の大ガラのとき、このまゝにして置けない。何とか手を打つて、この際、電報料なんか惜しまずに、今回の大注文の自動車を全部キャンセルしてしまうちやないか」という話しであつた。

そこで私は

「全く困つたものだ、然し待つて呉れ」と云つた。

「僕はこの大注文に對して將來に對する一應の考えがあるんだ、したがつてこの返事は今直ぐにはし兼ねる。それに今僕は大金をかけて建築をやつてゐるんだが、この建築の金も三井に迷惑をかけぬ



ようにしようと思つてゐるのだ」と答へた。

こうした大暴落になつたものであるから、一應山条先生に相談しようと思つて出掛けて行き、

「どうしたものでしょうか」

と相談をかけて見た。

所が山条先生の云われるには、

「先づ思い切つて處置しなくてはならない。馬鹿々々しくつて出来ないようなことを目をつぶつてやつてのけることだ。斷の一字あるのみである。私もかつてこれに似た大轉換によつて三井からは閉門を仰せつけられたり、舉句の果には家内を里へ預けたり、したような、苦い過去の經驗を持つてゐるのだが、そうした私の體驗からすれば、かゝる場合には斷じて行ふ以外に方法はないものだ」

更に山条さんは附加えて云つて呉れた。

「先ず三菱と契約して居る建築豫定の九百坪の借地権利は全く無料で返却するから計畫中の建築は無條件でやめて貰いたいと申出、又買入込んだ數千トンの鐵材はこれを投げ賣してしまい、多少でも殘金あれば仕合せと、このことを三菱地所部の人と相談して見給え。それに株式の方は目をつぶつて片付けてしまふことだ」

こう教へられた。

その頃、私は鐘紡の株だけでも三千株も持つて居り、一日百圓づゝ損して行つても實に大きな穴になるわけであつたが、これを皆捨てゝしまえと云われるのであつた。つまりあの頃の金で百萬圓以上も捨てゝしまうことになる。これが惜しいと思つていと變な卷ぞえを喰つて、にづちも、さつちも出来なくなるぞ……と云はれたのであつた。

そこで私はやつてみようと決心をして武村貞一郎氏の處へやつて行き、

「私はこの際あらん限りのものを捨てゝかゝらうと思ふ。ゼネラル・モーターズの品物に對してキャンセルしたのでは國家の信用にもかゝわることであるから、これは半分だけをキャンセルするから後の半分は残して置いて呉れ、この半分の責任は是が非でも私が負うから、全部をキャンセルすることは止めて欲しい、その半分の品物に對する支拂を今度完済するから今後の輸入計畫は思い切つて實現しようぢやないか」と話しをしたのである。

すると一方、三菱でも私の云うことを承知してくれて、建設する土地の借地權を返還し、鐵材は全部三菱の金の入り合せに引取つてくれた。

それから私は持つていた株式も全部賣飛ばして、G・M社に注文した自動車の半分の輸入し荷受けしたのであつた。その勘定の最後には三井に五百萬圓の金を入れることが出来た。荷受けした自動車

は、あつちに賣り、こつちに賣つて漸くに處理する事が出來たのは大正十二年の私が外國に出かける前のことであつた。この時三井に對する五百萬圓の借金は利子を附して返したので御禮を云はれたが汗ばかりかいて儲けなどは出て來なかつた。

こんな次第で、この年は全く疲れ果て、しまつたので、このついでに外國でも廻つて自動車界の實情を調べようと思ひ、海外の旅に立つたわけである。

私がこのようにして經濟界の大ガラを、かろうじて逃げおわたしたのも結局は山条さんの經驗に教えて貰つたお蔭であつたが、この大暴落に潰れてしまつたのは横濱の砂糖屋さん増田屋や同じく横濱の茂木惣兵衛、又高田商會も、神戸の鈴木も共にこの年に潰れてしまつた。私がこの時、命を取り止めたのは全く目をつぶつて總てを捨てたところにあつたわけである。(以上は口述速記に依る)

## 四、パニツグとある人

大正九年三月十五日朝十時、これは私の終生に忘れることの出来ない、轉機を訪れた日である。然かも此の轉機とは、爾來私が孜々として築き上げて來た事業に苛酷にも破算を命令したやうなものでその冷厳なる現實に直面した私は、如何にして、これが苦境より脱皮しやうかと、ほんとに身命を賭した幾日かであつた。

郷里群馬縣碓氷郡豐岡村の小學校々長清水武兵衛氏の息で會社の清水雄太郎の弟一郎が向ふ兩國の洋服裏地間屋に丁稚奉公に行つていたところ、どうしても都合で店を引きたいと云ふので、前からの話合ひの筋もあつて是非私に先方へ行つて、主人に此の話を付けて來て貰ひ度いと、たつての希望なので、やむなく其處へ出掛けたのであつた。

そこで先方に行き主人に逢つて、こちらの希望を述べたところ、其處の主人は座敷の眞ん中に端座して、如何にも大切な心配ごとがある如く半ば、うつろのやうな顔をして、寔に氣乗りのしない返事



をする始末なので、私は不思議に思つて、しげく其の主人の顔をながめていたら、やがて其の主人は口を開き小僧のことは貴方の申出の如く承知は致しましたが「梁瀬さん貴方も御商賣なさつて色々な御経験も、おありのことゝ存じますが、實は私は只今大變なことに、ぶつかつて朝から食事もとらずに心配に心配を重ねているところです、それは外でもありません今朝から宛町のあの株のガラ氣配に、ことに依ると死んでも死に切れないことになるのではないかと思ふのです。御話すれば長いことになります私が元は茲の奉公人でありましたが主人に見込れて養子となり、まだ主人の親も生きています。それなのに私は遂ひ調子に委せて茲の財産不相應な買をして仕舞ひ、斯う云ふガラに直面しては、私の智慧では方法も手段もとれないで悩み抜いているのです、一體、こうした場合はどうすればよいものでせうか」と相談をかけられ、小僧一身の問題ではなく、飛んでもない話を受けて仕舞つたのです。

其處で私は山本条太郎氏から懇々説得された話をして「それは大變だ、一刻も早く私のいるそばで早速株屋に電話をかけて一株残らず賣拂つて仕舞ひなさい、今、茲で成行などをかまつていたら、それこそ貴方の言はれるやうに、死んでも死に切れない苦境に追ひやられて仕舞ひます」それで此の話を受けたのが十一時、遂々十二時の晝頃までには、その人は全部持株を賣りつくしてその處分は終つて仕舞つた。

そこで迂濶にも私は、人に教へて自分のすることを忘れた、さあ大變だ、今、こゝで此の人に教へたことを自分もしなくてはいけない。挨拶もそこ／＼にして、何處まで電車に乗つて、どこを通つて家に歸へつたか記憶がない程の夢中な氣持で戻つたものゝ、時既に遅く私は、これをしくじつて仕舞つた。

後日、此の主人に逢つた時、あの時の御言葉でお蔭様で私は助かりましたと厚く御禮を云はれたが私の氣持には感無量なものがあると同時に、何んだかホロ苦にがいものがあつた。

(以上は口述速記に依る)

## 五、ジャンコ屋の起源とは

大正十一年の頃、我が國で最初の中古自動車オークションを催した。場所は梁瀬自動車の芝浦工場(當時芝浦ヤナセ車庫と稱す)三百坪を利用して時の擔當者となつた吉崎良造氏と會社用品課に居た長澤元七氏(自動車解體商の元祖と云はれ京橋明石町に店舗あり)で東京近郊の中古自動車を凡そ二百有餘臺も集めその壯觀はまだ見るべきものがあつた。其の情景はまるで自動車展覽會の如く、出陳車中には高級なる英車あり、大衆向なる米車あり、乗用各國車の展觀でもあつた、そして時の建値は

一臺百圓より三千圓程度の各段の相違あり取引も活潑に行はれて豫想外の成果をおさめたものである。後これが俗に謂ふジャンコ屋の起源ともなり年々歳々同業は増加し東京市内に三百七十餘軒（昭和七年末調末に依る）も中古車を取扱ふ店の出来る濫觴をなしたのである。

尙、此頃オートクシヨンにて賣買取引もならず、比較的部品品のなほ使用可能なるものは、其の自動車を解体して補給部分品を賣捌くため、此の専門業が始められ、ボンコツ屋と稱する解体商が此處から世に出ることゝはなつたのである。

## 六、海外留學生十二名

大正八、九年頃から自動車修業者の海外派遣を企畫し、會社の技術者、デスク（事務系統）工員、職長等の中から選擇して十二名のものをアメリカとヨーロッパに差向けたことがある。此の中には今は物故したのものもあるが（△印が其物故者）次の通りである。

△清水雄太郎（會長郷里の小學校々長清水武兵衛氏息、初代紐育の會社駐在員であつた、十二年會長夫妻が外

遊の時案内を務む）

保坂萬一郎（梁瀬自動車より派遣され、前者清水氏と交替の紐育駐在員、後商事の礦油部長）

△橋戸義雄（橋戸頑鐵氏弟）

△相良亮吉（會社より三昭自動車に轉じ後エンバイヤ自動車にも在社、業界人のゴルフ・メンバー）

△吉崎良造（東京ダットサン商會創立者）

田中常三郎（現日産自動車株式會社取締役吉原工場長）

大澤喜市（現梁瀬自動車株式會社常任監査役）

梅村四郎（前豐國自動車社長）

泉 藤吉（泉自動車工業株式會社社長）

堀 久（元青バスに勤務して現在日本自動車興業株式會社社長）

△山縣政夫（東京—大阪間を最初に無着陸飛行をした、山縣の兄）

△富安良三（元高田商會に居た人、後梁瀬自動車に在社す）

さて斯うして海外に派遣したものの、これには面白い現象がある、會社から經費を拂つてこれらの人々を洋行させたのであるから、これらの人か歸へつて來たら又吾社のためを思つて一生懸命働いてくれるのが普通であると主觀的に考へていた。然しこれを客觀的に考へて見たら大いなる違ひで外國で物を覺へて歸朝した人間は前と變らざる給料で使つて居たのでは他の會社の人々が此等の人々を五割増又は倍額の給料で誘ふがために、斯うして囑自された人々は皆他の會社に行く珍現象を呈して來



た爲の餘り馬鹿々々しい現象と思つた。

斯うしたことを客觀的に見たならば私の會社の費用で修業したと云つても歸へつて來たならば給料は五割増しにもして置けば誘惑もされずに落着いて働いてくれるしたらう、それから以後、これにこりてよその會社でも海外派遣と云ふことをしないやうになつたと思ふが、自分は斯うした場合には事を客觀的にも考へてサラリー位は倍額にするのが人間を使ふ道かも知れぬと、今頃になつて愚昧にも吾輩氣が着いた次第である。(以上は口述速記に依る)

## 七 デュコ塗料とセルバ塗料

大正十四年アメリカに於ける自動車用塗料製造家デュボン會社の消化綿塗料(セルロイド製塗料と俗に云ふ)に關心を持つた梁瀬自動車にあつては當時會社と關係のあつたゼネラル・モーターズ本社に向つて、此の塗料に關し教へを受くべく適當なる技師の日本へ派遣方を要望していたところデュボン會社のミスター・ポーなる技師來朝し、會社の田尻春男氏(後田尻ボデー主となる)及び塗裝擔當の山本善敏氏に之を教授し、日本に於ける吹付塗料の先鞭に乗出したのであつた。後、此の山本善敏氏は自動車塗裝組合長となつたが時、偶々警視廳にはこれに關する取締規則なく、本廳衛生課勤務の

防疫官星醫學博士は連日の如く根氣よく芝浦工場に來り、空氣清淨のためファンを設備すること、障壁は金屬を用ひること、コンプレッサーは別室に設置することなどの構想を、其實地操作を見て作りかく設備すれば人身に無害なりとし、漸く茲に塗裝業に關する取締規則の原案を得て、後日都下に此の取締規則を公布したのであつた。

因みに斯うした餘慶を蒙つて梁瀨芝浦工場内の塗裝工場は其許可第一號を得たものである。

後年此のデユコ塗料は相當輸入を見、業者競つてこれが使用の普及に努めた結果、有望のものとなりたれば、大阪淀の關西ペイント會社の小田技師（後日日曹常務となりし人）は、消化綿塗料の研究に着手し、デユコ塗料を分析するなどの研究をなし、大正十五年梁瀨大阪福島工場に於て、新製品セルバ塗料を商品化することに成功したのであつた。尙、今日關西ペイント會社のセルバ塗料がアメリカ製デユコ塗料代用として、かく一般に使用せられる動機となつたものである。（梁瀨喜作氏談）

## 八、ボデー・パーツの想ひ出

梁瀨のボデー部門の歴史は極めて古い、創業當初の檜町時代の高級車の架裝から、震災後の東京市電氣局があつた圓太郎（ワンマンカー）では、餘りにも體裁が悪いと云つてシボレー車に欄間付のスマ

トな試作車を一臺教育註文と云ふ名目で製作納入したこと、それから横濱子安でダットサンが造り出された時此のボデーも作つた、デリバリーバンも、トラックもパワセンジャーカーもそれから皮肉にも此の小型車と競争したオオタ號のスタンダードセダンも造つた。

然し斯うしたボデー業を一生懸命續けて居る裡に、うかつと云へば迂濶に相違ないがあまり氣着かないで無頓着でいたことが思ひ出される。即ちそれは數知れない程、ボデー用の部分品を發明工夫して造つたにも拘らず、一つの新案特許も取らなかつた事である。たしかに此のボデーに關する金物だけでも大變である、オベレーター、ドア・ハンドル、すべり込み金具、段々ばち金、ベンチレーター、ステツプ金物殊に外國のものをスケッチして設計製作したものに到つては勘定はし切れない、それにつけても、あとで大問題となつた、あのレギュレーターはアメリカのハンセンスを模倣したものであれなどは随分苦勞したものである。

今日では市場品として似通つた品物も澤山出廻つてゐるが、新しい仕事を始めたときに初手から斯うしたものを作り勞苦して仕事に取掛かることを想ふと、出来上つたボデーにも一品一物、血でも通つてはいないかと思ふ位愛着を感じて、粗末に扱へないとしみじみ思つたものである。

(梁瀬喜作、泉藤吉兩氏談による)

## 九、用品とラツバの始り

私の會社の用品部では當時陸軍が使う用品や部品の八〇%以上納入して居た程、かなり盛にやつていた。

私の會社で「用品部」という名稱を使うまで、日本にはまだ「用品」という文字が使はれていなかった。英語のアクセサリー accessory を「用品」と譯して使ひ初めたのは吾社である。會社では古くから（大正五年）頃此の自動車用品を取扱ひ、此の間、幾度か變遷もあつたが、此の用品は、自動車の附屬品として相當手擴く賣捌かれ、中にも羽根ばたきとか、セーム皮、或はボデーポリツシー、ステワート會社製のバンパー（此頃バンパーは完全な用品であつた）など、多種多様のものがあつたそれに此頃 A・C プラグ、エキサイドのバッテリー、スピード・メーターなどを取扱ひ後、これらは一括して柳田諒三氏の營業する萬歲貿易にその販賣方を讓渡したものである。

種邑馬之助が大變この用品のことに骨を折つてくれて居たが、ある時、陸軍の方から自動車の警音器に使うゴムのラツバの如きものを澤山に欲しいと云はれたため、種邑はその當時宮本という豆腐屋のラツバを造つていた業者を尋ねて、ゴムラツバの造り方を共に研究し、多數造り上げて陸軍に納めることが出来た。豆腐屋のラツバが、はぢめて自動車のハンド・ホーンと變つて一般に使はれるよう



になつたのであるが、この宮本という家では今日も依然として自動車用ラツパを造つて居りその方の旗頭になつてゐると思ふ。(以上口述速記に依る)

即ち此の圓太郎馬車の喇叭を淺草藏前で作つて居た宮本富三郎氏は當時喇叭の製作では第一人者であつた。それで會社では自動車に使ふラツパ(B型ホーンとボアーホーン)をアメリカから見本として取寄せて、これを幾多改良して作らせた譯である。そしてこれは儘か大正六、七年頃のことゝ記憶をしてゐる。(梁瀬喜作氏談による)

## 十、レギュレーターのバテント騒ぎ

私の工場で土堤七(どてしち)(堤七郎)はボデー製造の方のかゝりであつた。その頃ボデー用のウインド・レギュレーターを輸入したり又自家製造をして使つて居つたが、後日この土堤七がレギュレーターのバテントを特許局へ出願して居つた。

土堤七に、こんな問題があるとは知らずに、ボデー業者達は相變らず輸入したり製造してレギュレーターを使つて居る間に、これがはからずも土堤七の持つてゐる新案特許に觸れたために、十名に近いボデー業者達が、訴えられるという珍事件が起つた。それで騒ぎ立てたわけではあるが、結局は土

堤七がパテントをとる前に輸入したり造つたり使つたりして居たといふインボイスが出て来たものであるから、妥協したらどうかといふ裁判所の話もあつて結局妥協が成立したが、この堤七郎は大勢の人からにくまれて、同業者仲間に居られない破目におちいり、その後自動車界から逃げ出した次第であつた。(以上は口述速記に依る)

## 十一、青バスのボデー製作

東京の青バスは専務取締役が鈴木虎彦という衆議院議員で、常務は堀内良平氏、之等の人によつて經營されていた。

私は一日之等の人に招待を受けて、柳橋の料亭へ出向いたことがある。その時、青バスでは一〇〇臺のバスを造りたいのであるが、どうかその半分の五〇臺のバスをお宅で引受けて而も良い車輛を推薦してバス・ボデーを造つてはくれまいかと云う話であつた。

私は心よく引受けて、色々と考えた上、クライスデルというシャシーを使い、これに美事な(當時に於て)ボデーをのせてやつたわけである。なにしろこれは日本で初めてのバスボデーであつたの

で、今日から考えて見ると少々滑稽なスタイルであつた。

つまりボデーの背丈がとても高く、おまけに幅が狭く、長さも短かく、こんもりと背だけ高いボデーで、高い帽子をかぶつて中に入った人でも、まだく天井までには相當 間隔が残されて居る程であつた。そして道路の石ころにでも車輪がつまづかうものなら、車がたちまちひつくり返りはせんかと思はれる程、背だけの高いボデーで、とてもあぶなかしいものであつた。今からその當時のことを思えば、何か背中に汗を感じるような気がする。

その時残りの五〇臺は、瓦斯電気工業株式會社が引受けて、シャシーはレバブリックを使った筈である。瓦斯電気工業では、私の方よりもバス・ボデーについては經驗が浅いために、結局私の所のボデーをまねて造つたから、ほとんど同じようなものが出来上つてしまつた。

とに角此處に一〇〇臺の新しいバスが出来上つたので、東京市民の乗客は、珍らしいのでよることで之れを利用して下さつたのであるが、之れを製造した吾々の方では、あまり自信のなかつたものであり、よくもあんな不格好なものを造り出して市民に御目見得したものであると、今になつて、はづかしい思いをするわけである。

これは大體大正八年の頃で、私達が呉服橋の店で仕事をしていた時の話であつたと思ふ。

(以上は口述連記に依る)

## 十二、數見周穗拳銃を發砲する

大正六年一月二十八日、日比谷から吳服橋に社屋が移轉して其落成開店祝賀の時のことであつた、社内の一隅に舞臺をしつらへて、當時の寄席藝人などを呼んで一同が楽しく呑み唄つていた時、其頃宮内省御用で御召馬車の製作をして居た木下氏の弟子で高木政太郎と云ふ馬車大工が會社に居た、なかなか本人腕達者でよく自動車のボデーには做れ常に調法をしていたが、此の高木には實に悪い癖があつた酒量を過すと誰彼の見さかえもつかずに毒づき喧嘩を賣るのであつた、丁度此日は招かれて自動車興信所をしていた數見周穗が現はれていて、これも酒に關しては當代の豪の者、遂に二人がヒョツトした、きつかけから大立廻りとなり、遂に高木は自分の商賣道具の手斧を振廻し、數見は所持していたピストルをぶち放すぞと威嚇する騒ぎとなり、これを引留めるものもあつたが、酒呑みの癖としては、おさまらぬ心の中のモヤモヤが、折悪しくも居合せた梁瀬會長（當時社長）に向つて仕舞ひ遂に會長を殺すと彼一流の虚勢を張つたところ、會長は靜かに「數見君、僕を殺したら君は、満足かね、僕を殺したことがわかつたら世間では君にモウ誰も小使を遣らなくなるよ」と、たしなめられたため、遂に彼は破目板目がけてピストルを發砲したと云ふ始末であつた。兎も角、此の頃職人と云ふ



者は、まことに気があらく、運轉手の中にもタイヤ、レバーを振廻すものもある位で一寸した酒席には喧嘩はつきものであつたが、此の正月の事件は、あまりにもはすぎて今でもハツキリ記憶をしてゐる。

後この高木は會社から解雇され、數見はそれから日米スター自動車社長の相羽さんを書き立て、相當なことをしたらしいが、彼の晩年は決して幸福ではなかつたと聽いている。(梁瀬喜作氏談に依る)

### 十三、鎧持參の老校長

震災の前年、それは或る日のことでわつた。梁瀬長太郎氏の五番町の邸を訪れた白髯の老人があつた。大きな包みを大切さうに両手にかゝえ、客間に通されると、その包みを傍らに置き、出迎へた梁瀬氏に向つて話しはじめた。

「貴方は憶えて居られるかな、昔貴方がまだ小學校の生徒であつた時わしが生徒たちと約束したことを」

この老人は嘗て梁瀬氏の郷里に近い八幡村小學校の小林喜三郎校長であつた。小林老校長は何十年かの長い間、自分の教へ子達の行方を獨り靜かに見とつていたのである。

あの教へ子は學校卒業後どんな人間になつた、この教へ子は今どうしている。と老校長は、遠い昔の記憶をまさぐり乍ら活社會に飛出した教へ子に多大の關心を持ち順調に延びていつた教へ子あればこれを激勵し不幸中途に挫折した教へ子のことなどを聞けば其安否を問ひ、そうして長い年月教へ子達の行方をちつと見守りながら、何年か前に恒例の如く毎年これらの教へ子達と交した約束の言葉に思ひを走らせるのであつた。

「一番世に名を成した者には鎧を二番目には槍を……」其處で老校長に最も強く映じたのは外ならぬ梁瀬長太郎氏であつた。

「校長先生と」梁瀬氏は懐しさに耐えない面持ちで呼びかけた。

「勿論、私は校長先生が私達に約束して下さつた言葉をはつきりと憶えてゐます」

「さうでしたか」

白髯の老校長はさう頷くと、傍らの包みを解いて、それを梁瀬氏の前に置き

「わしは四十年の間、みんなの成長をちつと見守つてきました。そこでみんなにしておいた約束を今果さうと思ふのぢや。この鎧を受け取る生徒は梁瀬さん、貴方ぢやつたよ」

老校長の目には、満足と感謝の涙が宿つた。がしかし、それにも増して、感激にむせんだのは梁瀬長太郎氏であつた。四十年の昔、村の小學校の庭で遊んだ頃の自分の姿が、走馬燈の如く駆けめぐり

梁瀬氏は心から老校長に

「私の今日ありますのは、凡て先生の御恩に依るのであります私は……」

そこまで云つた梁瀬氏の言葉は、感激のために途絶えてしまつた。

老校長は靜かに云つた。「貴方は非凡な生徒ぢやつた。わしははつきりとそれを懂えてゐるだが、貴方が今日の成功を勝ち得たのは、貴方の非凡のおかげではありませんぞ。努力。さうです。努力が貴方を今日のようにしたのです」

かくして此の古びた鎧一具は、梁瀬氏の應接間に飾られ梁瀬氏の半生を物語るかのようにあつたが偶々海外旅行の留守中、かの大正十二年の關東大震災で惜しくもこれは焼失してしまつた。

#### 十四、海外旅行と關東大震災

##### A・海外旅行

大正十二年五月十日、この日に、家内を連れて自動車のことを通り見たいと思ひ、歐米を一まわりやつてみようと思つて横濱を出て行つた。この時の船は大洋丸であつた。

まつさきにハワイを經由してサンフランシスコに上陸フェアモント・ホテルに到着して方々を見物して、それからロスアンゼルスへ行つて上陸早々愕いたことは如何に此のカルフォルニア州は自動車が多て走つて居るかと思ふことであつた。この州は米國中で一番自動車が多く、四人に一臺の割合に自動車があると聞き、全くびつくりした次第である。

「註」これは一九四九年五月の調査に依る數字であるが、アメリカに於ける自動車の登録臺数は

乗 用 車 三二・八七〇・五二八臺

トラツクとバス 七・三二一・四四四臺

内、カルフォルニア州は 三・〇九〇・〇〇三臺

となり。過ぐる廿七年前と同じく今尚ほ依然、此の州がアメリカ各州の中で第一位の登録臺数を占めてゐる。

幾日かを太平洋沿岸で過しサンタフェ鐵道でグランド・キヤニオン、コロラド・リバーから流れたあの溪谷や大きな瀧を見物したりしてシカゴを通過し、デトロイトには後日、ゆつくり立寄らうと思つて先づニューヨークに直行した。

紐育に到着して私が代理店をしているゼネラル・モーターズへ出かけて行つた。この時分にはゼネラル・モーターズに於ける總てのラインの代理權を、私が日本で一人でもつて居つて、カデラツク、ラサール、ビュイツク、オールズモビル、ボンテアクがなくて前の名前のオーツランド、それに、シボレー、GMCトラツクと云ふ、ラインの代理店を梁瀬自動車一軒で持つて居つた譯である。



殊にビュイックとカデラックは、ゼネラル・モーターズ、コーポレーションという綜合會社になる前から代理權を取つていた車であるが、一九一二年頃には單獨にはビュイック・モーターカー・コンパニーがあつてビュイックの代理權を契約していた。

この様に私は古いデストリビューターであつたから、ゼネラル・モーターズの中でもスーパー・デストリビューターの仲間に入つて居つて、其の取扱も鄭重を極め、デイラーの中でもスケールを大きく見られて居る立場であつた。そこえ私達夫妻が出かけて行つたものであるから、下にも置かぬ待遇を受けたものであつた。

殊にレデー・ファストの國に、私が日本から遙々家内を連れて行つたものであるから、米人のしきたりからして、夜會なども幾回も開いてくれたり、オペラなんぞにも案内されたり、破格の待遇を受けて全く満足したものであつた。

斯くて幾度かの夜會やオペラに招待されたりしている裡に或夜、紐育に在る有識者十數名の御歴々が揃つて私達を主賓にしてレセプションが開かれた時、主催者側が一應のテーブル・スピーチをやつた後、私にも一つやつてくれ、下手でも宜しいから英語で喋つてくれ、此こわい申入れたので致方なしに私も一寸起つてテーブル・スピーチをやつたものである。私は日本で英語を稽古したばかりで、外國で實際の英語を勉強した経験がないものであるから、ビジネスの言葉は少し位識つてい

ても、冗談とか、一寸くすぐるような英語というものはテンデ知らなかつた。しかつめらしいリーダーのもので讀んだ、英語を少し許り知つて居るものであるから、思い切つてこのリーダー英語でテール・スピーチをやつてのけた。これがすむと一堂は拍手喝采を送つてくれたが、この時會衆の一人が私に斯んなことを云つたのを覺えている。

私は、お前の英語を聞いて驚いた。丁度學者からセークスピア時代の英語を聞いて居るような氣がしてならなかつた。お前はえらい學者だ、實業家ではない。

といつて冷やかされたようなこともあつた。

それからデトロイトへ行つて、カデラツクの製造工程や他の車に類例のない製造の仕方を色々とみた。ミシガン州のフリントという街は、全市がビュツクの部品の組立のために出來た所で、ビュイツク人ばかりが住まつている街で私も全く愕いて見物をした。

デトロイトの中心にシボレーの工場があり、よく見物した。此處でサーピスは如何にすべきものか委しく説明されて、これからシボレーを大いに賣出すつもりになつた、アメリカの中部で、サボテン畑の中にずうと汽車に乗つて何日もかゝるような荒野が續いて居るところに、あの大がゝりな宣傳廣告をかゝげて居るのを見て來た譯であるがこれ程 G・M 社は勢込んで、シボレーの賣出しをやろうと計畫して居た頃の事であつた。これは既によく賣出されているフォードに對抗してうんと賣出すつも

りであるから君も大いに骨を折つて貰ひたいと語つていた。

## B・大西洋を渡る

シボレー工場を見終つて、アメリカに滞留することは二ヶ月半にしてニューヨークから大西洋の航海に移りイギリスへ向つたのであるが、船は *Equitania* エクキダニア號という五萬トンばかりのもので紐育からイギリスのサザンプトン港に上陸してロンドンに留り早速ウーズレー會社を訪問した。

その頃、私はアメリカの車の外にイギリスのウーズレー、この車は後日石川島造船所と提携した車であるが、このウーズレーの代理権は一九一五年（大正四年）梁瀬商會を創立する以前より三井物産繼承のものを持つていたのであるから、この會社に案内された。同會社はバーミンガムに工場を持つていた。

イギリスに一ヶ月半程滞在してドーバーを渡つてフランスへ赴いた。

フランスへ行つたところが、現在、參議院議長をしている佐藤尙武氏がパリでフランス大使館の參事官をして居た。佐藤尙武氏は私のクラスメートであつたので、彼の案内でフランスでも仲々容易に外人に見せない所のルノー車の工場、其他を大使館という肩書でうまく見せてもらうことが出來て

非常に有益なるものを掴んだ次第であつた。

それからイタリーへ渡つてフィアットの工場をよく見せてもらったが、この工場で珍らしくも、工場の屋上がフラット・ルーフになつて居て試運転コースとして使つて居たのには驚いた。また、茲の工場に於けるスプリングの作りかたが特長で、これをみて感心したこともあつた。

イタリーの車をよく考えてみて、この當時これでは駄目だと考へつた點があつた。それは、フィア



ットの工場で造つた車を舟に積込むために港まで送るのに牛車に乗せてひつぱつて行くという状態であつた。この國はガソリンと縁が遠いため、港に送るに牛車などを使うのだと思つたが、それだけにこの國の自動車には將來性が無い、將來も自動車は餘り發達しない國だと思つたわけであつた。

(上寫眞はフィアット工場全景  
下寫眞は同社の屋上にあるテストコース)  
それからドイツに廻り、スイツツルのジエネーブの湖水の周りで





御馳走を食べたり又は船遊びをしたりして又ふたゝびパリへ歸つて来て、それからマルセイユ港を出て船に乗り、地中海を廻り印度洋を渡つて日本へ歸ろうという段取りをきめていた。印度洋方面は私もかつてボンベイに一年程居たことがあるから特にまた同じコースを取りたいとも思はなかつたが家内が初めてあるから印度洋を見せてやろうと思つてマルセイユの方へ出ようと思つた所、この頃なにかと氣が差すので、再びアメリカを訪れあの自動車をもう一度見直して歸りたいという氣がしたので、急にパリを出發してルアーヴル港から大西洋の方へ行くことに決心を變更した。そこでルアーヴルの港から船に乗つて出かけたのが、つまり關東大震災の大正十二年九月一日だつたのである。このとき私達の乗つた船はパリという大きな汽船であつたが、これで大西洋の航海を初めたわけである。この航海は五日ばかりかゝる航程であつたが、船ではよくデツキを出て運動した。乗客は一杯乗つていた。

### C・關東大震災の飛電

所が、船の電信係の男が、デツキへ出て居る私の所へかけつけて来て、せい急に「お前は日本人だらう」と問えかけるので「そうだ日本人だ」と答えてやると、「今日日本には大變なことが起つて居る

東京や横濱は目茶苦茶になつてしまつたようだ。このニュースの中には、富士山の半分が割れてしまつて、寶永山の方がどこかえふつとんでしまつたといつてゐる。横濱港の入口には大島が出現して船は横濱港え入れなくなつてしまつた。そして伊豆の大島はDisappeor (ヒスアツピア)してこの大きなCaramity (カラツタイ)——災害——によつて東京と横濱で約三十萬の市民が惨死を遂げていると云ふニュースが來てゐる。これから一切の陸地から入るニュースを發行して、君が船に居る限りすぐ知らしてあげよう。ニュースペーパーの附録のニュースにも續けてのせてあげるからよくみる方がよい」と親切に云つてくれたのであつた。えらいことになつたものである。内容が餘りはつきりと判らなかつたけれども、母國にそんな災害がまき起つたとしたら、こりや大變なことだと全くびく／＼ものであつた。

そのときにはニューヨークに來てゐた私の所の出張員が、三井物産の中に同居させて貰つて居たので、その清水と一緒にいつて行つてくれた。清水は色々と語學の力があり、フランス語なんかも獨學で研究して居り、充分に用事が足りたので非常に便利して居つた。この清水が船と一緒に行つてくれるので、今日の日本災害のニュースは、事件が大きそうなので二人でどうしたものかと相談して居る所へ、家内がこれ聞き知つて「何かできましたか」と云つて來た。

今回の事件をどの程度まで女に話して聞かせたら良いものか、どうしたものかと清水とも相談した

これからニューヨークへ着くに四日もかゝるし、大事件な丈に毎日それからそれへと、聞かれるだらうから、何んとか都合のよい話にしておかなければならないと思つて、どんな話にしておこうと清水と二人で相談したものであつた。そして次のように話した。それには大體これまで來たニユースをとりまとめて見ると、東京の眞中はつぶれてしまつて、多數の人間が死んでしまつたことは明白であるから番町の住宅は全焼、家の子供なんぞも大部分死んだらしい、おそらくは死んでしまつたことゝあきらめて居つてくれ。生きて居つたらもつけの幸い、親達も死んだにちがいない。普通に考うては生きてゐる状態ではない、大地震も、かつてないような大きなものだから、すべて死んだものとあきらめてくれ……と話したわけであつた。

家内は、これを聞いて全くびつくりして、ケビンへ歸つてしまい、それから寝たつきりに出て來なくなつてしまつた。私は仕方がないので、一寸したものをとつては家内に食べさせておき、私はテールに出で世間はなしを聞き集めて居つたが、かつてない大地震なのであるから、この大災難のあとしまつはどうしたものか、それにはこれに類したものゝ歴史をしらべて見る方がよいと云ふ判断をつけ、船中の圖書館に入つて、色々な世界のこの種の災害についての歴史を調べる仕事に取りかゝつた。

歴史によれば、ロンドンの大火災は二〇〇年から二三〇年前に起きて、ロンドンの市街はほとんど

全部焼けてしまつてゐる。その頃のロンドンの市街の建物は全部木造で、これが全焼したわけである。焼けのこつた家が、その二〇〇年後に、階段のステツプを踏むとつる／＼になつた古びた料理家となつて残つて居るのに、私も案内されて其處で御馳走を喰べたこともあつた。この大火災の後に不燃焼の建物が揃つて出来て來たので復舊が思ひの外に早かつたという記録も發見した。

又、サンフランシスコにも大震災があつた、この歴史をしらべて見ると、その復興は案外早いもので、復興を相談する人間の活動が主になり、何を仕様かという人と人との動きが活潑になされることによつて、復興が早められるのだということが解つて來た。このサンフランシスコの大震災のときには自動車というものがまだなかつたので、その歴史には觸れていなかつたが、人の動きによつて復興は早められるものだということが解つた次第である。復興のものは人間である。汽車でもなく何んでもない、たゞ人間だ、ということがわかつたわけだ。

其處で私は腹をきめた。この際は大きいそぎでニューヨークへ行つて、人間を乗せる自動車の用意をして見ようと斷固として肚をきめた。

#### D・八面六臂の大活躍

ニューヨークへ着くやいなや、ニューヨークのブロードウエーの三井物産を訪れ、十五階の物産の



支店長にあつた。

ところが此處でも一騒ぎをやつていた。というのは、こゝにつとめている伊藤というのが、東京の震災で伊藤の家内が焼け死んでしまつたという電報が親類のものから届いたので、伊藤は悲觀のあまり今朝こゝから投身して死んだばかりで騒ぎ立てゝいるのだと云う話をしていた。所が不幸なもので伊藤が死んでしまつた一寸あとで、また電報が届いて、死んだと思つた家内が安全であつたから安心せよといつて來たので、今、てんてこ舞して居る所だという話であつた。

東京へは何回電報を打つてみてもうまく通じない。横濱も同じことである。仕方がないので高崎に假出張所を設け、その假出張所をつかつて電報を往復した譯であるが、アメリカからは取れる丈の乗用車を持つて日本へ歸らうと決心したわけである。

そこで私はゼネラル・モーターズの本社へ出かけて東京大震災の跡を一日も早く回復するには絶對乗用自動車が必要であるから、船腹に積める限りの乗用車を積んで貰いたいと交渉をした。其頃G・M社にはビュイックの小型車で四箇車のいゝ車があつたのでそれを積込むよりに相談した。

その時G・M社の言分によると「時にお前は頭がどうかしたんではないか、今この災害にあつたとき乗用車なんかを持つて震災地に乗り込んでどうなるものか、少し休んで頭を冷してから考えた方がよ

いではないか、この際トラックの方を持つて行くのなら先づ、いゝとしても、乗用車を持つて行くなんぞとは、お前の頭の正確さを疑ふ。お前の方も考えてくれ」という返答であつた。

私はすかさず「船中で圖書を検べて来て居るし私の見込み違ひは決してないと思ふ」と言い張たがG・M社側としては直ぐには納得できかねていた。

そのとき私は三井物産へ行つて、ニューヨークで生糸を賣つた金がある筈であるから少し金を貸してくれないかと相談した。今は日本から爲替を組ませることが出来ない状態であるから何百萬圓でもよいから貸してくれないかと云つたが、今日乗用自動車を積むということは考え方が違つていて、われ／＼には賛成できないから金を出せないと云つて断はられてしまつた。

仕方なしに正金銀行へ出かけ、乗用車の積込みは本當に見込みのある仕事であるから金を貸してもらいたいと説明した。正金では物がわかつて爲替を約束してくれた。

そこで勢を得てG・M社へ出かけ、また相談をして、ビュイツクの四氣箒ものと一九二三年式シボレー乗用車とを結局、二千臺の約束が出来てしまつた。

次は船腹の取り合ひであつたが、その頃は神戸の鈴木盛んな頃であつて、鈴木は木材を仕入れて船腹をとつてしまつた。それに割り込んで二千臺の内五百臺の自動車を積み込むことが出来た。船は天洋丸というので、第一回のサンプル・カーとしてこの五百臺をまず震災地の東京へ送るわけであるが

私達も幸いにこの天洋丸で自動車と一緒に内地へ歸る準備が出来たわけであつた。

その時になつて東京の様子も段々詳しく解るようになり、家の焼けたことは明瞭であるが子供が皆死んだとは書いてはない。生きて居るらしいという事も、ほゞ明瞭になつて來た、子供が生きて居るということが解つたので、家内も急に元氣が出て來たようであつた。

このように安否を氣にしながらも船は西へくと進み、その年の十月四日、天洋丸は無事に横濱の港へ入つたのである。

### E・歸朝して寸暇なし

横濱の港近くに私の乗つた天洋丸が近づいたが、かつて大西洋の中で聞かれたような島も横濱港の入口には浮上つた様子もなく、船は無事に入港できた。

波止場に着いた折、普段とは横濱がちがつて、波止場の側の所に板が敷いてあつて、相當長い板の橋をわたつて上陸しなければならぬように出來ていた。所がこの板の橋を渡つてみると、ぶくくして、足場がなんとなく變で仕方がなかつた。

「この板の踏み心地が變ですわね」



と話しかけたら、

「その足場の下は、みんな人間の死骸ですよ」

といわれてびつくりした。人の體を足場にして板を渡して上陸するという方法だつたのには、まづ驚いた。

私共の横濱支店は櫻木町にあつたが、焼けてしまつた。横濱支店の裏に紅葉坂という坂があつて、大きな堀があつたが、その堀の中には、これまた人間の死骸がスズコの様にならんで居た。店の横手には西瓜屋が立ちならんで、さかんに炎天下西瓜の切り賣りをやつていた。

私もえらいことになつたものだと思ひ乍らも、大勢の人に迎へられて無事内地へ歸りつくことが出来た。

そのとき、芝浦の私の工場が焼け残つて居つたので、其處に船の荷を揚げデリバリーする事にきめた。

日本へ歸つてみると、商賣の人達は復興物資を動かすために、先づトラックが賣れると云ふことを云つていたが、私の信念は頑として乗用車一點張りに變る所がなかつた。



この頃同業者としては、日本自動車、エンパイヤ（少さかつた）安全自動車（之はあとから生れたものである）等が皆營業をやつていたが、いづれもトラツタの賣出しに懸命であつた。こうして、東京の業者が皆んなで自動車を賣出して見た所が、全く不思議な成行きで、乗用車を持つて居る店は、いくらでも賣れるという需要になつたが、トラツタの方は反對に品物があまつて、賣れ行きがはかばかしくないと云ふ實情であつた。

私は此の時に一回の船で五百臺入荷した車をまたゞく間に賣りつくして仕舞たのであるが、まだ買手が多くて全く困り抜いて仕舞つた譯けである。その時は乗用車を全部芝浦の工場で組立て調子を見て引渡して居たが、間口百三十間もあつた芝浦工場は、入口が自動車と人でふさがれる始末で、餘り買手が多かつたので、ついには籤引びきで販賣を初めた程であつた。所が斯うなると妙なもので、車にプレミアムが附くようになり、一臺につき五百圓と云ふ巨額に上つた始末だつた。

その後アメリカからの船で、先に注文した二千臺の乗用車が順次着いたが、結局、十月から十一月、十二月、それと、翌大正十三年の一月、二月及び、三月の六ヶ月間で、全部乗用自動車を賣り盡してしまつたわけであり。而もそれでも尙足りなかつたことも事實であるが、之で一先づ臆りを附けた。

この芝浦工場に於ける自動車の引渡しは、輸入自動車の梱包を解いて、組立て、充分に、アヂヤストの後、お客に渡して居た。それで私の工場で自動車に熟練の職工を集めてやらせたが、二百名の

職工を集めて組立させて、月に百臺の車しか組立て出来ず、二百臺しか客に渡してやる事が出来なかつた。

然るに其後、氣付いた所に據ば此の方法は間違いであつて、自動車を組立てることなしで箱入りの儘でお客の手に渡してやる様にすれば、まだ、まだ、早く品物を捌いて仕舞ふことが出来たわけであつた、此頃の對象となつた需要家の多くは組立てなんか自分で出来たのであるから、初めから箱渡しした方が、どれだけ能率的であつたか知れなかつた。然し私も終りの方になつては、このことに氣付いて五百臺ほどを箱渡し販賣をやつた。

#### F・山条さんも見込み違ひをする

乗用車のこの仕事は私の見込みのよかつた仕事であつたが、私の先生である三井の重役山本条太郎氏が、私が外國から歸つて來た時、草鞋履姿でやつて來て、今度アメリカから乗用自動車などを澤山持つて來たそうだが、乗用自動車などはこの日本で賣れるものではないから止めたらどうだ、二千臺の自動車を買つて來たなどは、全く大間違ひいだ、全部の車を捨てなければならぬ時期が來るのだか、いまの中に轉賣するなり又はキャンセルすることが出來ないのか……と云つて來られたのであ

つた。

山条氏は更に言葉を續けて、

此の未曾有な珍事にぶつかつた眞先にすることは人の住む家だ、その家を建てるには、材木が大量に入る、此の工場で室蘭（北海道）から木材を船で持つて来て製材工場をするため機械を買はうではないか、と申出でたが、これは種々な事情で取止めになつて仕舞つた。それで同氏は日本人の生活必需品として缺くことの出来ないものを商ひしなければならぬと思ふて、鹽鮭を大量に注文して貨車に十杯ばかり持つて來たのであるが、君の芝浦工場の一部を（今は車庫になつてゐるが）この鹽さけの貯藏のために貸してはくれまいか、というのであつた。

山本条太郎氏はこの時「エビス商會」を起つて吉崎良造を支配人として、古くから罐詰類やビールを取扱ふ、國分商店の向うを張つて先々は罐詰類などを大々的に商ふと、いう計畫であつた。

私は其處で、こんな風に話した。

このどさくさが少し静まつたならば、鹽鮭の取扱いに馴れた人は新しく鹽鮭の扱いをするようになるであらう。ビールも罐詰も國分のような馴れた人達がごく近い中に手をつけて、また昔のように盛んに品物を取扱うようになるのは當然である。自動車はやつぱり、自動車になれて居る者が取扱うのが間違いのないことである。一般の罐詰類でもりビー製罐詰などでも結局は國分のような専門の罐詰

屋には負けてしもうのが當り前で、誠に残念乍ら新規の鹽鮭屋は感違ひではあるまいか……と。

やがて山本 条太郎氏は多量の鹽鮭を引きとつて、私の芝浦の一千坪の倉庫の中に、三百坪程山のようにこれを積上げてしまった。所がこの鹽鮭は餘り鹽が強くて東京人には歓迎されなかつたため、日の經つにつれてこの倉庫から異様な臭ひが出て来るようになった。それは下積のものから腐れかかつて來たわけである。蠅がぶんぶん飛び出す始末になつて來て、これにはさすがの山条さんも閉口してしまつて、大笑いをした次第であつた。鹽鮭はこのようにして賣れ口が悪かつたけれども、私の方の乗用車は毎日々々とん／＼拍子で賣れて行く有様で、山条さんも全く見込みちがいをしたと、話し合つた。こともあつた。

### G・お札さつの始末に困惑する

震災直後には、未だ銀行が開業して居らなかつたものであるから、自動車の買人は、すべて自動車を現金で支拂つたものである、一臺で數百、數千圓近い金が、すべて現金で渡されて行くので一日二十臺も即賣した日などは十何萬圓にも近い金が現金で手に入るわけである。しかもその頃は今と違





つて十圓札が多かつたので、この十圓札だけで十萬圓二十萬圓となると其の量の嵩張ること大變で、最初は金庫の書類を一切出して其の札束を卷脚絆、地下足袋姿のものが無理矢理に金庫に押込んだりしたもの、幾日も経つと會社に常備された金庫は何れも一杯になり遂には戸棚を開けて、これに納めたものゝ、外へ出た者は大袋につめ込んで毎日の様に持歸へつて來る始末で、ホトホト困惑して仕舞つた、また此頃は官廳方面では徵發令書を持つて自動車を受取りに來て、その支拂は多くは出向いて現金を受取るので、或時などは内務大臣官邸（當時の内務大臣は後藤新平氏であつた）に行けば應接間に札束が恰も煉瓦を積みかさねた様に天井にまで届き、支拂をする者は箕の中に札束を容れて兩手でこれを運んでくる光景すらあつたのである。

こうして居る内に（此の中間記事は梁瀬喜作氏談による）

震災後は又泥棒がよく流行したもので、したがつて此の金の保管にも一苦勞した。何せ銀行が開いて居ないのであるから、この大きな札袋を自分の手で守らなければならぬ、そこで社内の床下に大きな穴を掘り、その穴に札の袋を入れ、それに板を乗せて土をかぶせ、みんなで交替に張り番をして盗

難をまぬがれた、という面白い話もある。

## II・甘粕憲兵大尉の登場

この震災のどさくさの中で、例の甘粕大尉という軍人が居つて、ある日一個分隊の兵をつれて剣付鐵砲をふりまわし乍ら芝浦の工場へ入つて來たことがある。「タイヤを出せ、そしてありつたけのガソリンを出せ」と叫鳴るのである。「ガソリンを出さなければこれで突き殺す」というので時の經理部長鈴木武平氏（鈴木義五郎氏の兄）が「タイヤは御客様のものばかりでありません」と答へると、其日は歸へつたが、二、三日經つと自動車の徵發令書を持つてやつて來た。

それで、こんな亂暴ものにかまつて殺されてはいけなと思つたので、「致方がないからガソリンをやつてしまえ」といつて、工場にあるものを全部出して持つて行かせたこともあつた。

この甘粕大尉は、震災のどさくさの中で、當時の有名な社會主義者大杉榮と伊藤野枝を殺した人である。その後滿洲國へ渡つた筈である。この人は人傳に聞くと、後に滿洲國の共和會の役員となり滿洲の理事長をして居る内に昭和二十年の終戦となつて自害したという。震災當時は全く張り切つた、男であつたが私にとつては、おそろしい人であつた。

## I・救助品とアメリカのヒュマニテイ

日本の震災の状態は、今回の戦争と違つて、各種の建築も早く出来上り、アメリカからの救助物資も澤山送られて、芝浦の埋立地にこの物資が山のように積まれたものであつた。所が日本の役人の計畫がまづかつたために、折角の救助品（特に食料品）を澤山腐敗させてしまつた始末で、アメリカの人から大いに叱られたことも知つている。

ニューヨークやサンフランシスコのアメリカ人は大變に日本人を最良して、彼地にあつては、日本はこの大災害の下にあつて非常なる悲惨な状態にある、同じ人間として絶対に、この國民を救はなければ人道に反するものだ……と叫んで、あの町でもこの町でもレディ達が先頭に起つて嗚り訴えて義捐金を集めることに成功して、思いがけない大金が日本に送られて來たものである。これがよく配給されたならば大變な額であり、物資にして大變な量のものであつた。オレゴン・バインなども建築材料として、あんな立派な良い材木が日本へ送られて來るのも實に早かつた。この大震災を通じて日本がアメリカの救援を受けた量というものは實に尨大なものであつた。然しこの状態が、その後、段々に變つて、斯して受けた嘗ての同情も遂には逆になつてしまつて、不幸な日米戦争を惹起してしま

つたことは、實に残念至極である。

此ように凡ゆるアメリカ人は日本に對して情が強かつた、そして、また、その同情心も深かつた。それ丈に日本に裏切られるとなると、反對に日本を憎む心も深いように思はれるのである。かつて日本へ渡つて來たハリスやペルリーにしても、熱心に日本の爲にやつて見ようという決心で、遣て來たのに相違がない。日本を開發してみようと思つてやつて來て、日本人に對する同情も深かつたと思ふ。又それだけに怒るときも早かつたのである。

### J・山条さんのメンツ面子を立てる

私はこのようにして二千臺の乗用車を震災直後、内地で賣り捌いてしまつたのであるが、はぢめアメリカで二千臺の自動車を仕入れるとき、三井へ行つて金を都合して貰いたいと願つたが承知されなかつた、當の相手は三井の常務理事安川氏であつた。私もかつて安川氏の許にあつて三井で厄介になつて居た人間であるが、私が東京へ着いたとき、山条さんから一寸來てくれというので出かけて行つたことがある。所が山条さんの云はれることには、

「三井の安川が來て、梁瀬の今回の自動車輸入は何んとかして三井扱いの形にしてもらへないか、



口銭はOne%でもHalf%でもよいから、是非、三井扱いにして貰うように、梁瀬に話してくれ」と、云つて行つたと、いうのであつた。

然し私は、かつてニューヨークで、あれほど苦勞して三井にお願いしても、けんもほろゝの挨拶で金を借してくれなかつたのであるから、今回の自動車輸入は全く、三井とは御縁のないことであると返事したが、何んとしても三井扱いにして顔を立てて貰いたいというので、遂に其の口銭二分と云ふ條件で、これを承諾して山本条太郎氏の面目を立てた事がある。

## K・餘話 二篇

「どんな時でも人から動く」

その頃の自動車（乗用車）の内地賣價は、シボレーが三千圓、ビウイクの四氣筒ものが五千圓から五千五百圓程度であつた。尙、特筆することは震災後の新車は當局のどうした處置か判らなかつたが走る自動車にナンバーはなく、ノウナンバー No. No. であつた。

私は關東震災のような大災害に直面して、あの當時つくづく感じたことが一つある。それは、船中

で諸外國の災害復興の後始末を書籍で調査した結果にもよるのであるが、まづ復興の相談のはじめは人間である。人間の決心が先に立つものである。建築屋を頼むにも、その行動が人間から始まつて來るのである。人間の決心が行動となり、行動するために自動車を必要とするといふ結論になつたわけである。つまり何か面倒なことがあれば、先づ人間の動きから、すべてが始まつて行く、人間の氣持ちが先に動かなければ何事も成就するものではない……ということである。

### 〃雷のように叱る山条さん〃

私が大正十二年海外旅行中は、その留守中の店のことを一切合切、山本条太郎さんをお願いしてあつた。歸つて來てから社員に聞いてみると、山本条太郎さんは恐しい人であつたと語つていた。店のことになるかと雷様のよう叱る人だつた。

「こんな自動車の仕事なんか駄目なんだから、俺の鮭の仕事でも手傳え」  
なんて度々叱られたと社員幹部が述懐していた。(以上は口述速記に依る)

## 十五・どの外國車が儲かる

私が大正二年に自動車の仕事に手を染め、今日まで諸外國の車を取扱つて來た成績から見て、その利益の割合をさぐつて見ると大體、次の通りになる。

アメリカの車は極めて割安で、而も用に足りて、部品がふんだんにあるために、之れを取扱う人が一番便利で利益が多く、取扱ひ口錢が多くなつてゐる。

イギリスの自動車はその時にも依るのであるが、これは部品が少くて口錢の率が少いために、取扱つて見て割合が悪い。

フランスの車を取扱つても大體イギリスの場合と同じである。

イタリーの車は、まますンプル車と實車との差異があつて、腐つた部分のある車や色々と缺點のあるような場合がある。イタリーという國は貧乏國であるため、材料を儉約する場合が多く、錆びたスチールでも、ある部分には使つて、輸出して來るといふ貧弱さで、ごまかしが間々、行はれる國柄である。そのために利廻りがすこぶる悪い。

私は從來大體に於て歐米各國の自動車を取扱つてみたが、利益率の多い車を順序立てゝみると

- 一、アメリカ車
- 二、イギリス車
- 三、フランス車
- 四、ドイツ車
- 五、イタリー車

のようになる。同じアメリカの製品でも、第一級の自動車を取扱つてみると、品質は均一で、而も年々進歩を遂げて、品物に絶対間違いがないということが言えるために、内地に於ても販賣の成績が宜しく、小さい製造家のものを取扱ふほど割りが悪くなつてゐる。つまりゼネラル・モーターズの如き會社の車を取扱うて居れば、極めて利得があるようである。その次には、フォード會社のものであり、ついでクライスター、スチュードベーカー、ナツシュ、ハドソン、ウイリス・オーバーランドとなるが、この後段のものになると骨折甲斐が少いという結果になりやすいと思う。イギリスのオーステンのようなものや、フランスのルノー、イタリーのフィアットの如きものは割りが悪い状態になるのはやむを得ないので、まして日本製品の自動車など取扱つてゐるものは、政府のお世話になつて而も販賣の利益までも規定されて仕舞うような次第であるから、結局うすい口銭で商賣をしなければいけないと言ふのは、之れはまた止むを得ない次第である。(以上は口達連記に依る)



## C・震災後の吾が國、經濟界

大震災に依つて自動車は激増した、自動車販賣は又大いに振つた、それで從來の業者が其の事業の擴充を圖つたことと言ふまでもないことであるが、また新規に、此の自動車業を開業する者も續出して大局的には吾が國の自動車は好轉の様相を示していた。

又此頃東京市電氣局では一口に千臺の自動車を米國のフォード自動車會社に發註して市内の燒失電車の復舊までの、場つなぎと云ふ計畫の許に乘合自動車の計畫を樹てた、これにして見ても震災後の帝都一圓に於ては如何に自動車の需要が大きくなつたか、窺ひ識ることが出来る。即ち斯うした時にアメリカからビユイツク・シボレーの二千臺と云ふ車輛を輸入して芝浦私設税關に、これを運び入れた梁瀬氏の慧眼は誰しも、たゞ驚嘆をするばかりであつた。

震災を機會にして吳服橋の社屋が全燒したので梁瀬自動車は京橋千代田館に本社を移し、一方に於ては芝浦工場は活潑に動いていた。

然し、茲に見逃せない事實と其の現實への逢着であつた。それは關東大震災による被害が、年が進むにつれて漸次表面に現れて來たことである。即ち國內的な財界不況と相俟つて、世界の財界も漸次

不況になつて來た。これは、世界大戰による損害と經費、それは大體四千億圓と見られていたが、これの金利は年三分とみても年に百十二億、五分とすれば、二百億となる。交戦國民は、戦後いや應なしにこれを支拂わねばならない立場に置かれてゐるわけであつて、このような高額の金利は容易に支拂い得るものではなく、必然的に其處に此の問題が當面を切つて來た譯である。

もしこの金額が國家と國家との關係によるものとすれば、政治的に棒引き、その他の方法をもつて解決する途は發見もされようが、戦債は個人が應募してゐるため、これの棒引きは私有財産の侵害となるので容易に決行できないことになる性質のものである。

それ故に交戦各國政府は、増税や國債の募集等のあらゆる方法をもつて、これを支拂うため、あらゆる努力を講じた。然し増税すれば國民一般の資本を徴收して仕舞ことになつて營業の基礎を破壊する結果に陥つてしまふ。又公債によつて、それに金利を支拂へば、公債は急角度に増加して行くだけである。二者いずれの方法をとつても結局は國民の購賣力を減少することになり、世界は刻々と不況の度を加えて行くだけであつた。

さなきだに今や自動車は國民にとつて缺くことのできない交通運輸機關であると考えられ居るにもかゝらず、財界不況で、然も國民の活動力が衰弱してゐる時にあつては、どうすることも出来ない自動車の賣れ行きは、はかばかしくなく、前途は頗る暗澹たるものがあつた、この最も悪い條件に逢

着して果たして、梁瀬氏はどんな處置で業界に臨んでいたろう。

#### D・背水の陣を布く

世界第一大戦と關東大震災の餘波は、事業界に苛酷の「寒波」となつて押よせて來た時、即ちその財界不況のどん底時代に、梁瀬氏のとつた手段は……

第一は事業の縮少であつた。つまり支店の整理である。歐洲大戦と關東大震災當時、全國に手を延ばし、京都、大阪、名古屋、横濱、博多、廣島、仙臺、秋田、松山、京城と、代表都市には何れも支店や出張所を設け活動したのであつたが、此どん底時代に這入つて、梁瀬氏は方針を一變して、大阪名古屋、博多の三ヶ所以外の各地の支店や出張所はこれを閉鎖して、残つた支店だけを極力活動させる方策を採つた。

第二は資本金の減少という方法を採つた、即ち梁瀬自動車株式會社の資本金公稱五百萬圓であつたものを拂込濟九十一萬圓に減資した。又梁瀬商事株式會社の公稱資本金百萬圓であつたものを拂込濟二十五萬圓に減じた。

一體に會社の資本金の減少といふことは、多くの場合、損失の大きな時に行われる。或は又株主が

その未拂込徴収を恐れるために採る手段でもある、しかし梁瀬兩社の減資は、損失があつたため斷行したものではなく、又株主から特に要求があつてやつた手段でもなかつた。

梁瀬氏が右のような方法を斷行したことには次のような理由を考慮したのだと考えられる。即ち、井上財政による金の輸出解禁の結果、吾國の國際信用は大いに低落した。時には高下があるが爲替相場によつて、これを評價すれば、五分の二又は五分の二半程度が國民經濟實力の程度である。したがつて政府が幣價の切下げを斷行せざる限り、國民は自ら進んで自己の資産を整理し、以て他日に於ける發展の準備をしておく必要があるといふのである。つまり現在一千萬圓であるとしても、これを實際的に見た場合は、かりに爲替平價の場合には一千萬圓の實價あらうが、爲替二十ドル（假りに對米に依つて計算し）となりたる場合は六割を減じたる四百萬の價值しかないことになる、若し二十五ドルの場合は五割を減じた五百萬しかないではないか、と云ふのが梁瀬氏の見解であつた。即ちこれが會社の減資を斷行した理由であらねばならない。

然し多くの場合、増資、擴張、これは誰でも容易になし得る、即ち勢に乗じた場合の進軍は如何なる凡將にも出来る業ではあるが、一度進んだ軍を改めて退却する場合は、事業を問題なしに縮少することは、凡庸の器の容易に爲し得ることではないものである。

梁瀬氏は、斯の如くして進むべき時期に際しては何人にも先んじ機を逸せずに進んだ、而して退く



可きに際しても、又々機を過たすに退いている。

「握飯を車の中に置く」

呉服橋に會社のあつた頃が、何やかやと一番忙しい思ひをした、毎日大抵晝飯を喰べている暇がない位で、私は何時も家人に命じて握飯を自動車の中に用意をさせて置き、どこでも氣が向いた時に、これをたべるやうにしていた。自動車の中で晝食をとる。これは誰にも氣兼ねる必要がなく、又時間的にも至極便利で、このため特に時間を一日の中で割く必要もなく、私のやうに仕事をするものには随分助かつたものである。(以上は口述速記に依る)

大正年間に於ける國産自動車生産概數

車種	臺數
ウィズレイ	二九四
オートモ	一九五
ダット	六〇
T・G・E	二五〇
其他	四〇
合計	七三九

年次	臺數
大正 8	12
〃 9	40
〃 10	28
〃 11	0
〃 12	5
〃 13	136
〃 14	127
〃 15	246

## 備考

右表、オートモの生産臺數の中には試作に屬し市販にならざりし約三十臺を含み、又ウーズレイ、T・G・Eの臺數の中には、部陸軍の分も含まれている（以上は會社當事者の資料及記録に依る）尙、明治より大正五年頃に亘り車名も附されず、且つ試作的なものが約一五・六臺製作されているものと推定されるが、これらは何れも公式の記録に表はれていないために除外してある。

## 吾國に於ける自動車年次使用狀況

	乗用車 バスを含む	貨物車	特殊車	合計	増加數	前年に對する 増加割合 %
大正12年6月	12.709	3.022	474	16.205		
13 //	17.939	6.394	668	25,001	8.796	35
14 //	21.002	8.162	1,051	30.215	5.214	21
15 //	26.856	10.619	1,218	38.693	8.478	28
昭和 2 //	34.074	14.176	1,425	49.675	10.982	28
3 //	42.015	17.871	1,825	61.711	12.036	25
4 //	54.115	25,218	2,138	81.471	19.760	31
5年 8月	58.690	29.744	1,682	90.116	8.645▽	11
6 //	63.917	32.926	2,232	99.075	8.959	10
7 //	66.906	34.531	2,478	103.915	4.840	5
8 //	68.224	36.117	2,462	106.803	2.888	3
9年10月	76.124	42.337	2,731	121.192	14.389	14
10年 //	82.775	48.135	3,949	134.859	13.667	11
11年 //	89.008	56.082	4,545	149.635	14.776	11

備考 △印は 1年 2ヶ月の増加數、増加割合を示す

### 國産會社の製造指數と外國二社の組立數

自動車製造事業法發令當時の比較		
年 度	國 産 車 製 造	外 國 車 二 社 組 立 數
昭和10年	2.350 (内小型車4.160)	30.787
// 11年	9.633 (内小型車6.324)	30.997

備考 上表の指數臺數にして外國二社とはフォードとゼネラル・モーターズを講ひ、表中に見らる通り此の外國二社による内地の組立臺數は總て貿易上となり、此の價格は30,000,000圓を超え、重要輸入品の一つとなつて取扱はる。

### 國產自動車工業確立前後に於ける自動車生産指數

年 度	内地會社 生産臺數	外國會社 組立生産	輸入臺數 (完成車)
昭和 4年	437	28.087	5.018
〃 5年	458	18.663	2.591
〃 6年	434	18.908	1.887
〃 7年	840	13.327	997
〃 8年	1.612	14.084	491
〃 9年	2.701	20.000	896

○備考 國產軍用車の生産數は本表數字中には含まず、尙此の表中特に著しい點は完成車の輸入臺數の減少と内地に於けるシボレー、フォードが部分品を輸入して組立生産を行ふに數量の多量にのぼることである。

### 國產自動車工業確立前後に於ける國內實働車數調

年 度	乗用車		計	貨物車 (トラック)	合 計
	自家用	營業用			
昭和 5年	7.718	50.972	58.690	30.881	89.571
〃 6年	7.763	54.658	62.419	34.837	97.256
〃 7年	7.504	56.778	64.282	35.939	100.221
〃 8年	7.723	59.010	66.733	38.199	104.932
〃 9年	7.970	62.511	74.481	41.059	112.540
〃 10年	9.213	64.795	74.008	46.918	120.926

○備考 軍用、官廳用等の實働車は此の表中に含まず

### バス事業者の使用車比率

#### 内外車共その總數

フォード	43 %
シボレー	41 "
ダッジ	4.9 "
其他の外車	6.9 "
國 産 車	4.4 "

#### 國産車だけの場合

ト ヨ タ	60 %
い す ゞ	17 "
ニ ツ サ ン	8.5 "
ス ミ ダ	8. "
其 他	6.5 "

(鐵道省の昭和14年調査)